HIEDAGASHIRA-A SITE

稗田頭A遺跡

――平成6年度県営圃場整備事業槻木地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書――

1995

茅野市教育委員会

HIEDAGASHIRA-A SITE

稗田頭A遺跡

――平成6年度県営圃場整備事業槻木地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書――

1995

茅野市教育委員会

序　　文

稗田頭Ａ遺跡はこの度県営圃場整備事業槻木地区に伴い、記録保存を前提に発掘調査を茅野市教育委員会が実施したものです。

槻木地区の圃場整備事業に伴う発掘調査は平成２年度より行われ、数多くの成果がありました。今回発掘しました稗田頭Ａ遺跡は平成４年度に行われました第１次調査に引き続いての調査です。前回の調査では縄文時代前期末から縄文時代後期前半まで継続的な集落址が発見されました。今回調査した遺構にも前回と同様の時期の中期後半と後期前半の住居址がみつかり、計50軒の住居址が発見され、縄文時代の大集落がこの地にも存在することがわかりました。

前回の調査で土器だけ出土し、遺構の検出が見られなかった平安時代の住居址も５軒検出されました。さらに、これらの住居址の中から茅野市内で４例目の緑釉陶器の碗と、御狩野遺跡に続いて２例目という鉄鐸が２つ発見され、世間の注目をあびました。鉄鐸の発見は、現在でも鉄鐸を保持している諏訪大社になんらかの係わりがあったのではないかと想像されます。また、緑釉陶器の発見や馬具の出土により、地方官衙との関連性が予想されます。

槻木地区で平成５年度に調査を行った稗田頭Ｂ・Ｃ遺跡は、縄文時代中期初頭の短い期間に廃絶してしまった集落址ですが、稗田頭Ａ遺跡は近隣の鴨田遺跡とともに比較的長期間存続した集落と考えられます。また、平安時代についてもこれまでは１軒だけの住居址が小規模な尾根に検出されるケースが多かったのですが、今回は５軒と比較的纏まった形で検出されました。周辺の稗田頭Ｃ遺跡や鴨田遺跡の住居址とともに考えていかなくてはなりません。調査の成果が考古学、地方史研究に十分に活用され、また、今後の埋蔵文化財保護のために役立つことを切望します。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会などの各関係機関、地元地権者の皆様の深いご理解とご助力により、発掘調査を無事終了することができましたことに、心から御礼申し上げます。

平成７年３月

茅野市教育委員会

教育長　両角　昭二

例　　言

1．本書は、長野県諏訪地方事務所長大西一郎と茅野市長原田文也との間で締結した「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財調査室が実施した平成６年度県営圃場整備事業槻木地区に伴う、長野県茅野市泉野に所在する稗田頭Ａ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、長野県諏訪地方事務所よりの委託金と文化財国庫補助並びに県費補助金を得て、茅野市教育委員会が平成６年度に実施した。調査の組織等の名簿は第Ⅰ章第２節５として記載してある。

3．発掘調査は平成６年５月20日から９月２日まで行い、出土品の整理及び報告書の作成は発掘終了後から始め、平成７年３月まで茅野市文化財調査室において行った。

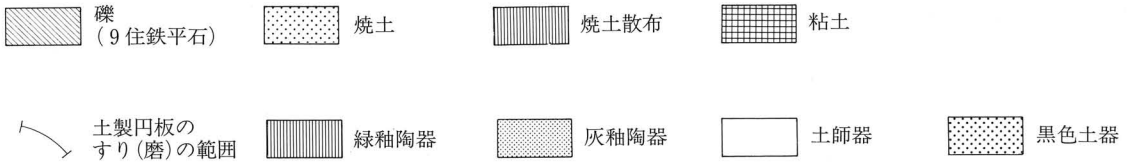
4．本報告に係わる出土品・諸記録は茅野市教育委員会文化財調査室で収蔵・保管されている。

5．本書作成の執筆は各節の末尾に記してある。

6．本報告書に掲載の遺構実測図は全て1/60の縮尺とした。

7．調査区の基準点は国家座標基準点による。遺構全体図の数値は平面直角座標系第Ⅷ系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。

8．本書の挿図で用いたスクリーン・トーンの意味は凡例で示した。



目　　次

序文　　茅野市教育委員会教育長　両角昭二
例言
第Ⅰ章　発掘調査の概要……1
　第1節　発掘調査に至るまでの経過……1
　第2節　調査の方法と経過……1
第Ⅱ章　遺跡の概観……4
　第1節　周辺の位置と環境……4
　第2節　遺跡の立地と自然環境……5
第Ⅲ章　発掘された遺構と遺物……9
　第1節　遺跡の層序……9
　第2節　縄文時代の遺構……11
　　1．縄文時代の住居址……11
　　2．方形柱穴列……21
　　3．焼土址……23
　　4．土坑……23
　第3節　平安時代の遺構……28
　第4節　発掘された遺物……34
　　1．縄文時代の遺物……34
　　2．平安時代の遺物……40
第Ⅳ章　調査の成果と課題……46
　第1節　縄文時代後期前半の集落構成についての予察……46
　第2節　平安時代後期の散居型集落の性格について……49
第Ⅴ章　結語……54
引用参考文献……55
付編　　1．稗田頭A遺跡住居址出土の植物遺体とその年代……58
　　2．稗田頭A遺跡出土鉄器の金属学的解析……61
図版
抄録

第Ⅰ章　発掘調査の概要

第１節　発掘調査に至るまでの経過

平成４年度の発掘調査の後、平成５年４月27日に長野県土地改良課と茅野市農業基盤整備課、茅野市教育委員会文化財調査室による保護協議が行われ、発掘の日程などについて話し合いが行われた。８月12日には長野県教育委員会文化課と長野県土地改良課、茅野市教育委員会文化財調査室による現地協議と事前協議が行われた。この協議で、稗田頭Ａ遺跡の継続調査の必要性が確認され、稗田頭Ａ遺跡の発掘の日程が最終的に決定したのは、平成６年１月18日の保護協議であり、５月より約4,000㎡を対象に発掘調査し、記録保存を図ることとなった。この協議結果については平成６年２月14日付５教文第７―12―55号「平成６年度圃場整備事業茅野市槻木地区にかかる埋蔵文化財の保護について（通知）」で長野県教育委員会より通知された。この計画に基づき、平成６年４月28日付「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」を取り交わした。それによると総額11,500,000円（農政負担10,120,000円、文化財負担1,380,000円）で事業を行うこととした。

第２節　調査の方法と経過

１．調査区の設定

試掘調査によって調査区を確認し、遺構の広がる部分で重機を用いて表土除去を行った。この結果、本調査面積は4,000㎡となった。これは稗田頭Ａ遺跡全体の1/3にあたり、前回（平成４年度）調査分の約8,000㎡と合わせ今回の発掘で稗田頭Ａ遺跡はすべて発掘したことになる。遺構の分布状況により調査区を３ヶ所に分け、東よりＡ区・Ｂ区・Ｃ区とした。
グリットについては、調査範囲内に設定し、遺物の記録、遺物取り上げの基準とした。グリットの基準は、公共座標ｘ＝240、ｙ＝－24,440を基準点とし、この基準点からＡ・Ｂ区は一辺10m、Ｃ区は１辺２mのグリットを設定した。ベンチマークは1,040.361mを設定した。

２．発掘調査の経過

平成６年５月20日より遺跡の範囲を確認するために重機による試掘調査を行う。試掘調査の結果、Ｃ区は東側が水田造成時にかなりの削平を受けていたことが判明した。西側は撹乱の度合いも少なく縄文時代の住居址や土坑が多く検出された。Ａ・Ｂ区は耕作面からローム面までが非常に薄く、撹乱を激しく受けていたが、平安時代の住居址を５軒確認することができた。Ａ区からは土坑が１基確認され調査区に設定した。

試掘調査終了とともに５月25日より重機による表土剝ぎをおこなった。今年の夏は降水量が少なく、遺構確認や発掘調査には頻繁に散水を行った。航空測量を８月23日に行った。発掘調査が終了したのは９月２日である。

３．遺物整理と報告書作成の方法と経過

遺物整理及び報告書の作成は、発掘調査の終了した９月より開始した。報告書の作成は功刀・柳川が協議の上で行った。執筆分担は節の末尾に記している。

4．調査日誌（抄）

5月20日　試掘調査を始める。遺跡西部（C区）で平石の集中する箇所と、縄文中期の住居址の周溝が検出される。この平石が集中するところは配石遺構か敷石住居址と考えられる。また、遺跡の東側（B区）より灰釉陶器の破片が確認され、その下から土坑がみつかった。

5月25日　数日の間晴れた暑い日が続き、表土剝ぎを行った地面は極度に乾燥している。さらに今日は風が強く、調査は過酷な様相を呈している。縄文時代の住居址と考えられる遺構が遺跡西側より半分削られた形で確認できた。周辺から土坑が4基ほど確認できた。ピットを6本検出し、小規模な方形柱穴列が確認できた。

5月30日　早朝に雨が降ったが、炎天のために午前中で土が乾いてしまった。水対策をなんとかしなければならない。方形柱穴列および円形柱穴列が数基確認できた。北斜面を少し拡張したために廃土の量が多くなってしまった。

6月2日　遺構確認を始める。遺跡東側（A区）より始める。乾燥がひどく散水を行いながら遺構確認を行う。出土遺構は土坑1基のみであった。両側の谷部はハードローム面であるが、尾根の頂部はソフトロームが残っている。明日からは遺跡中部のブロックの遺構確認を行うつもりである。

6月6日　今年の水不足は深刻で、1週間以上降雨がない。遺構確認も困難を極め、散水を行うがすぐ乾燥してしまう。近年の撹乱の跡が多く、遺構の検出は無い。

6月14日　両角測量株式会社に委託した、基準点測量が行われる。今日でほぼ遺構確認は終了した。

6月16日　基準点測量が終了した。遺構の発掘を1・2号住居址から始める。A区の土層観察を行う。1号住居址は灰釉陶器、土師器坏、羽釜の一部が出土している。2号住居址は遺物が少量出土するが、住居址の隅と思われる部分に機械で撹乱を受けた痕が認められるために、住居址かどうか疑問が残るところもある。

6月21日　3号住居址より緑釉陶器の破片および鉄製品が出土した。他に灰釉陶器の皿がほぼ完形で出土している。

6月23日　長野県土地改良課東良技師来跡。

6月29日　連日の夕方の俄雨の来襲に困惑している。土坑半截は61号土坑まで終了した。

6月30日　宮下安雄教育次長来跡。82号土坑より黒耀石片が多量に出土し黒耀石専門のごみ穴と考えられる。

7月11日　先日から5号住居址（焼土址1）の確認調査を行っているが、プランが全く確認できないでいる。

7月18日　6号住居址（5・6・9住居址）の発掘を始める。この住居址は平石が多いところから敷石住居址とした。撹乱により動いてしまった石が多く見られる。5号住居址周辺の石はほとんど同レベルで確認され、かつて敷石住居址だった可能性がある。

7月19日　59号土坑が落し穴となった。土坑の底部に杭を刺したと考えられる穴が5つ検出された。

7月20日　県土地改良課東良技師来跡。

7月25日　74号土坑は底部に平石が埋置してあった。晴天が続き遺構の乾燥が激しい。

7月27日　3号住居址の道の下の部分を掘り始める。6号住居址の床面らしき所がみられるようになり、焼土も確認できた。

7月28日　県土地改良課中野課長補佐と東良技師来跡。

7月29日　3号住居址南壁際より緑釉陶器の輪花碗の破片が出土した。この隣より甕がほぼ完型で横倒しに

なって出土した。

8月5日　6号住居址より2個目の埋甕が出土し、敷石住居址が2軒重複していることが判明した。

8月9日　6号住居址の動いてしまっている石を外したところ、埋甕を囲むようにして敷石が配列している。

8月11日　ダークダックスの佐々木氏と作家の伊沢氏が来跡。7号住居址より埋甕と深鉢が横倒しになって検出された。

8月12日　早稲田大学埋蔵文化財調査室の古城泰氏来跡。

8月15日　6号住居址より炭化材が検出される。

8月19日　信濃毎日新聞社の重久基志記者・長野日報社の新保修一記者来跡。

8月22日　航空測量のために遺構の清掃を始める。このときに落とし穴が新たに2基検出された。

8月23日　航空測量を行う。

8月24日　6号住居址の敷石の下の土坑確認を行う。住居址の焼土址を中心として、円形に土坑が検出される。県土地改良課東良技師来跡。(株)東京航業研究所の杉本賢二・松崎隆氏、補備測量のため来跡。

8月25日　6号住居址の柱穴と思われる穴の底部より平石が検出される。

8月26日　6号住居址の柱穴の検出により、3軒の住居址が重複していることが判明した。

9月2日　最終的な確認を行い、発掘作業を終了した。

5．調査組織

調査主体者　両角昭二　(教育長)

事務局　宮下安雄　(教育次長)

文化財調査室　両角英行(室長)　鵜飼幸雄(係長)　守矢昌文　小林深志　大谷勝己　小池岳史
功刀　司　百瀬一郎　小林建治　柳川英司　大月三千代

調査担当者　功刀　司　柳川英司

調査補助員　赤堀彰子　伊藤千代美　堀内　潭

発掘調査・整理作業協力者
金子清春　久根種則　栗原　昇　小平里美　小平長茂　小平三行　小平義一　立木利治
林　靖之　平沢房江　矢島のぶ子　柳平年子　吉田　勇

基準点測量委託：両角測量株式会社

遺構測量委託：株式会社東京航業研究所

自然科学分析委託：パリノ・サーヴェイ株式会社

鉄製品分析委託：新日本製鐵株式会社釜石製鐵所釜石文化財保存処理センター

鉄製品保存処理委託：財団法人　帝京大学山梨文化財研究所

発掘期間中、諏訪地方事務所土地改良課並びに槻木地区圃場実行委員会には埋蔵文化財に対して深いご理解と絶大なご協力を賜り、発掘調査を円滑に進めることができた。調査の実施に当たっては地元委員会を始め地権者の方々にご助力頂き、ここに謝意を表し明記したい。　(功刀・柳川)

第II章　遺跡の概観

第１節　遺跡の立地と地理的環境

稗田頭Ａ遺跡の地理的環境については、平成４年度の第一次調査報告書で触れた。今次調査では第一次調査J3グリットの谷の東側斜面が確認され、台地の伸びる方向に直交する浅く急傾斜である谷があったことが確認された。今次調査区北側斜面でもやはり同様な台地の括れともいえる谷がみられ、黒色土が厚く堆積していた。土層観察を行った地点cでは北斜面の黒色土中から縄文時代後期前半の土器が比較的まとまって出土している。縄文時代中期から後期前半の集落はこの北側の台地の括れから西に営まれており、平安時代集落は括れ付近の、平坦面が比較的痩せた部分に位置している。（功刀）

第1図　周辺の地形と発掘区域

第２節　遺跡の位置

１．第１次調査の概要

第１次調査で検出された遺構及び遺物は先土器時代と縄文時代である。先土器時代は黒耀石製の尖頭器と黒耀石剝片２点で遺構を伴っていない。縄文時代は前期末から中期末葉にかけての住居址が検出された。各時期の住居址数は前期末１軒、中期初頭１軒、中期中葉狢沢式期４軒、曽利Ⅱ式期３軒、曽利Ⅲ式期４軒、曽利Ⅳ式期16軒、曽利Ⅴ式期１軒、堀之内Ⅰ式期１軒の合計31軒である。

２．周辺の遺跡

槻木地区は平成２年度からの圃場整備事業により、大変多くの遺跡が発掘された。稗田頭Ａ遺跡の東側400m以内には中原・上見・稗田頭Ｂ遺跡があり、200m東側に稗田頭Ｃが、300m北には鴨田遺跡、金掘場遺跡は北に隣接している。これらの遺跡ついて概略を以下に述べていきたい。

鴨田遺跡（90）　平成３年度に宅地造成により発掘された。検出された遺構と遺物は先土器時代、縄文時代前期末、中期初頭、前半、後期前半、平安時代である。住居址は数軒出土しており、縄文時代中期前半が２軒、中期後半が８軒・後期前半が２軒である。後期の住居址の中には敷石住居址もみられる。他に土坑が数基検出されており、中期初頭と中期末、後期初頭、後期前半である。平安時代の住居址は１軒である。

中原遺跡（92）　平成３年度の県営圃場整備事業により発掘された。検出された遺構と遺物は縄文早期末、前期初頭、中期初頭である。早期末は住居址２軒、中期初頭は住居址１軒である。土坑も数基検出されており、その中に上見遺跡と同様の落し穴も含まれている。

上見遺跡（168）　平成２年度の県営圃場整備事業により発掘された。検出された遺構と遺物は、先土器時代、縄文時代早期、中期初頭である。本遺跡は住居址を伴わず、土坑のみで構成されている。早期の遺構は落し穴がある。他の土坑はいずれも中期初頭のである。

金掘場遺跡（208）　未発掘の遺跡である。表面採取によると、縄文時代草創期の有茎尖頭器と、前期末、中期前半、中期後半の遺物が確認されている。

稗田頭Ｂ遺跡（209）　平成５年度に県営圃場整備事業により発掘された。検出された遺構と遺物は、先土器時代、縄文時代早期、中期初頭である。住居址は９軒検出されているが、時期はいずれも中期初頭である。土坑は数基検出されており、早期と考えられる落し穴が13基、集石２基、中期初頭と考えられる土坑が50基ほどである。

梵天原遺跡（291）平成７年度の県営圃場整備事業に先立ち平成５年度に試掘調査が行われた。検出された遺構は落し穴であり、早期の遺構と考えられる。

稗田頭Ｃ遺跡（304）　平成５年度の県営圃場整備事業によって発掘された。検出された遺構と遺物は縄文時代中期初頭の住居址９軒、土坑735基、平安時代の竪穴住居址１軒である。

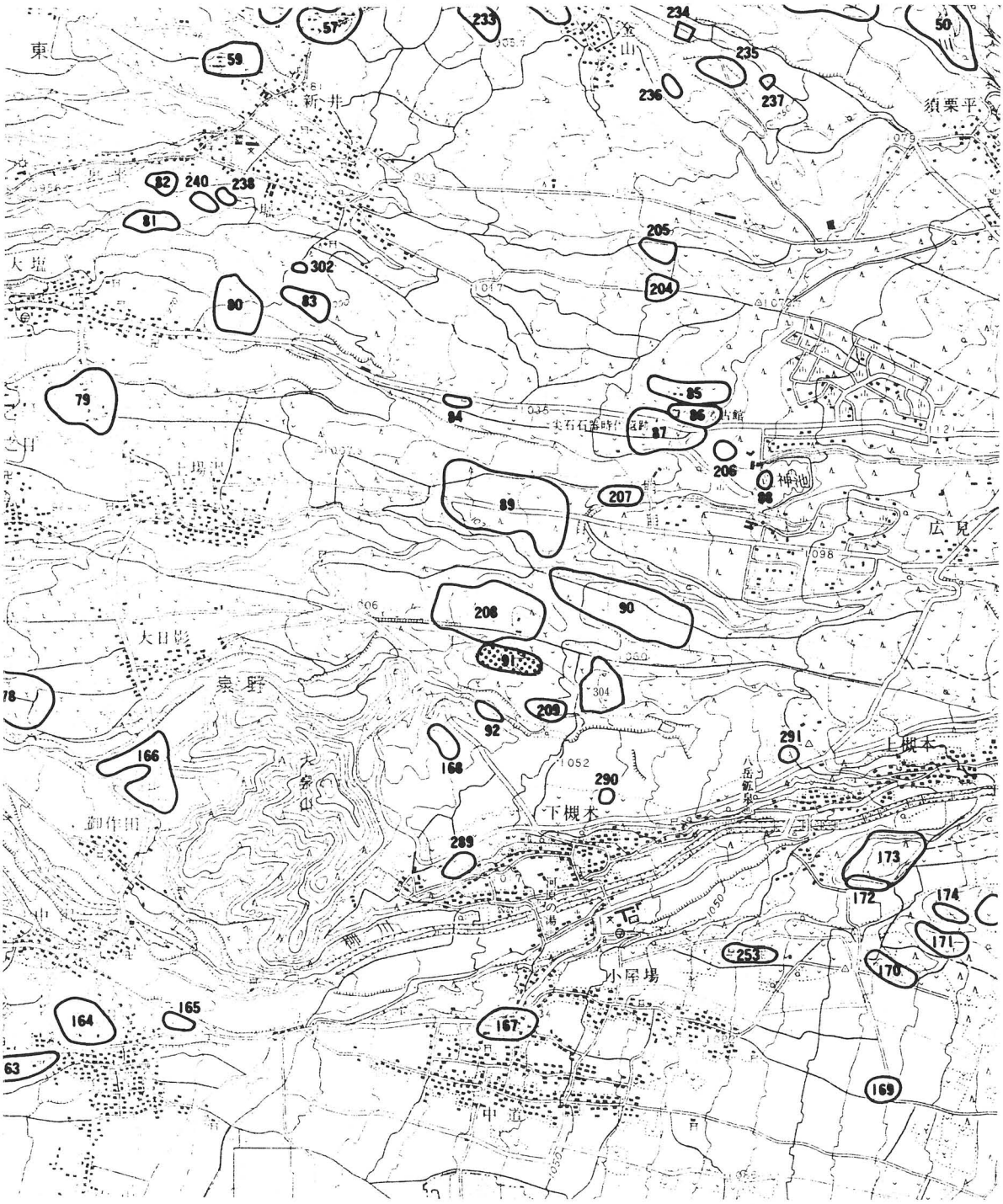
以上各遺跡の概要を見てみると、先土器時代の遺物が散見され、同じ槻木地区内にある夕立遺跡(177)では黒耀石や頁岩、玄武岩、水晶製の遺物が大量に検出されている。

縄文時代に入るとほとんどの遺跡で落し穴が見られる。特に、上見遺跡や稗田頭Ｂ遺跡のような直線上に落し穴が並ぶ特徴的な遺跡がある。

次に現れるのは前期末から中期初頭の遺構で、新水掛Ａ(89)や尖石石器時代遺跡(87)や与助尾根(85)・与

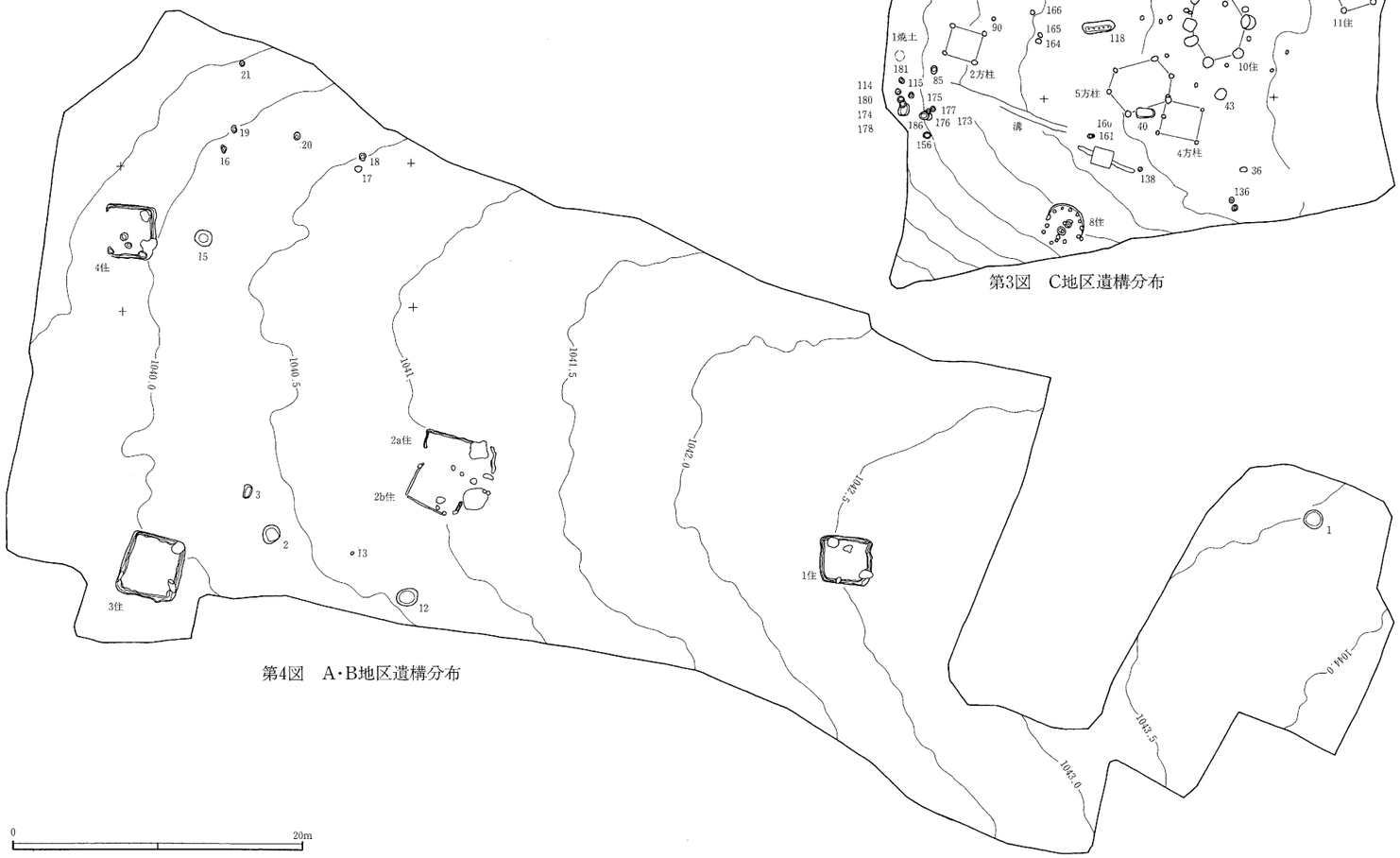
助尾根南(86)などとともに考えると、中期初頭から後期前半の堀之内Ⅰ式期まで、槻木・豊平地区に集落址が展開していたことがわかる。

平安時代の遺跡については前述の鴨田・稗田頭Cのほかに、大泉山を挟んで上の平遺跡(166)があり、また与助尾根南でも住居址の検出が確認され、軒数は少ないながらも散村形態の集落が存在していたことが考えられる。上の平遺跡は出土軒数が多く、石帯の検出も見られ、稗田頭Aのように核となる家が存在する集落址であることがわかる。また、堀区・塩之目区の遺跡でも多くの住居址の検出が見られ、槻木・豊平地区一帯に集落が展開している。 (柳川)



第2図　稗田頭A遺跡位置図 (1/25,000)

凡例
住―住居址
方柱―方形柱穴列
焼土―焼土址
数字のみ―土坑
溝―溝



第3図　C地区遺構分布

第4図　A・B地区遺構分布

第3・4図　遺構分布図（1／400）

第Ⅲ章　発掘された遺構と遺物

第１節　遺跡の層序

１．遺跡の層序

遺跡の層序はＡ区で１ヶ所、Ｂ区で１ヶ所、Ｃ区の２ヶ所観察を行った。Ａ・Ｂ区は表土が浅く上部は耕作による撹乱を受けている。Ｃ区は東側が水田造成時に削平されているが、西側は比較的撹乱を受けていなかった。上層Ⅳ層までは水田の撹乱面であると考えられる。Ⅶ層からは多くの人頭大の礫や平石が含まれており、敷石住居址のあった層であることが判る。土層観察の結果は下記の通りである。

Ａ区・Ｂ区

Ⅰ層　黒褐色土　ローム粒子と１cm大のロームブロックを大量に含む。炭化物を微量に含み、締まりはあるが粘性はない。耕作による撹乱面であろう。

Ⅱ層　暗黄褐色土　１cm大のロームブロックを多く含み、微量な炭化物を含む。木の根と思われる撹乱が多くみられる。

Ｃ区１

Ⅰ層　黒褐色土　水田の耕作土

Ⅱ層　黄褐色土　大量のロームブロックや軽石、地山の石を含む。田の床土。

Ⅲ層　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。鉄分の沈殿が多くみられる。粘性なし。

Ⅳ層　暗褐色土　ローム粒子、ロームブロックを大量に含む。粘性はあり、緻密である。

Ⅴ層　暗褐色土　灰色がかった土を含み、ローム粒子が微量ながらみられる。

Ⅵ層　黒色土　少量のローム粒子、微量な炭化物を含む。粘性あり。

Ⅶ層　黒色土　やや赤味がかる。少量のローム粒子、微量な炭化物を含む。粘性あり。礫の包含層と考えられる。

Ⅷ層　暗褐色土　ローム粒子と５～２mm大の炭化物を少量含む。根の撹乱が多くみられる。

Ⅸ層　暗黄褐色土　ローム粒子を多く含み、炭化物を少量含む。粘性あり。

Ⅹ層　暗黄褐色土　Ⅸ層より黄色が強い。所々に黒いシミ状の部分がみられる。堅緻な層である。

Ｃ区２

Ⅰ～Ⅳ層はＣ区１に同じ。

Ⅴ層　黒色土　ローム粒子、ロームブロックを少量含み、炭化物と小石を少量含む。粘性あり。

Ⅵ層　暗褐色土　Ⅴ層に比べてローム粒子を多く含む。炭化物を少量含む。粘性あり。

Ⅶ層　暗褐色土　１～２cm大のロームブロックを含む。ローム粒子が多く、炭化物を少量含む。

Ⅷ層　暗黄褐色土　軽石、地山の石と思われるものを多く含む。ローム粒子とロームブロックを多く含む。

２．遺構覆土の状況と記述方法

遺構覆土の観察と分層においては色調、粘性、締り、混入物を基準とした。遺構覆土土層の色調は大略遺跡地の層序と一致するが、遺構内においては色調に差がほとんどみられず、分層に際しては色調よりもむし

ろ混入物の量に着目した。混入物にはローム粒子とロームブロック、炭化物、礫、焼土などがみられたが、ロームブロックの量は遺構の埋没状況とその過程を示すものと考え、炭化物の量は柱穴などにおける柱痕の有無や位置、遺構の埋没過程を示すものと考え特に重視した。

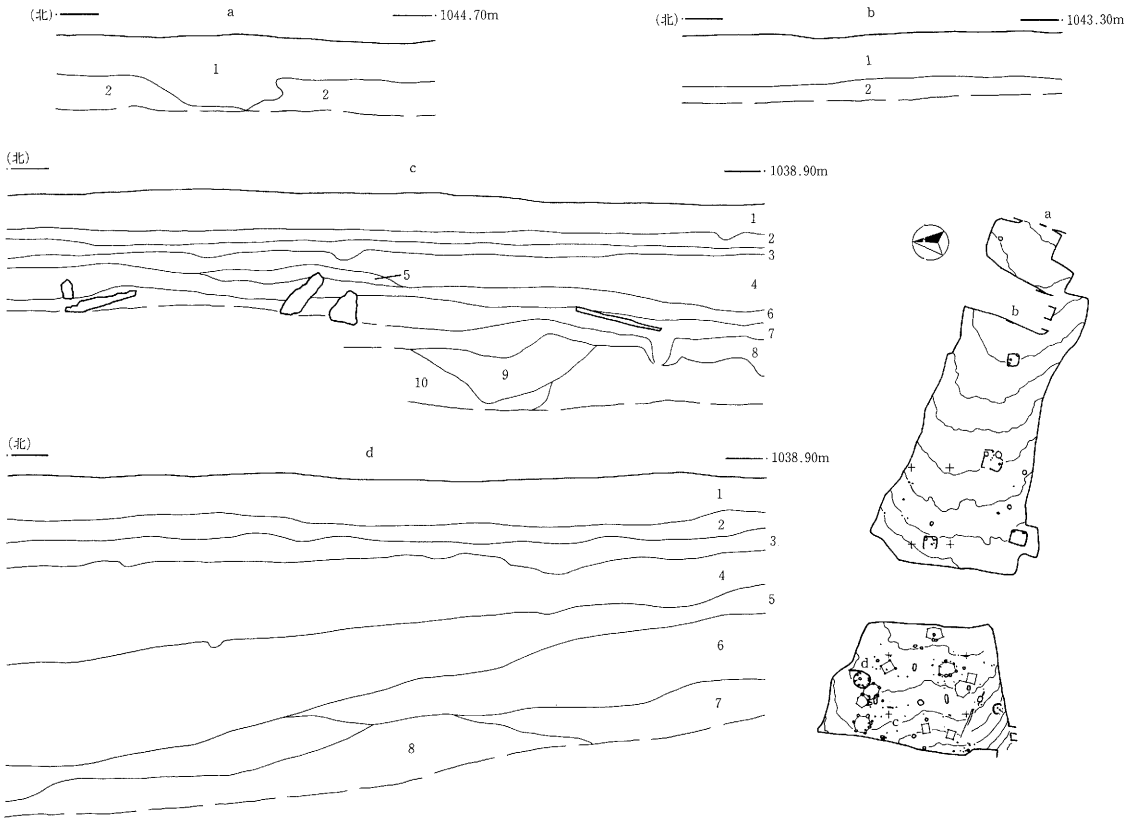
遺構覆土の観察結果は挿図に記号化して記述する方法を取った。以下に記号の凡例を記す。ローマ数字は色調を表し、アルファベットはロームブロックの量を、アラビア数字は炭化物の量を表す。

色調　　Ⅰ黒色土。Ⅱ黒褐色土。Ⅲ暗褐色土。Ⅳ暗黄褐色土。Ⅴ黄褐色土。Ⅵ褐色土。

ロームブロックの量　a多い。b少ない。

炭化物の量　　1多い。2少ない。

例を示すとⅢa1は、土層の色調は暗褐色、ロームブロックと炭化物を多量に含むことを表し、Ⅱaは黒褐色土で、ロームブロックを多量に含むが、炭化物は観察されなかったことを表している。この他特に遺構の性格を探る上で必要な観察結果については遺構説明の中で触れることとした。遺構覆土の観察は柳川が行ない、観察結果の記述については柳川と功刀の両名で協議の上功刀がまとめた。　（功刀・柳川）



第5図　遺跡の層序（1／40）

第２節　縄文時代の遺構

１．縄文時代の住居址

第７号住居址（第６図,図版２－１～３）

検出状況　台地北側肩部から検出された。第５号住居址、ロームマウンドと重複し、第５号住居址が本住居址を切っている。住居址の遺存状況は良好である。

遺構の構造　住居址の平面形は、円形に近い隅丸五角形である。主軸方向で4.56m、幅4.18mの規模をもち、主軸方向はN32°Eを指す。

主柱穴は径が比較的大きいP1、P2、P4、P12であり、４本主柱穴である。P7、P13、P15の３基は柱の建て替えが行われた可能性を示している。

炉址は住居址主軸線上やや北寄りに位置する。平面形は方形で、炉石は抜取られていた。炉石の抜取り痕は明瞭に検出され、いずれも床面からの深さが13cmから18cm程度であり炉の中心に比べ浅い掘り込みであった。底面には厚さ約２cmの焼土層が形成されていた。

残存壁高は最大31cmを測り、壁下には周溝が全周する。床面は硬く締っていた。住居址西側の主柱穴間に、平面形が楕円形を呈し、断面形状が袋状を呈するP3が検出された。土器の出土位置から住居内貯蔵穴であると考えられる。このほか住居南東隅一帯からP6、P16が検出されたが、P3に比べ浅い。住居址奥壁際の方形で浅い土坑は住居址内での位置と平面形状の差からみて、他の住居内土坑とは性格が異なるものと推定される。住居址南側のやや張り出す部分には、上面に貼床がなされた不整形の浅い掘り込みがみられ内部から埋甕とピットが検出された。炉址との位置関係からこの部分が出入口にあたるものとおもわれる。

住居址覆土は５層が暗黄褐色土である以外は全体に暗褐色であるが、混入物により分層された。１層、２層、３層、４層、６層の順にロームブロックが多くなり、３層は炭化物を少量含む。７層は黄褐色土層である。

遺物の出土状況　P3の覆土上層から深鉢が横倒しの状態で出土し、他に石皿破損品と黒耀石製削器が礫とともに出土した（図版２－３）。P3周辺の床面直上から偏平な礫とともに復元が可能な深鉢と小形土器各１個体が遺存していた。１の土器の直上には偏平な礫がのっていた。出土土器と埋甕から縄文時代中期末葉曽利Ⅲ期の住居址であると考えられる。

第５号住居址（第７・８図,図版２－４，３－１・３）

検出状況　台地北の縁辺から検出された。本住居址と第５、９号住居址は水田造成土の下位から検出されたため、遺存状況は良好であった。第７号住居址、第６号住居址、第110号土坑と重複する。本住居址P5が第７号住居址を切る。また本住居址の炉址の上面から検出された礫が、第６号住居址の施設の一部であると考えられること、第６号住居址P4が本住居址P6を切ることから、本住居址は第６号住居址より古いと考えられる。

遺構の構造　柱穴配置から想定すると、柄鏡形の敷石住居址である。張り出し部はP8が検出されたことからその存在を推定した。主体部の平面形は短軸が主軸方向をとる横長の形状であったと思われる。柱穴を基準に測定した住居址の規模は、主軸方向が5.96m、主軸に直交する最大幅が4.48mを測り、P8をもって張り出し部の長さを測定すると2.04mである。住居址主軸方向はN42°Eを指す。

主柱穴は７本検出された。P1とP2の柱穴間距離は極端に狭い。P2は住居址外側に向い張り出す部分をもつ。柱穴の口径は70cmから80cm程で、深さは標高1038.40mを基準とすると85cmから93cmでほぼ一定してい

る。柱痕と思われる土層が観察された柱穴はP2、P4、P6、P7の４基である。P4とP6では柱痕が坑底まで続いており、柱痕に対応する範囲で坑底が凹んでいたことは、柱痕が柱の立てられていた位置を示すものである可能性を示していると考えられた。P1は110号土坑覆土中に構築されていたものと思われるが、切り合い関係は捉えきれなかった。

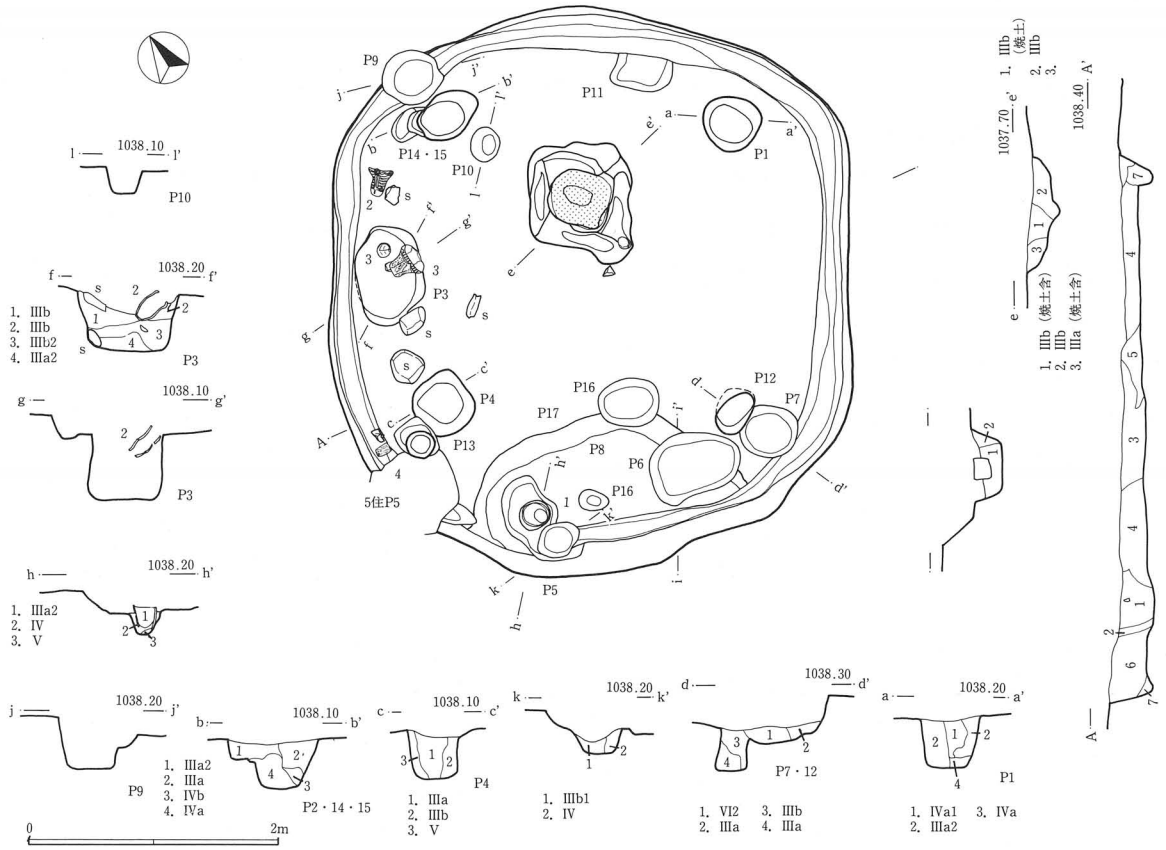
炉址は住居址主軸線上やや張り出し部寄りに位置する。炉は土器埋設炉であり、炉体土器の周辺に厚さ約10cmの焼土が形成されていた（第７図、図版３－１）。炉址覆土は１層、２層が黒色土で２層に礫が伴うことから石囲土器埋設炉であった可能性がある。焼土下層である３層以下は暗褐色土で３層はロームブロックを多く含み、４層は焼土を少量含む。５層は暗黄褐色土、６層は暗褐色土で炭化物を少量含む。

敷石は炉址周辺に遺存していたが、第６号住居址構築に伴い攪乱された可能性があり、本住居敷石構築時の姿ははっきりしない。炉址周辺から検出された敷石はいわゆる鉄平石である。住居址掘り方は捉えられなかった。住居址覆土の堆積状況については第６号住居址とともに述べることとする。

遺物の出土状況　第6号住居址構築時に攪乱され、住居址に伴うと考えられる遺物は少ない。炉体土器と第6号住居址との重複関係および住居址周辺出土土器から中期最終末から後期前半の住居址であると考えられる。

第６号住居址（第７・８・15図,図版３－１・３）

検出状況　台地北側の縁辺に位置する。第５号住居址、第111号土坑と重複する。本住居址に伴うと考えられる礫が第５号住居址炉址上面に位置することと、P6が第５号住居址P4を切ることから、第５号住居址より新しい遺構であると考えられる。またP2の覆土堆積状況からみて第111号土坑より本住居址が新しい（第15図）。



第６図　第７号住居址（1/60）

遺構の構造　柄鏡形敷石住居址である。主体部は短軸が主軸方向をとる形状であったと思われる。張り出し部はP8が検出されたことからその存在を推定した。柱穴で測定した住居址の規模は主軸方向で4.02m、最大幅が3.60mを測り、P8をもって張り出し部の長さを測定すると1.08mである。主軸方向はN32°Eを指す。

主柱穴の配置は第５号住居址と同じ配列をとる（第８図）。主柱穴の口径は約40cmから50cmを中心とし、第５号住居址に比べ一回り小さい。深さは敷石の標高である1938.30mを基準に測定すると最大86cmから最小75cmでありほぼ一定している。張り出し部の柱穴とみられるP8は深さ55cmで、主柱穴に比べ浅い。第５号住居址同様P1は住居址外側に張り出している。P5は住居址内側に浅い掘り込みを伴う。内側の掘り込みの深さはP5の最深部より20cm程浅い。P5、P7の２基の柱穴覆土で柱痕が観察され、P1の柱痕下の坑底は浅く凹んでいた。またP1とP4の底面には偏平な礫が敷かれていた。礫は他の柱穴底面の標高と一致していることから、柱穴内で柱を支える役割を果したものと推定できる。またP1から礫が検出されたことで対となるP2にも柱が立てられていたものと考えられる。

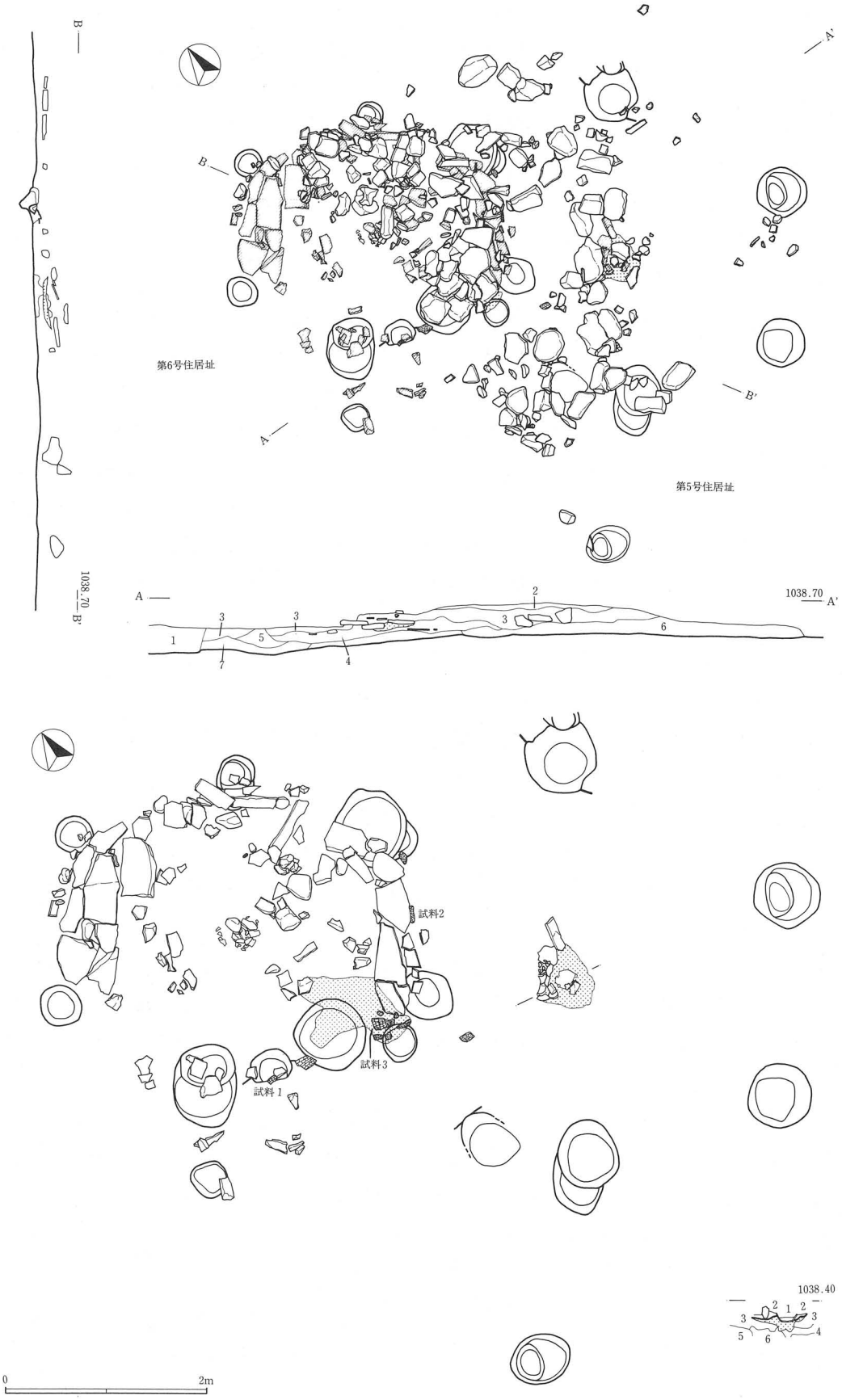
炉址は主軸線上で若干南寄りに位置する。炉は土器埋設炉である。焼土はほとんど検出されなかったが、焼けた礫が炉体土器脇から検出された（図版３－３）。礫はさほど大きくなく石囲炉とは考えられない。

住居址覆土は２つの土層からなり、２層は暗褐色土でロームブロックを多く含み、３層は黒色土でロームブロックと炭化物を稀に含む。敷石は３層と４層の分層線上に敷かれている。４層は暗褐色で炭化物を多く含む土層であるが、この４層の下位の分層線が住居址掘り方を示しているものと思われた。４層は３層に比べやや褐色が強く硬い。５層は暗褐色土で炭化物を少量含むことから三角堆土である可能性がある。６層は暗褐色土で炭化物と焼土粒子を多く含み、７層は暗茶褐色の漸移層である。土層の堆積状況から本住居址は６層、７層中に掘り込まれた住居址であったと思われる。

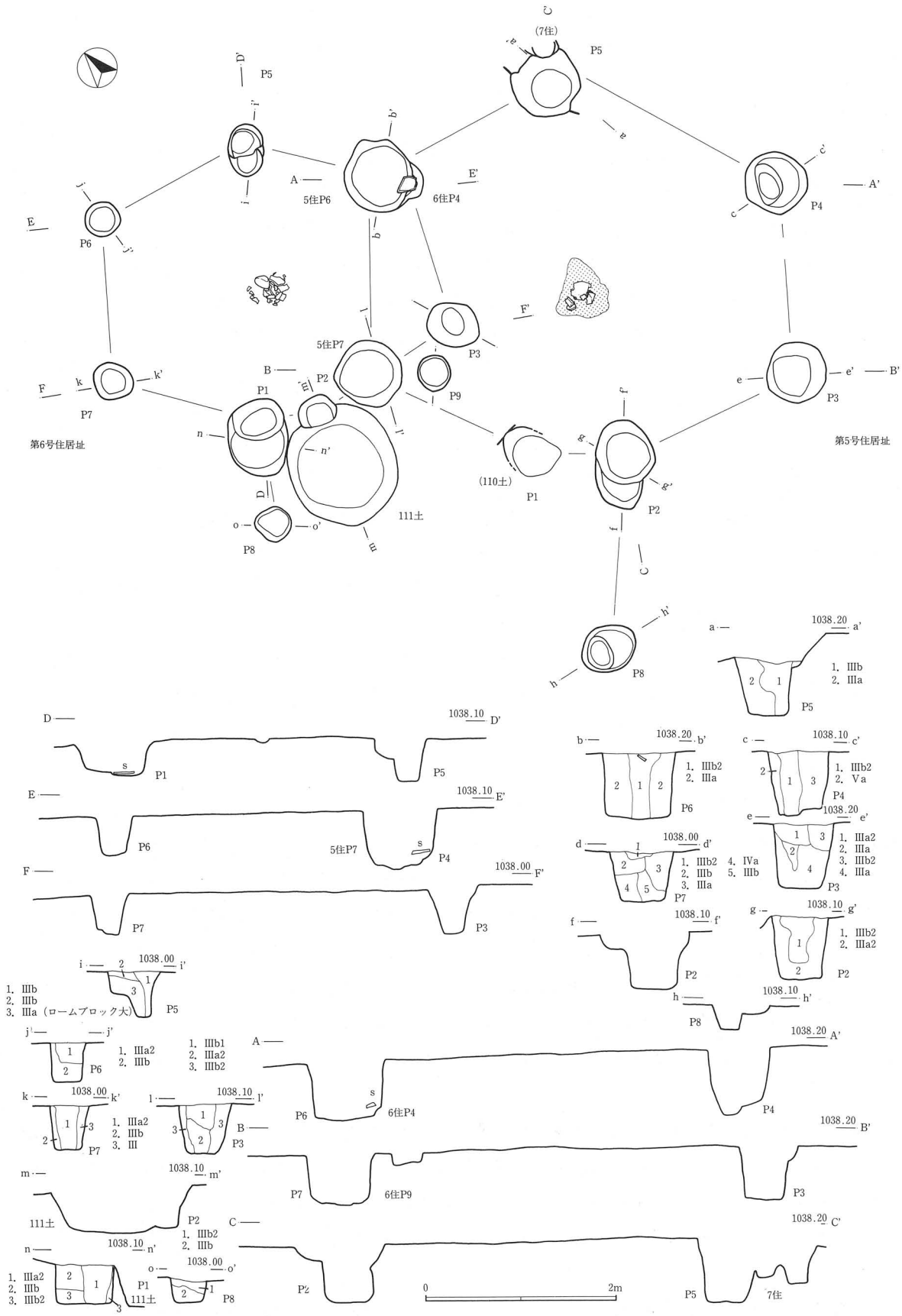
住居址からは礫が多量に検出されたが、柱穴範囲の内外で礫の形状と垂直分布に違いがみられた（第７図）。住居址覆土である２層下部、３層上部から礫が検出された。柱穴範囲内部では３層下部４層上面に柱穴に沿って鉄平石が敷き詰められ、炉址周辺にも鉄平石が散在する。住居址奥壁にあたるP5の南からは立石が立てられていた。柱穴外には角礫が住居址を囲むようにほぼ円形に巡り、南端からは東側に向い伸びるように遺存している。住居址西側では攪乱のため礫配置は確認できなかった。柱穴外に巡る礫下部には自然堆積層であると考えた６層が検出され、住居址掘り方覆土である４層と５層がみられない。このことから柱穴範囲外から検出された礫はいわゆる周堤礫（長野県埋蔵文化財センター　1993）として構築されたものと考えられる。周堤礫が土盛を伴っていたかについては結論が得られなかった。柱穴範囲内の敷石に用いられた鉄平石は最大長が60cm程、周堤礫に用いられた礫は長径40cm程で稜が丸くなったものや稜がほとんどみえないものである。

覆土上層の礫より下位、敷石と同じ高さから焼土と炭化材が出土した。焼土と炭化材の出土位置は柱穴範囲内に限られ南東部分P2、P3、P4、P9に集中する。材の遺存状態は比較的良好で、材の伸張方向が推定できるものがある。試料番号３は最も大型の材で住居址の主柱穴の根元に倒れていた。遺存した部分の最大長は約25cm、最大幅が12cm、最大厚は約3.5cmである。資料番号１および２は柱穴間を結ぶ方向に伸びていた。資料番号２の最大長は16cm、最大幅が５cm、最大厚は３cmで断面形状は上部は不明であるが下半部は丸みをもっている。資料番号３は最大長10cm、最大幅が４cm、最大厚は不明である。試料番号４は小型の材で径約１cm、長さ約４cmで断面形はほぼ円形であるが、出土位置と出土状況は不明である。炭化材については、パリノ・サーヴェイ株式会社に樹種同定と14C年代測定を委託した（付編参照）。

遺物の出土状況　覆土から土器破片を主体として比較的多くの遺物が出土した。無文土器が主体である。無



第7図　第5・6号住居址（上段1/80，下段1/60）



第8図　第5・6号住居址（2）（1/60）

文土器の中でも無文粗製の深鉢が目立つ。遺物は住居址周囲から多く出土し、住居址外郭を巡る礫とともに蜂の巣石、凹石、敲石、磨製石斧が出土した。炉体土器から後期前半堀之内Ⅰ併行期に属す住居址であると考えられる。

第9号住居址（第9図,図版3－4・5，6－1）

検出状況　台地北側縁辺に位置する。第6号住居址西側から検出された。

遺構の構造　平面形状は円形を呈していたものと思われる。張り出し部は確認されなかった。柱穴を基準に測定した住居址の規模は主軸方向で4.50m、幅は4.64mである。主軸方向はN9°Eを指す。

柱穴配置は第5、6号住居址と同様である。柱穴口径は約60cmから90cm、深さは1038.20mを基準に測定すると118cmから94cmとなる。特にP1とP8の距離が短い。第6号住居址P5と同様、P5に伴うように楕円形の浅い掘り方が検出された。柱痕が観察された柱穴はP1、P3、P4、P6の4基である。P7の坑底から検出された浅い凹みは柱痕に伴うものと考えられる。

炉址は主軸線上で若干南寄りに位置する。炉は土器埋設炉である。同一個体の土器の上半と下半部が入れ子状に埋設され、土器周囲に厚さ約12cmの焼土が形成されていた。周囲から礫が出土したが、多くが小礫であり抜取り痕は検出されなかったため石囲の有無は不明である。

敷石が部分的に検出された。用いられた礫はいわゆる鉄平石と角礫である。敷石は炉址周辺と柱穴範囲の東側から検出された。住居址西側は攪乱を受け、敷石の状況ははっきりしない。

1層が住居址覆土であると思われる。敷石は1層と2層の分層線上から検出された。1層は黒色土でロームブロックを多く含み、2層は暗茶褐色の漸移層である。

遺物の出土状況　遺物は覆土上部に集中する。粗製土器を含む無文の深鉢が主体であり、有文精製深鉢の破片が伴う。敷石と同じ高さから蜂の巣石、凹石が出土した。土器埋設炉覆土から炭化種子が出土した。種子半分に割れていた（付編参照）。炉体土器から後期前半堀之内Ⅱ併行期であると考えられる。

第8号住居址（第10図,図版4－3，5－1）

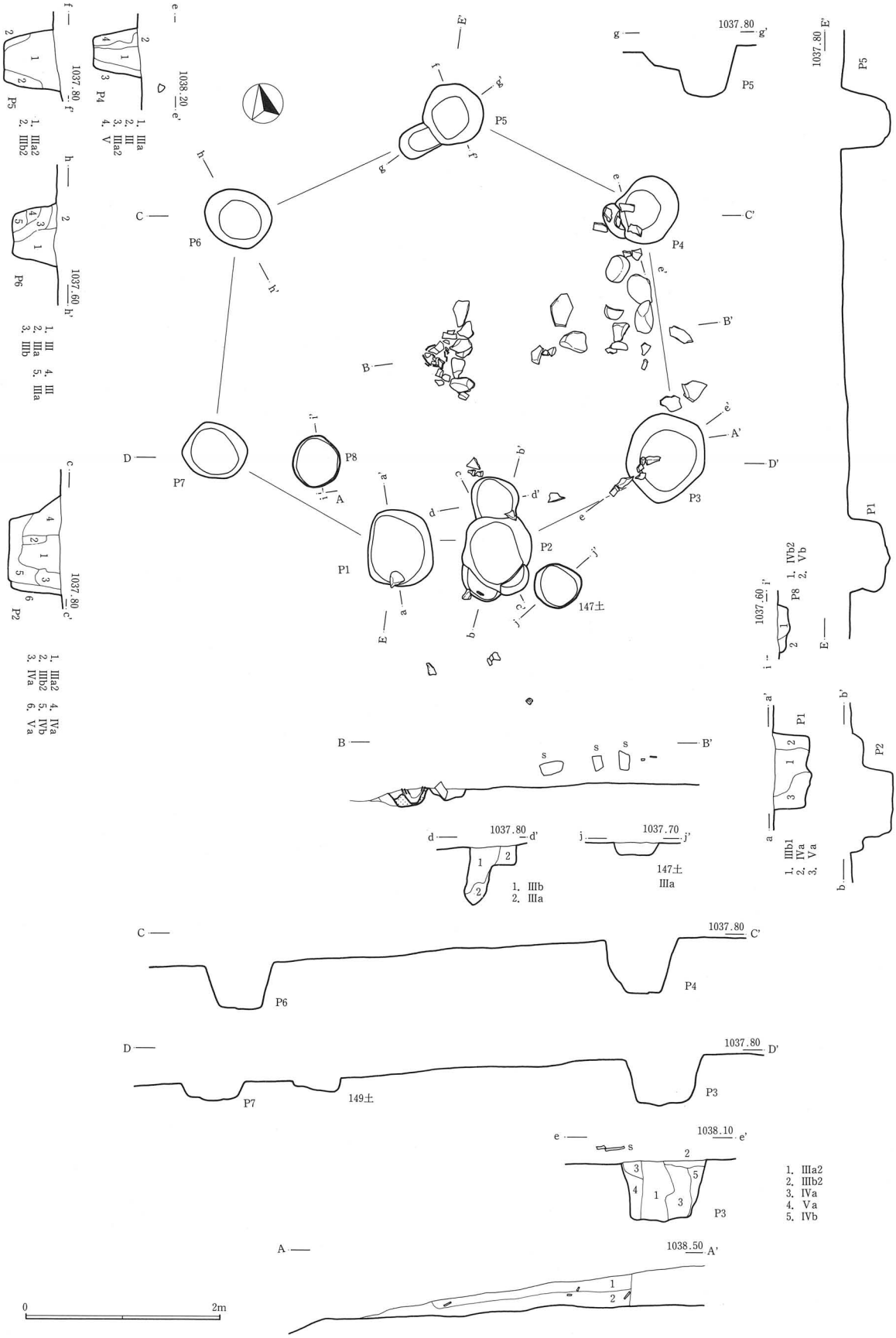
検出状況　台地南側の肩部で検出された。遺存状況は悪く、約2/3を調査した。

遺構の構造　柄鏡形敷石住居址である。主体部は横長楕円形を呈し、張り出し部は、主体部の形状からみるとややずれた位置につく。主軸方向はN65°Eを指す。一部掘り方が確認できなかった部分は柱穴を基準として規模をみると、主軸線上での長さは2.88m、主体部幅2.68m、張り出し部は確認できた部分で長さ0.56m、張り出し部幅は0.90mを測る。残存壁高は20cmである。壁面の立上がりは緩やかに湾曲している。

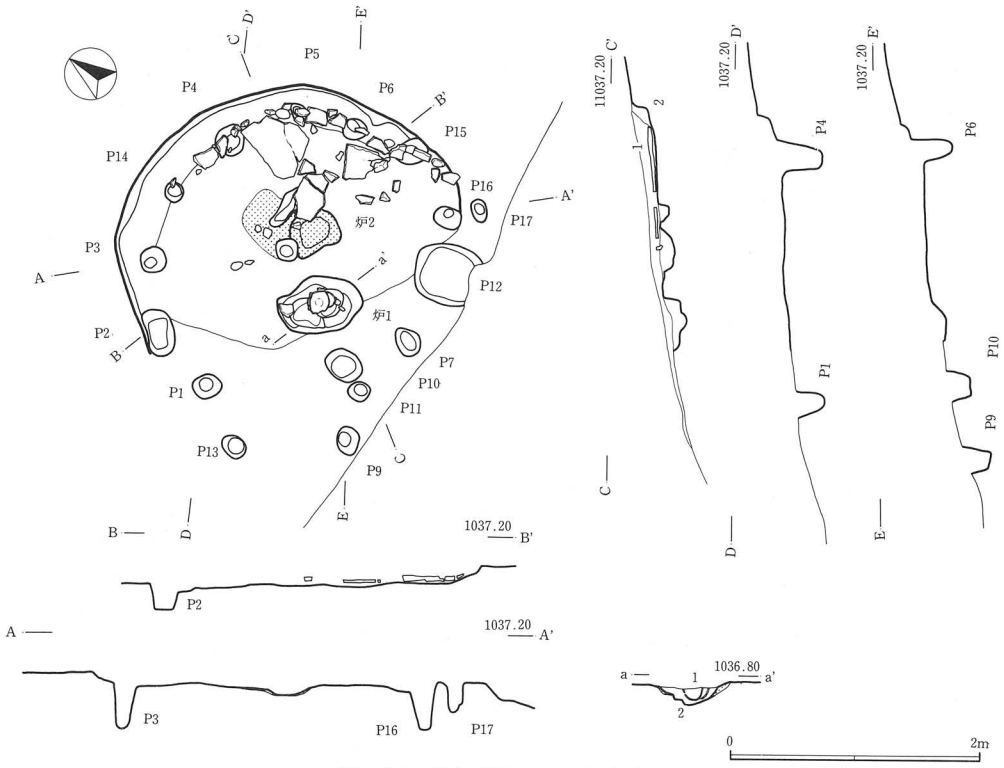
柱穴は11基検出され、壁際を巡る。径は約20cmのものが多く、深さは床面から43cmから22cmとややばらつきがみられる。柱穴配置に若干乱れがみられるが、炉址が2基検出されたことから柱穴の建て替えが行なわれたものと考えられる。張り出し部からも柱穴が検出されたが、主体部の柱穴よりもやや細いいが、深さは主体部の柱穴と変らない。

炉址は2基検出された。炉址1は主軸線からはずれており、住居址主体部南側に位置する。土器埋設炉であり、炉体土器は有文精製土器と無文土器の2個体が入れ子状に埋設されていた。この炉址の北側の敷石下から焼土を伴う浅いほりこみが検出された。炉址1以前の炉址であると考えられたため、炉址2とした。炉址2の北から検出された掘り方からは焼土が検出されず、炉石の抜取り痕と考えられ、構築当初は石囲炉であったと考えられる。

主体部では、奥壁から敷石が検出された。敷石はいわゆる鉄平石が用いられている。住居壁際では掘り方に沿ってやや傾斜していた。敷石は一部抜け落ちたかの様な状況がみられる。住居址掘り方は柱穴より内部



第9図　第9号住居址（1/60）



第10図　第８号住居址（1/60）

で緩く落ち込み、住居址中央に向いやや低くなっている。

遺物の出土状況　覆土からは少量の土器片と黒耀石剥片が出土したのみであった。奥壁の敷石の間から磨石２点が、P10から横刃型石器１点が出土した。炉体土器から、後期前半堀之内Ⅰ併行期であると考えられる。

第10号住居址（第11図,図版４－２）

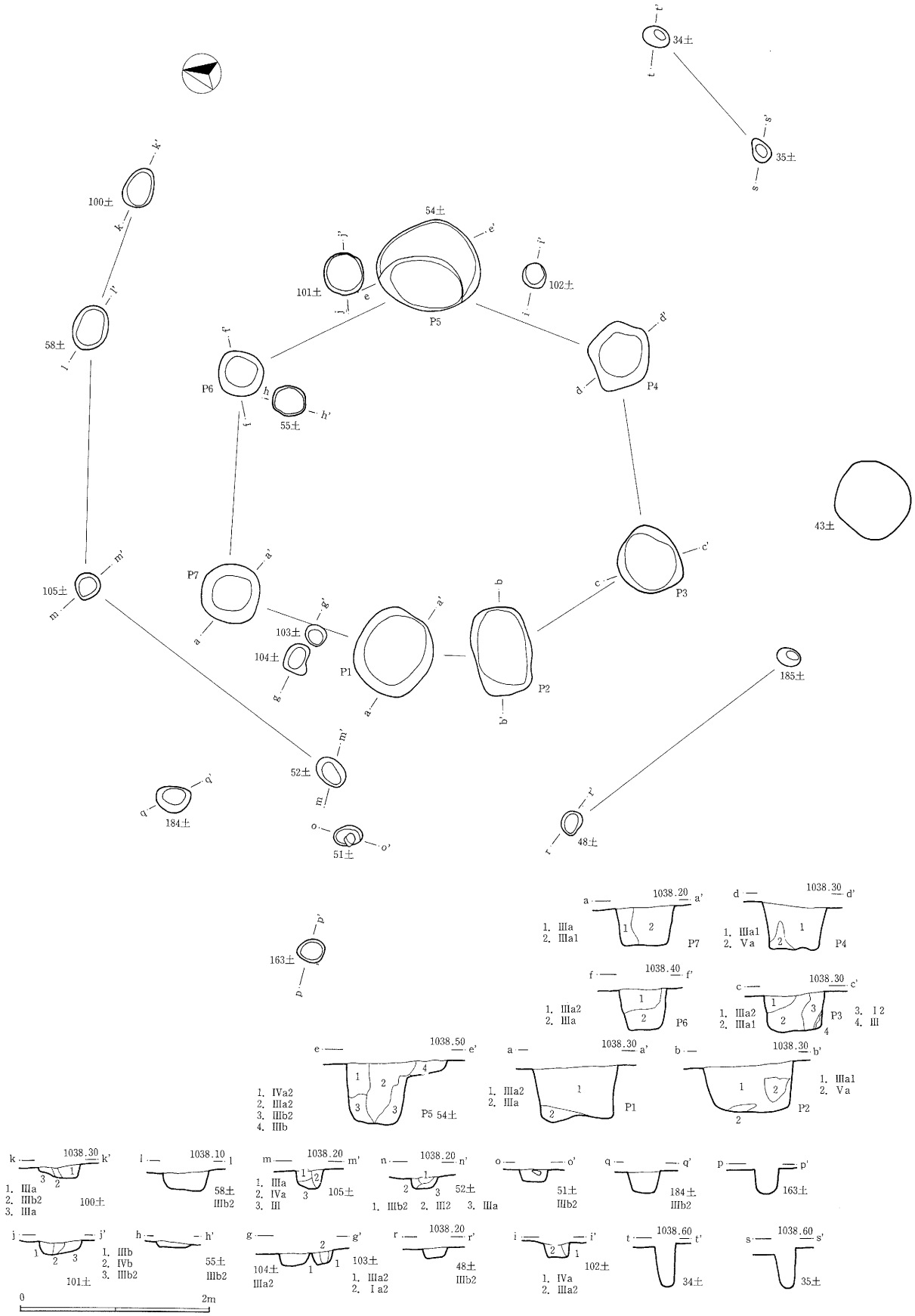
検出状況　台地平坦面調査区東側に位置する。水田造成により削平されており、柱穴のみが遺存していた。P5は第54号土坑と重複しており、P5が第54号土坑を切る。

遺構の構造　柄鏡形住居址である。主体部は主軸方向に短軸をもつ横長の形状であったと思われる。第51、51号土坑が検出されたことから張り出し部の存在を推定した。柱穴を基準とすると住居の規模は主軸方向で長さ7.13m、幅4.44mを測り、51土をもって張り出し部の長さを測定すると1.91mとなる。主軸方向はN 79°Eを指す。

主柱穴は７本で、配置は第５号住居址などと同じである。柱穴は径約50cmから70cmを中心とし、深さは1038.60mを基準とすると、106cmから79cmを測る。柱痕はP2、P4、P7の３基で観察された。

住居址を囲むように、径約30cmから40cmの小規模なピットが巡っている。住居址の主軸方向を基準に最大幅をみると約７mを測り、住居址最大幅との差は第６号住居址における最大幅といわゆる周堤礫との差にほぼ一致している。1038.60mを測定基準とする深さは114cmを測る第185号土坑が例外的であるが、78cmから50cmと比較的近い深さを示す。幾つかの欠落を想定すれば、住居址周囲を巡るものであったと考えられる。住居構造の一部を担っていたとする根拠に欠ける恨みはあるが、第52号土坑では柱痕に類似する土層堆積状況が確認され、第52号土坑と第48号土坑は張り出し部に連結する位置にあたることからみても、円形に巡るこれらの柱穴は住居址施設の一部であった可能性が高いと考えられる。

住居址内からは第101号から104号、184号土坑が検出された。形状からみると後述する第Ⅳ群土坑である可能性は残るが、主柱穴を結ぶ線上に位置することから、住居址とともに報告しておく。



第11図　第10号住居址（1/60）

遺物の出土状況　柱穴から土器破片が出土したのみである。柱穴出土の遺物から中期最終末から後期前半に属すものと考えられる。

第11号住居址（第12図,図版４－２）

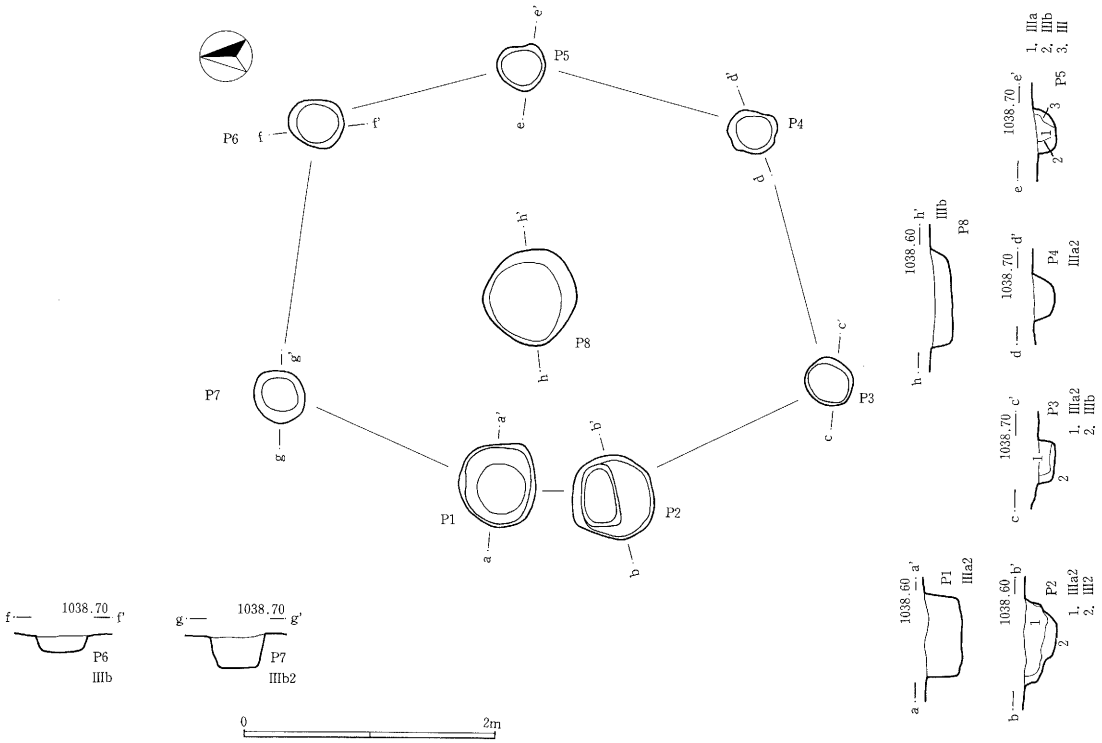
検出状況　台地平坦面の調査区東側に位置する。水田造成により削平されていたため、柱穴以外の施設はほとんど検出されなかった。

遺構の構造　平面形は主軸方向に短軸をとる横長の形状であったと考えられる。張り出し部は検出されなかった。柱穴から住居址の規模を測定すると主軸方向での長さ3.42m、幅4.38mを測る。主軸方向はN88°Eを指す。

主柱穴は７本で、配置は第５号住居址などと同じである。柱穴の径は約40cmを中心とし、1038.70mを測定基準とした深さは47cmから30cmとなる。柱穴覆土の観察では明確な柱痕は観察されなかった。柱穴個々の規模は第５号、第９号、第10号住居址に比べ小さい。

住居址主軸線上やや西寄りから、平面形が円形を呈し径が79cm、柱穴と同じ基準により測定した深さが40cmを測る円形の掘り方が検出された。本住居址の様な主柱穴配置をもつ住居址においては、通常この位置に炉が設けられていることが多いが、P8は炉址の掘り方としてはあまりに深すぎると思われる。覆土に焼土は含まれていなかった。土坑の重複も考えられるところではあるが、本住居址においては住居址施設の可能性を残し、住居址とともに報告しておく。

遺物の出土状況　柱穴から土器破片が出土した。時期が判明する土器片は１片のみであり、出土土器から住居址の時期を決定することは困難である。中期最終末から後期前半であると考えておきたい。



第12図　第11号住居址（1/60）

2．方形柱穴列

第１号方形柱穴列（第13図,図版５－２）

検出状況　台地南側の縁辺に南に開口する谷が形成されている。本遺構はこの谷の肩部に位置する。

遺構の構造　短辺２本、長辺３本の柱穴により構成され、平面形状は長方形を呈する。柱穴の中心を基準にすると短辺１ｍ80㎝、長辺２ｍ55㎝の規模をもち、長軸方向はN82°Eを指す。長辺の柱穴はほぼ等間隔である。柱穴のうち柱痕が観察されたのはP6である。

遺物の出土状況　遺物は出土しなかった。出土遺物がないため時期は確定できないが、検出位置と主軸方向から縄文時代後期前半であると思われる。

第２号方形柱穴列（第13図,図版５－３）

検出状況　谷肩部に位置する。

遺構の構造　短辺２本、長辺２本の柱穴により構成され、平面形状は長方形を呈する。短辺２ｍ８㎝、長辺は確認された柱穴間で２ｍ10㎝を測り、平面形はほぼ方形を呈する。長軸方向はS75°Eを指す。柱穴のうち、柱痕が観察されたのはP1である。柱穴数は第１号方形柱穴列より少ないが、規模はほぼ同じである。

遺物の出土状況　出土遺物はない。検出位置と主軸方向から後期前半であると考えられる。

第３号方形柱穴列（第13図）

検出状況　台地北側縁辺に位置する。

遺構の構造　短辺２本、長辺２本の柱穴により構成され、平面形状は長方形を呈する。短辺２ｍ57㎝、長辺３ｍを測る。長軸方向はN30°Wを指す。遺構の規模と柱穴の径が他の方形柱穴列に比べ大きい。柱痕が観察されたのはP1、P2の２基である。

遺物の出土状況　遺物は出土しなかった。所属時期は不明である。

第４号方形柱穴列（第13図）

検出状況　台地南側肩部に位置する。第５号方形柱穴列と重複する。新旧関係は不明である。

遺構の構造　短辺２本、長辺２本の柱穴により構成され、平面形状長方形を呈する。短辺２ｍ28㎝、長辺２ｍ63㎝を測る。長軸方向はS76°Eを指す。P1とP4を結ぶ線上からP5が検出された。P5は主軸線上にもあたることから、方形柱穴列を構成する柱穴であると思われるが、東側短辺のP5と対応する位置からは柱穴は検出されていない。P3では柱痕が観察された。柱穴配置と柱穴数は第１号、第２号方形柱穴列とは異なるが規模はほぼ同じである。

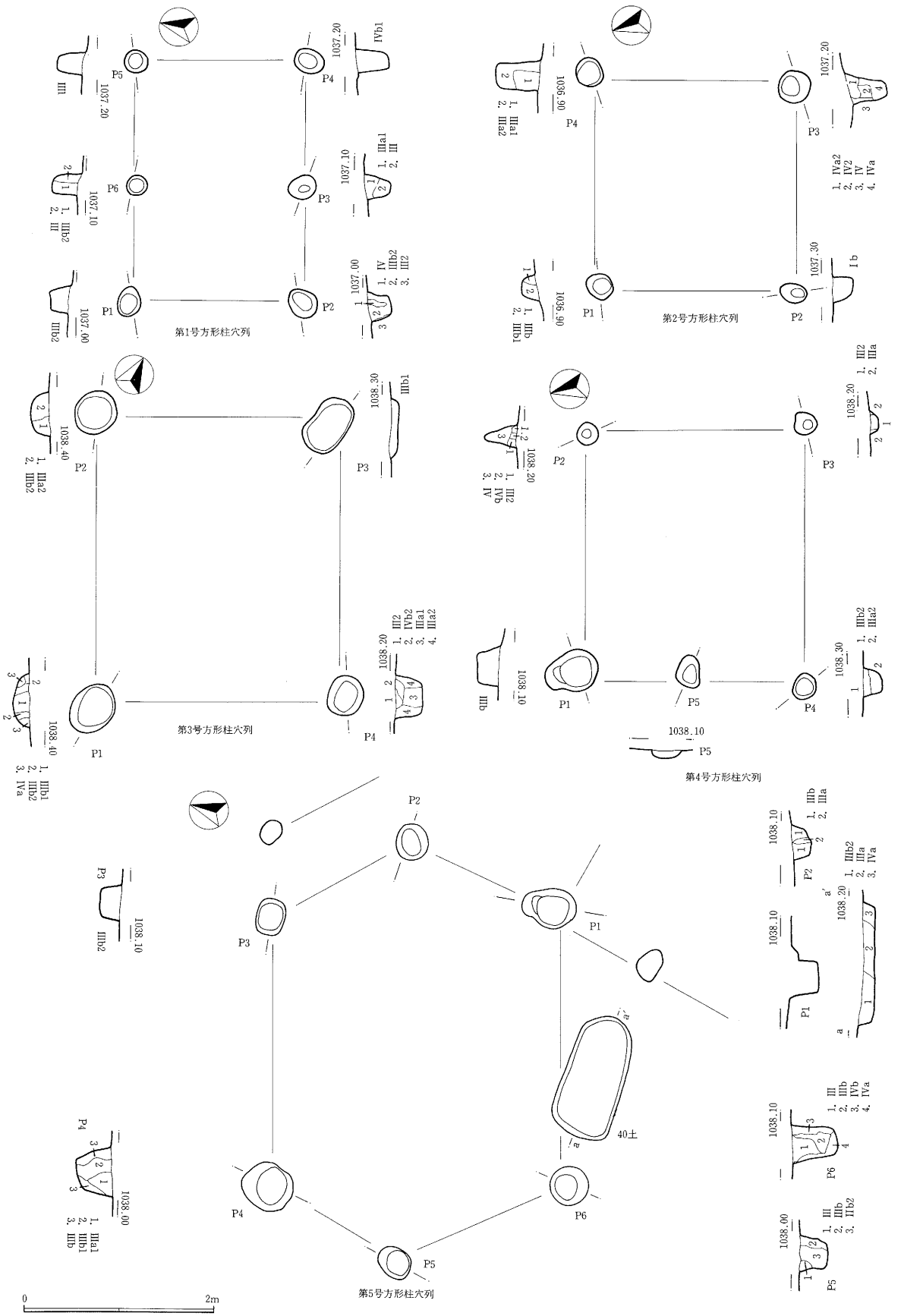
遺物の出土状況　出土遺物はない。主軸線が第10号住居址と一致していることから、後期前半である可能性が認められる。

第５号方形柱穴列（第13図）

検出状況　台地平坦面南側、第10号住居址南西に位置する。

遺構の構造　炉址をもたないことから方形柱穴列であると考えた。短辺の柱穴は３本、長辺の柱穴は２本である。主軸線にあたる柱穴が外側に張り出し、平面形状は六角形を呈する。張り出した柱穴間の距離は4.43ｍ、張り出した柱穴間を除く柱穴間の長さは3.16ｍ、短辺は2.91ｍを測り、主軸方向はN72°Eを指す。張り出し部分を構成するP5、P6で柱痕が観察された。棚畑遺跡（宮坂ほか　1990）、鴨田遺跡（百瀬ほか　1992）などの同種の方形柱穴列に比べ幅が広い傾向にあることから、なお遺構種類の検討が必要な遺構である。

遺物の出土状況　P3、P6から土器片が出土した。出土土器から後期前半堀之内Ⅰ併行期に属すると思われる。



第13図　方形柱穴列（1/60）

3．焼土址

第Ⅰ号焼土址（第14図）

検出状況　台地南側谷斜面に位置する。調査区西側から検出された。

遺構の構造　焼土は厚さ８㎝でレンズ状に堆積し、谷斜面に沿って東西方向に傾斜していた。焼土と同じ高さから炭化物と礫が観察されている。周辺から柱穴状の土坑が検出されたが、配列は確認されなかった。焼土は暗褐色土層中から検出された。

焼土より下部の第１層から第３層までは焼土の有無で分けられた土層である。人為的な掘り込みである可能性も残されるが、炉址、床面は検出されなかった。

遺物の出土状況　周辺から土器破片が出土したが、復元できるものはない。焼土周辺から土器が比較的まとまっていたが、周囲より密度が比較的濃いというにとどまる。周辺から出土した土器のうち主体をなすものが後期前半堀之内Ⅰ併行期の土器であることから、同期の遺構であると考えられる。

4．土坑（第15,16図、図版５－４・５，６）

土坑の分類　土坑は77基検出された。本報告では覆土の土層観察により明らかにローム・マウンドと考えられる落ち込みは土坑から除いた。平面形状と断面形状、径から分類し類型ごとに特徴をまとめる。なお平面形状が楕円形を呈する土坑については軸方向を求め記述した。軸の方向については便宜的に第Ⅰ群土坑では長軸方向のうち北に近い部分を基準に軸方向を定め、第Ⅱ群土坑については集落の中心を第１号焼土址西側の谷に仮定し、集落の中心からみた方向で記述した。

第Ⅰ群　平面形が長楕円形を呈し、坑底ピットを有する。通常陥穴とされている土坑である。３基検出された。第59、119号土坑は坑底ピットが５基検出され、配列が極めて似ている。第110号土坑は坑底ピットが２基であり、他の２基の土坑との違いがみられる（第16図）。軸方向は第59号土坑でN79°W、第110号土坑がN80°E、第119号土坑ではN84°Eとなり、３基を比べた限りでは坑底ピットによる細分とは対応しない。

第Ⅱ群　平面形が楕円形を呈する。第Ⅰ群より浅い。立上がりにより２類に細分できる。

ａ類　タライ状の立上がりを呈する。１基検出された。第40号土坑である。軸方向はN93°Eを指す。

ｂ類　立上がりが緩やかに外湾する。１基検出された。第３号土坑である。軸方向はN20°Eである。

第Ⅲ群　平面形がほぼ円形を呈する土坑。楕円形、隅丸方形に近い土坑も含むが、第Ⅰ群や第Ⅱ群に比べ形状の軸が判別しにくいことを基準として一括する。

ａ類　断面形状が袋状の土坑。第43、83ｂ号土坑の２基が検出された（第15図）。第43号土坑に比べ第83ｂ号土坑はより深い土坑である。

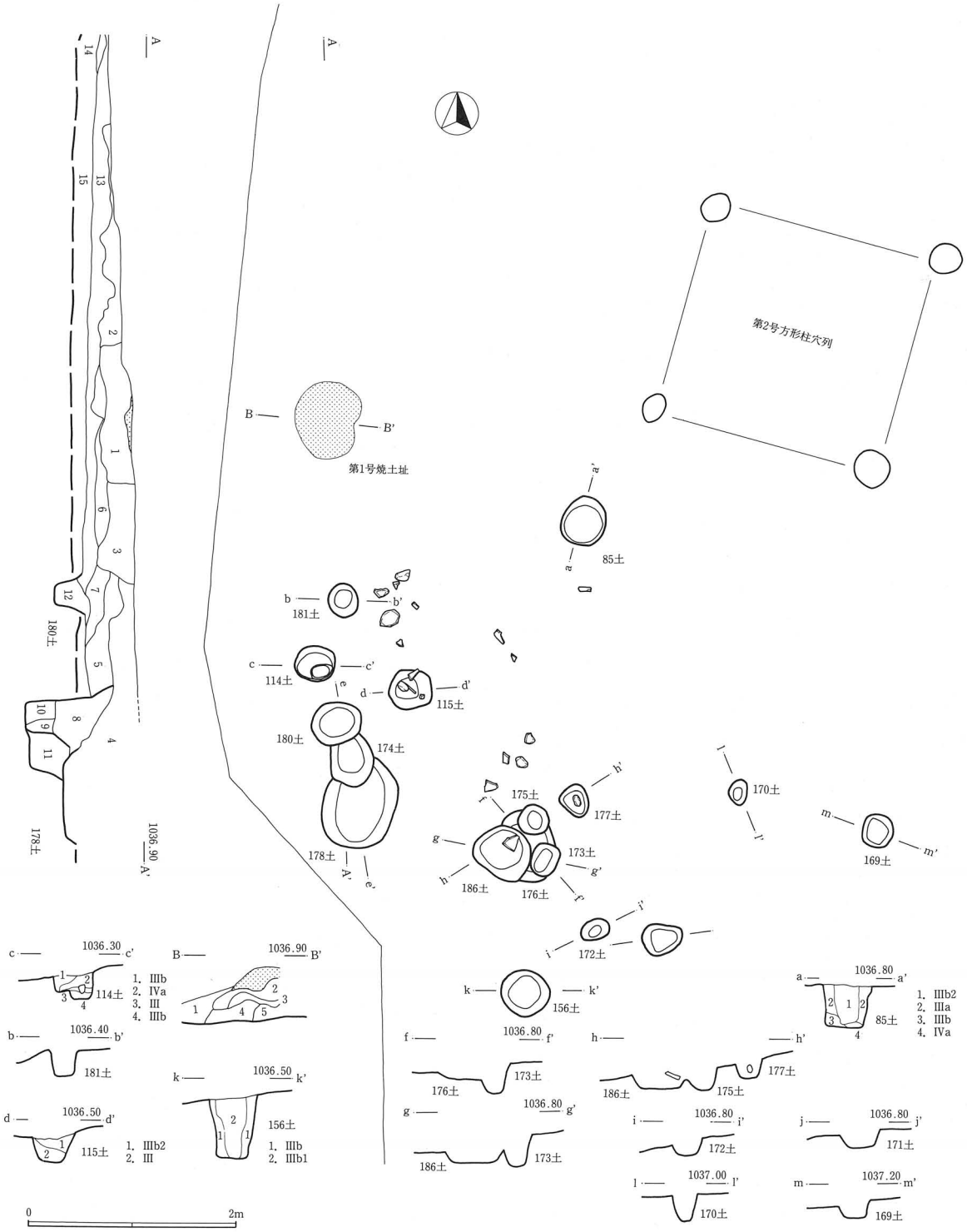
ｂ類　タライ状の土坑。14基検出された。径により２種に細分できる可能性がある（第15図）。但し第32、82、84号にみるように径が似通っている例があり厳密には分類できない。むしろ深さからみて２種に分類できると思われるが、この中には第30、31号のように削平を受けている土坑が含まれるため、細分は傾向性を示すにとどまる。

１種　深い土坑。深さはａ類土坑に近い。第74、111、178（第14図）号土坑の３基が認められる。

２種　浅い土坑。第１、12、30、31、54、69、81、82、83ａ、84、176（第14図）号土坑の10基がある。

ｃ類　立上がりが外傾する土坑。１基検出された。第15号土坑である。

ｄ類　立上がりが緩やかな土坑。平面形は隅丸方形に近い。１基検出された。第２号土坑である。



第14図　第１号焼土址および周辺の土坑（1/60）

第IV群　平面形は円形であるが、径に比べ深さがある柱穴状の土坑。47基検出された（第15,16図）。第13、16、17、18、19、20、21、33ａ、33ｂ、36ａ、36ｂ、60、61、65、67、68、70、85、91、93、94、95、96、98、114、115、136、137、138、144、145、151、156、160、161、164、165、166、167、168、173、174、175、177、180、181、186号土坑がある。柱痕は第36ａ、85、91、98、136、137、156号土坑で観察された。第85、156号土坑は他の第IV群土坑に比べやや径が大きく、深い点に特徴があり、柱痕もほぼ土坑底部まで観察された。

第Ｖ群　平面形は円形から不整形を呈し、立上がりが明確なものから緩やかで乱れたものまであり統一性に

欠ける。規模は第IV群と変らない。覆土色調が一定しないにも関わらず分層が困難であるといった特徴をもつ。第IV群に比べ柱穴を構築したものとは考えにくい土坑である。但し杭坑に代表される掘り方自体を構築しない穴の存在が想定されるため調査を行った。本報告においては遺構としての認定を保留しておきたい。8基検出された。第5、63、133、169、170、171、172、183号土坑がある（第14,15,16図）。

伴出した土器と時期　遺物が出土した土坑は第43号土坑と第144号土坑の2基にすぎない。第43号土坑出土土器は無文粗製土器の底部と頸部小破片である（第24図89・90）。無文粗製土器については胎土と調整から、有文土器については文様からみて縄文時代後期前半の土器であると考えられる。第144号土坑出土土器は時期の特定が難しい。他の土坑からは土器が出土していないため、時期については集落内での位置と軸方向、土坑の形状を手がかりとするほかない。

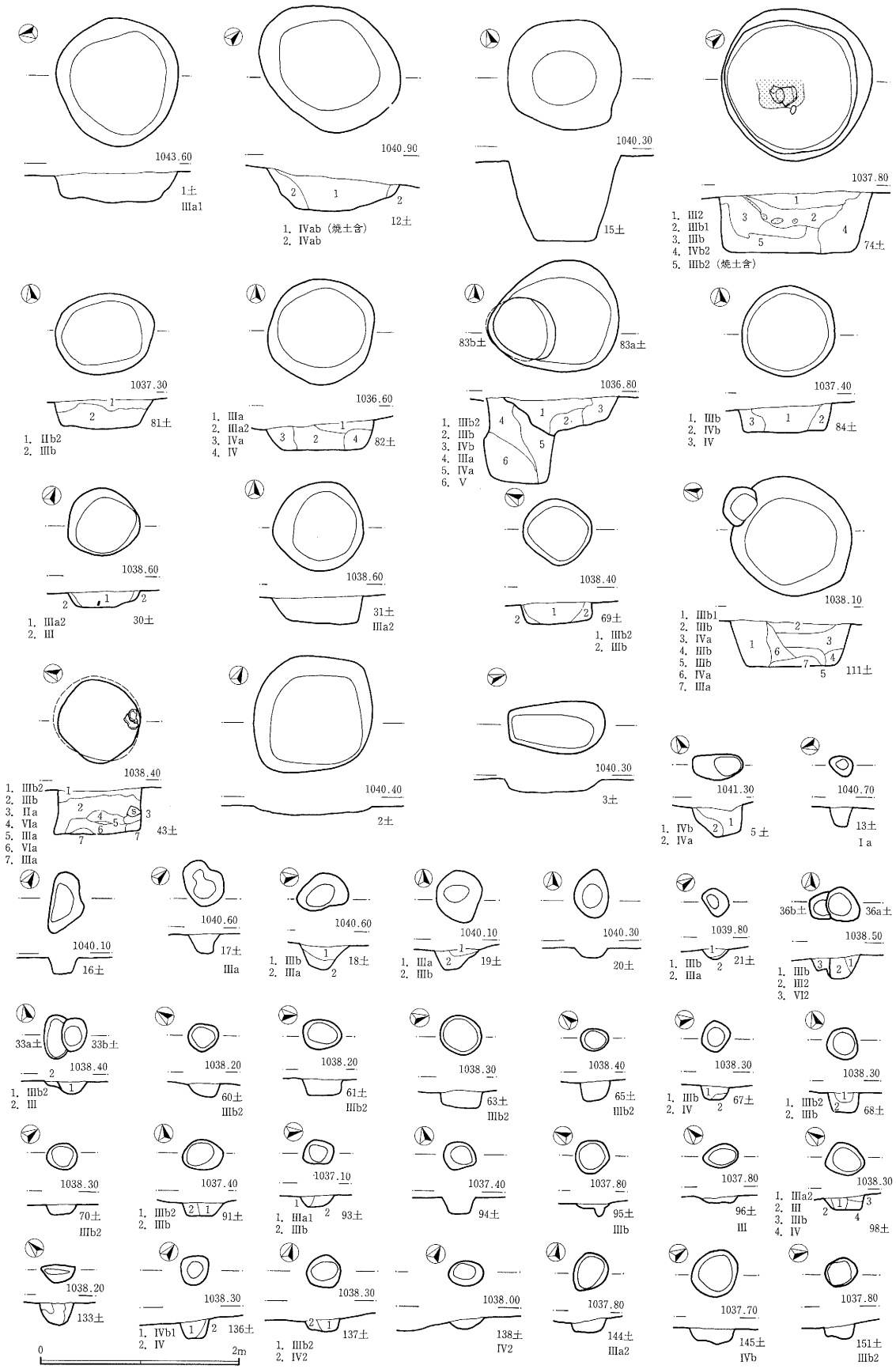
第Ⅰ群は陥穴と考えられる土坑であるが、居住の場と狩猟の場が同時存在するとは考えにくく、周辺遺跡で検出された陥穴の時期からみて本遺跡の第Ⅰ群土坑も周辺の遺跡の陥穴群を構成するものと思われることから縄文時代中期初頭以前に構築された可能性が高いものとみられる。

平面形が楕円形の第II群である第40号土坑は、軸方向が第10号住居址、第5号方形柱穴列の軸方向とほぼ平行していることから、縄文時代後期の集落に属すものと理解したい。第3号土坑は平安時代集落内から検出され、軸方向は平安時代住居址の竈が構築される方向に近く平安時代の土坑である可能性もある。

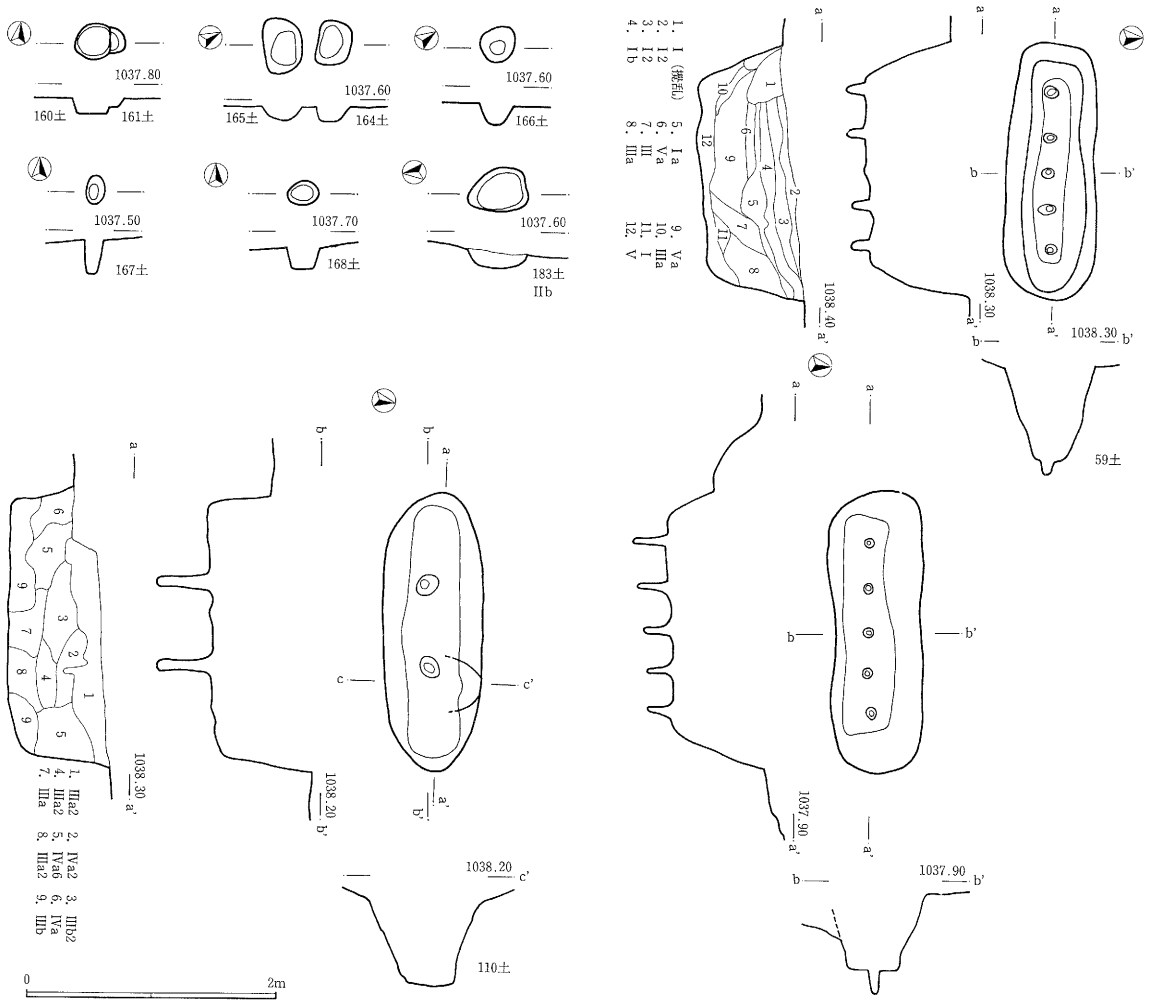
第III群、第IV群については第Ⅰ次調査時および今次調査において縄文時代前期末葉から中期中葉、中期後葉から後期前半の遺構と遺物、平安時代集落が検出されており、中期最終末から後期前半以外の時期の土坑が重複している可能性も否定できない。本報告では曖昧さが残るものの、C地区の第III群、第IV群土坑が縄文時代住居址の群内部に比較的まとまって位置していることを理由に縄文時代中期最終末から後期前半に属す可能性が高いと位置付けておきたい。

土坑検出状況と遺物の出土状況　第43号土坑出土土器は礫を伴い、土坑覆土の上層から出土した。覆土の堆積状況では土器と礫は覆土2層に含まれていること、4、6、7層にロームブロックが多く含まれている点が特徴である。4、6、7層が、オーバーハングしていた部分の崩落土であるか埋め戻した土であるかの解釈は難しい。土器の出土状況のみが根拠となるが本土坑については土坑転用の墓坑である可能性が残される。第82号土坑中央からは剝片、砕片からなる石器群が集中して出土した（図版6－2）。出土石器が剝片、砕片を中心とする点からみると前期末葉に属するものとみられる茅野市豊平の上の平遺跡第62、63号土坑出土例に類似している。第82号土坑覆土では全体にロームブロックが多く含まれており、埋没状況を想定することが難しいが、坑底上部に集中する出土状況から土坑転用の不用物の廃棄場であった可能性がある。第12、74号土坑では焼土が検出された。第12号土坑では1層に焼土粒子が稀に含まれ1㎝程度の比較的大型の炭化物が観察された。第74号土坑では上層である2層と3層の分層線上にブロック状の焼土がまとまってみられ、炭化物も多くふくまれていた。また5層では焼土粒子が観察された。ブロック状の焼土は2層と3層の分層線に沿って分布することから流れ込みであった可能性が大きく、第74号土坑の周辺で火が焚かれていたか、なんらかの理由で焼土が廃棄されており、土坑の埋没に際し焼土などが流れ込んだものと考えられる。5層においても焼土粒子が観察されたことからみて、火が焚かれていたあるいは焼土の廃棄行為が行われたのは第74号土坑埋没以前であったと考えられる。第12号土坑については、近くに平安時代住居址である第2a、2b号住居址があることから第12号住居址の竈から検出された焼土や平安時代集落との関連も考えられるが、明確な根拠に欠けるため焼土の性格や土坑の埋没時期については保留しておきたい。

土坑の分布と用途　縄文時代遺跡から検出される土坑については、陥穴、貯蔵穴、墓坑、「柱穴」あるいは


1043.60
1土
IIIa1
1040.90
1. IVab（焼土含）
2. IVab
12土
1040.30
15土
1037.80
1. III2
2. IIIb1
3. IIIb
4. IVb2
5. IIIb2（焼土含）
74土
1037.30
81土
1. IIb2
2. IIIb
1036.60
1. IIIa
2. IIIa2
3. IVa
4. IV
82土
83b土
83a土
1036.80
1. IIIb2
2. IIIb
3. IVb
4. IIIa
5. IVa
6. V
1037.40
1. IIIb
2. IVb
3. IV
84土
1038.60
1. IIIa2
2. III
30土
1038.60
31土
IIIa2
1038.40
69土
1. IIIb2
2. IIIb
1038.10
1. IIIb1
2. IIIb
3. IVa
4. IIIb
5. IIIb
6. IVa
7. IIIa
111土
1038.40
1. IIIb2
2. IIIb
3. IIa
4. VIa
5. IIIa
6. VIa
7. IIIa
43土
1040.40
2土
1040.30
3土
1041.30
1. IVb
2. IVa
5土
1040.70
13土
I a
1040.10
16土
1040.60
17土
IIIa
1040.60
1. IIIb
2. IIIa
18土
1040.10
1. IIIa
2. IIIb
19土
1040.30
20土
1039.80
1. IIIb
2. IIIa
21土
36b土
36a土
1038.50
1. IIIb
2. III2
3. VI2
33a土
33b土
1038.40
1. IIIb2
2. III
1038.20
60土
IIIb2
1038.20
61土
IIIb2
1038.30
63土
IIIb2
1038.40
65土
IIIb2
1038.30
1. IIIb
2. IV
67土
1038.30
1. IIIb2
2. IIIb
68土
1038.30
70土
IIIb2
1037.40
1. IIIb2
2. IIIb
91土
1037.10
1. IIIa1
2. IIIb
93土
1037.40
94土
1037.80
95土
IIIb
1037.80
96土
III
1038.30
1. IIIa2
2. III
3. IIIb
4. IV
98土
1038.20
133土
1038.30
1. IVb1
2. IV
136土
1038.30
1. IIIb2
2. IV2
137土
1038.00
138土
IV2
1037.80
144土
IIIa2
1037.70
145土
IVb
1037.80
151土
IIIb2
0
2m

第15図　土坑(1)（1/60）



第16図　土坑(2)（1/60）

ピットに分類されている（石井　1990、小池　1994）。このうち縄文時代後期に帰属する小規模な土坑については、小池岳史氏によりピット群と柱穴としてまとめられ、集落内での分布域と密度、他の遺構との位置関係から、柱穴は「トーテムポール様の柱が建てられていたかもしれない。」とされ、ピット群については幾つかの小規模な柱穴により構成された簡単な上屋構造が設けられていた可能性をふまえた上で、人間の精神生活に由来する遺構ではないかと解釈されている（小池　1994）。

本遺跡から検出された土坑は立石遺跡と類似する構成をもつ。形状や遺物出土状況などによりその用途を推定するとすれば、第Ⅰ群は狩猟のための陥穴であり、第Ⅱ群ａ類は断面形状が立石遺跡例とは異なり遺物も出土していないが、平面形状からみて墓坑として捉えられる。第Ⅲ群土坑の構成は立石遺跡で貯蔵穴として捉えられた土坑と同じ特徴をもつ。第Ⅲ群土坑については深さと径で細分したが、深さと径は土坑容量に関わる属性であり、用途差を反映する可能性をもっている。本遺跡での第Ⅲ群土坑の分布は住居帯より内部の土坑群と、住居址帯に接する位置に設けられた土坑群に分けることができ、用途差あるいは占有者の差を示している可能性がある。第Ⅳ群土坑の分布には住居址帯のはずれに密集する群と住居址帯より内側に散在する群がみられる。ピット群がその密度により散在する遺構群と密集する遺構群に分けられる現象は立石遺跡例と同様であるが、立石遺跡例では墓坑群との対応関係が指摘されているが、本遺跡では墓坑との関係は不明確で、むしろ今次調査区のピット群は一定の空間を避けることを特徴としている。　（功刀）

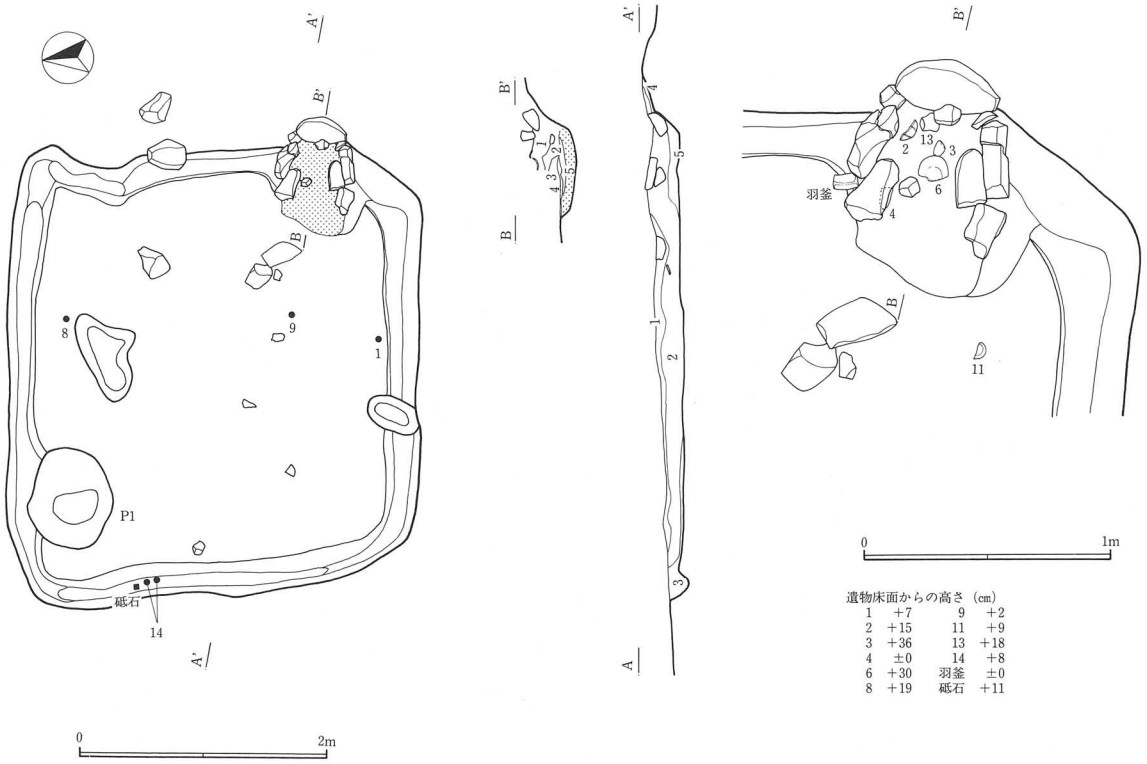
第３節　平安時代の遺構

１号住居址（第17図、図版７－１・２）

検出状況　Ｂ区で検出された住居址である。平面形は隅丸長方形、長軸3.58m、短軸3.12mの方形の平面プランを持つ住居址である。長軸方向はN-90°-E方向、主軸方向はN-104°-Eである。壁は比較的しっかりしている。壁高は東壁が11.3cm、北壁19.4cm、西壁16.4cm、南壁８cmで、地形に沿って南壁が低くなっている。総じて壁面は高くはない。壁際からは周溝が検出され、全周している。

土層は５層に分層できた。１層は黒色土で１～３mm大のローム粒子が少量みられる。２層は暗褐色土で１mm～２mm大のローム粒子が多くみられ、１～２mm大の炭化物が全体的にみられる。カマド付近では炭化物が特に多く、焼土粒子も混入している。この層が遺物包含層と考えられる。３層は暗褐色土でローム粒子の量が多い。住居の床に係わる部分か。４層は暗黄褐色土でほとんどがローム粒子からなっている。５層はカマドの真上に位置するため、２cm大のローム粒子と１mm大の焼土粒子、２mm大の炭化物が多い。

カマドは住居址の東壁の南の隅にある所謂コーナーカマドで、住居址の壁をカマドの全長の約1/5掘り込んで構築されている。構築材は石で袖石は良好に残っていたが、天井に置かれていた石などは後年の撹乱により外れ周辺に散乱していた。煙道は明らかでないため、カマドの奥から急角度で住居址の外へ煙が排出されていたことが考えられる。焼土はカマドの前から南側の脇にかけて広い範囲で見られ、灰などを南方向へ掻き出していたことが判る。カマド内の土層は６層に分層された。１層は暗褐色土でローム粒子を多く含む。２層は黒色土でローム粒子を少量含む。３層は暗褐色土で焼土粒子とロームブロックを多く含む。４層は暗褐色土で焼土粒子と炭化物を多く含む。５層はロームが焼成を受けた部分と思われる。６層は焼土で20cmの厚さを持つ。この内１層中よりほぼ完形の土師器坏が正位で出土している。カマド内からは５個体の土師器



第17図　第１号住居址（1/60、カマド1/30）

が検出されている。

柱穴の存在は確認できないが、床下土坑と考えられるものとしてP_1がある。あまり明瞭ではない。

遺物の出土状況　大部分がカマドの周辺から検出されている。土師器坏が７個体、底部が９個体、土師器高台付坏が７個体、黒色土器は坏が１個体、高台付坏が２個体、灰釉陶器碗が１個体出土している。甕類は、羽釜が出土しているが、破片のみである。出土遺物はいずれも確認した面より４～６㎝浮いた状態で検出されるため、なんらかの敷物を使用していたことが想定できる。

この住居址の時期は出土遺物から10世紀後半から11世紀前半と考えられる。

２号住居址（第18図、図版７－３）

Ｂ区で検出された住居址である。当初１軒の住居址と考えていたが、柱穴がプランの外側に一部出ていた事と西側の周溝が途中で屈折していたことにより、南側に規模の小さい住居址が重複していたことが判った。北側の規模の大きな住居址をａ住居址とし、南側の規模の小さい住居址をｂ住居址とする。この２軒の住居址は耕作による削平を受けており、壁面は全く残っていない。

ａ住居址のプランは推定ではあるが、長軸5.20m、短軸5.12m、長軸方向はN-105°-E、カマドの主軸方向はN-81°-Eである。周溝は一部が残っており、北側の周溝は10㎝、西側は14㎝の深さである。

カマドは、構築材に係わる遺物は何一つ検出できなかった。焼土だけが、東壁と推定される場所の北側と南側で確認された。北側の焼土址は、耕作による撹乱により焼土が散布していたところから判断したが、カマドであるかどうかは不明である。

ｂ住居址はａ住居址に比べると小規模な住居址で、およそ１号住居址と同じくらいの規模であることが推察される。プランがあると考えられる場所からは焼土址は検出されず、カマドの位置は不明である。前述の通り柱穴の存在によってこの住居址の存在がある程度予測できた。ａ・ｂ住居址に係わると考えられるピットは12基あり、ａ住居址はP_1～P_5、ｂ住居址は$P_{6\cdot7\cdot9\sim12}$である。ａ住居址のものは主柱穴であるのか、何らかの施設に係わるものなのかは明らかではない。ｂ住居址に関わるピットは形態と土層から柱穴であると考えられる。P_8はどちらの住居址に帰属するのかは不明であるが、形態から判断するとどちらかの住居址の柱穴であろう。

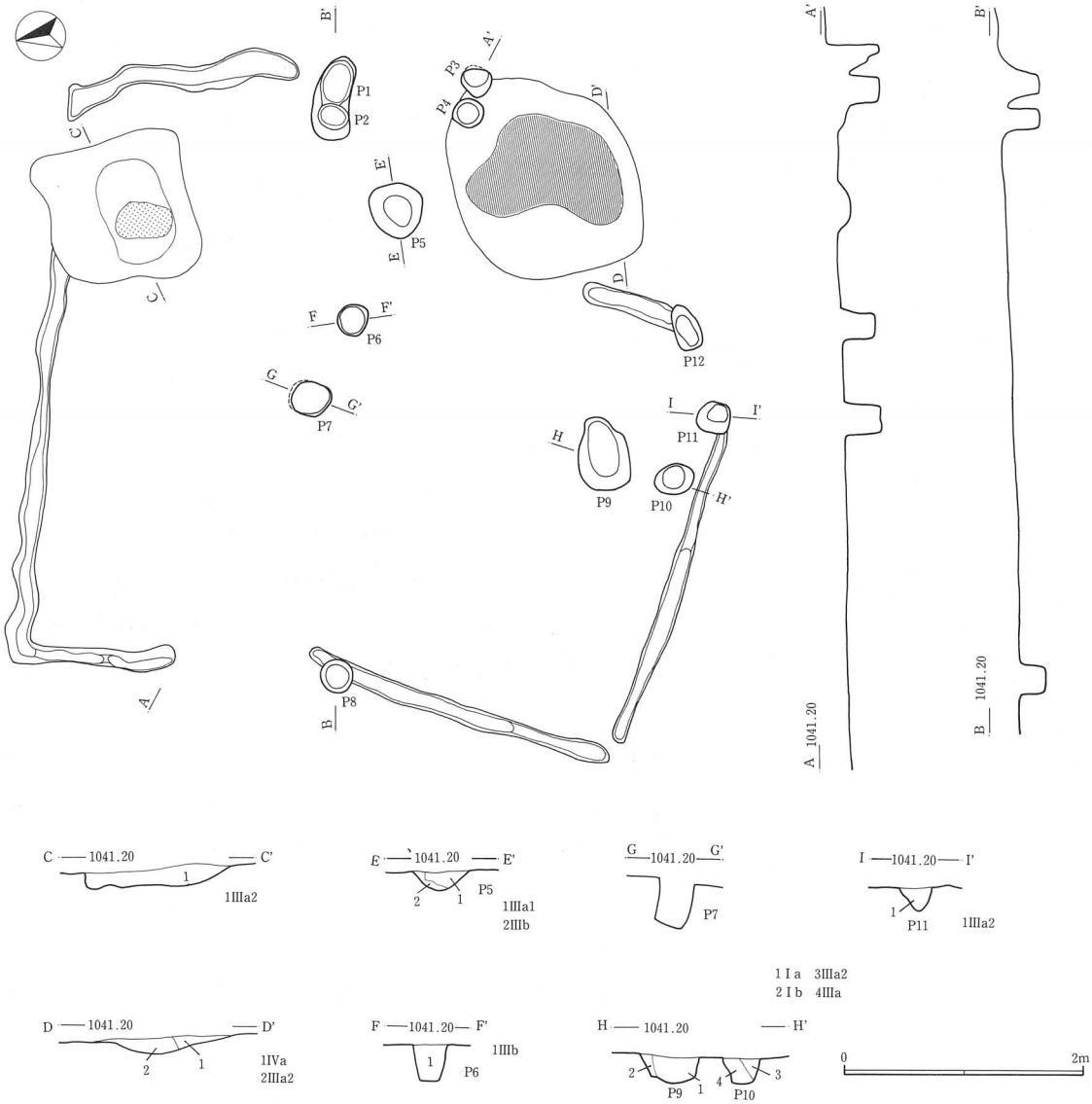
出土した遺物は、灰釉陶器と土師器、黒色土器の破片であるが、量も少量で図示には至らなかった。

時期は住居址の構造等から他の住居址とはそれ程違いのない時期であると考えられる。

３号住居址（第19図、図版７－４・５，８－３～８）

検出状況　Ｂ区で検出された住居址である。長軸4.44m、短軸4.14mの隅丸方形のプランを持つ住居址である。長軸方向はN-18°-E、主軸方向はN-45°-Eである。周溝は全周しているが南側はロームマウンドに掘り込まれていたために明瞭ではない。壁高は北壁39.6㎝、東壁22.2㎝、西壁24.6㎝であった。ベルトの土層観察の２層より下の層、南側の土層観察の６層より下の層が主な遺物包含層となっており、これらの面を当時の生活面として考えるとかなり深い掘り方の住居址である。

土層は６層に分層できた。１層は黒色土でローム粒子を少量含む。２層は黒色土でローム粒子が多く見られ、炭化物と焼土粒子が稀にみられる。３層は黒色土で２層よりローム粒子やロームブロックの量が増える。炭化物を少量含み、遺物包含層である。４層は黒色土でローム粒子とロームブロックを多く含み、焼土粒子、炭化物を少量含む。５層は暗褐色土で、ローム粒子、ロームブロックを含み、炭化物を少量含んでいる。６層は暗褐色土でローム粒子、ロームブロックを多量に含み、所々にローム粒子が密集しているところがみられる。また、炭化物を少量含んでいる。６層がこの住居址の床面である。



第18図　2号住居址（1/60）

カマドは北東隅にある所謂コーナーカマドである。住居址の壁をカマドの全長の1/8掘り込んで構築されている。構築材は石と粘土である。袖石は残っていたが天井石は外れていた。煙道はカマドの奥が住居址の壁に沿って急角度に上がり、煙道口と思われる場所の両側に礫が置かれている。土層は6層に分層できた。1層は暗褐色土でローム粒子、ロームブロックを少量含み、炭化物を少量含む。2層は暗褐色土でローム粒子、焼土粒子を多く含み、粘土粒子も見える。3層は暗茶褐色土でローム粒子、ロームブロック、炭化物、焼土粒子を少量含む。4層は暗赤褐色土でローム粒子、ロームブロックを少量含み、全体的に焼成を受けている。5層は暗茶褐色土で、ローム粒子とロームブロックを少量含む。6層は焼土で10cmの厚さである。

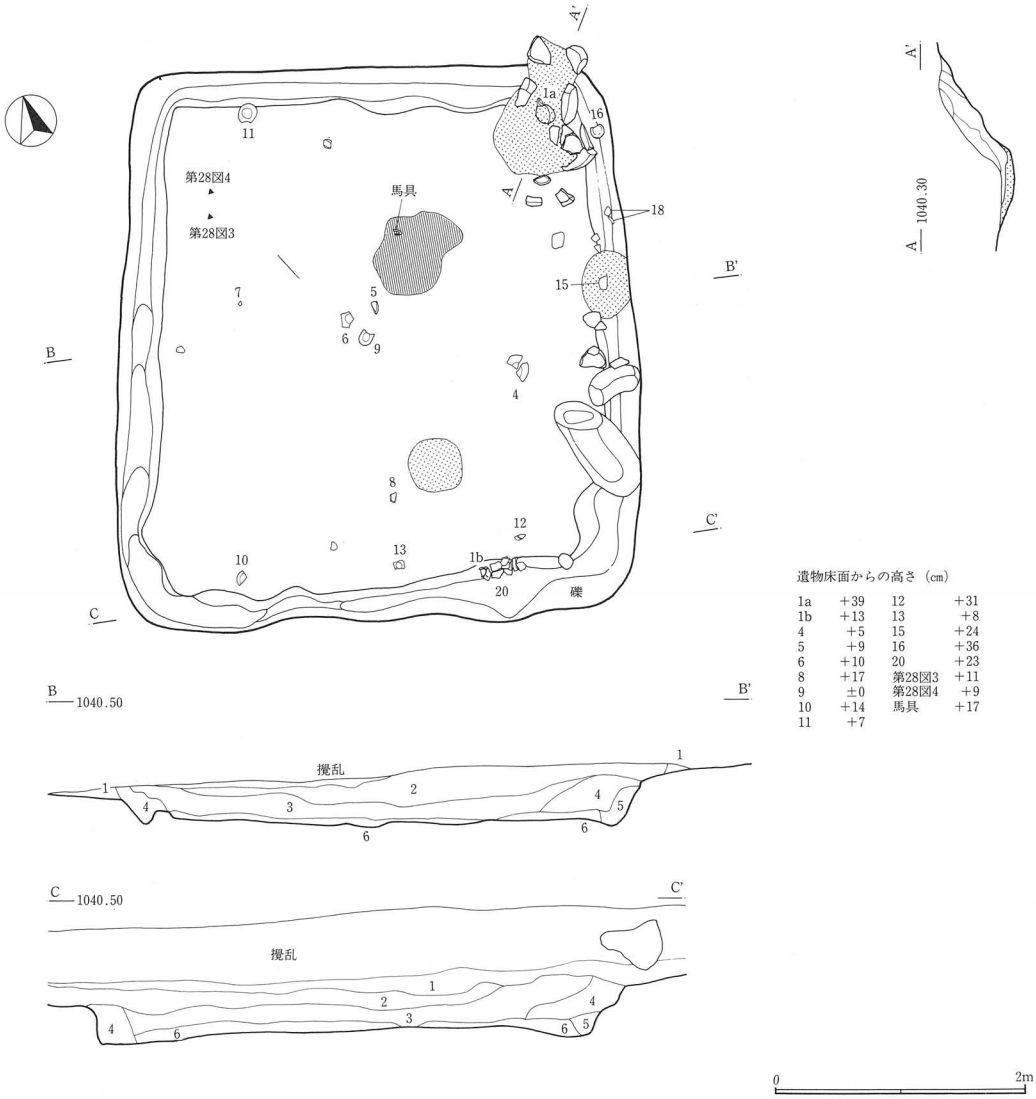
カマドの他に焼土址が数ヶ所でみられる。東壁中央部では土層観察を行ったときに若干ではあるが焼土粒子の散布がみられ、付近からは16～46cmの礫が検出されているために、カマドがあったのではないかと考えられる。礫の南側の土坑からは白色の土と焼土を検出している。住居址北側の床面からは多くの炭化物や白色土を多く含んだ部分が検出され、カマドの灰掻穴であった可能性がある。南側の床面には焼土址が円形に検出され、5cm堆積していた。カマドの中からは緑釉陶器片が出土し、南壁際から検出された緑釉陶器片と

接合した。

ほとんどの遺物は床面より約15cm浮いた状態で出土している上に、叩いた床と考えられる6層はあまり堅くないので、生活していた当時は何等かの敷物を敷いていたか、床を高くして生活していたのではないかと考えられる。

遺物の出土状況　灰釉陶器を中止として出土している。土器は緑釉陶器碗1個体、灰釉陶器皿5個体で、うち、段皿1固体、輪花皿1個体、碗7個体、土師器坏5個体、黒色土器高台付坏が2個体出土している。黒色土器は両者とも同じ暗文が施されている。煮沸具や貯蔵具は、甕が2個体と破片が出土している。20の甕は南壁際の緑釉陶器のすぐ東側より検出し、底部が抜かれていた。緑釉陶器はカマド内と南壁から出土し、両者は同一個体であり接合した。前述の甕1個体と、10cm大の安山岩の丸い礫が出土している。また、緑釉陶器の下からは、底部と胴部の一部が残存している灰釉陶器が2個体出土した。北側の焼土址の付近からは馬具が出土した。北西隅付近では鉄鐸が2個体出土した。他に住居址を掘り始めたときにかなり上面で、馬具と鎌の破片が検出されている。

この住居址は出土遺物より10世紀後半から11世紀前半と考えられる。



遺物床面からの高さ（cm）

1a	+39	12	+31
1b	+13	13	+8
4	+5	15	+24
5	+9	16	+36
6	+10	20	+23
8	+17	第28図3	+11
9	±0	第28図4	+9
10	+14	馬具	+17
11	+7		

第19図　3号住居址（1/60）

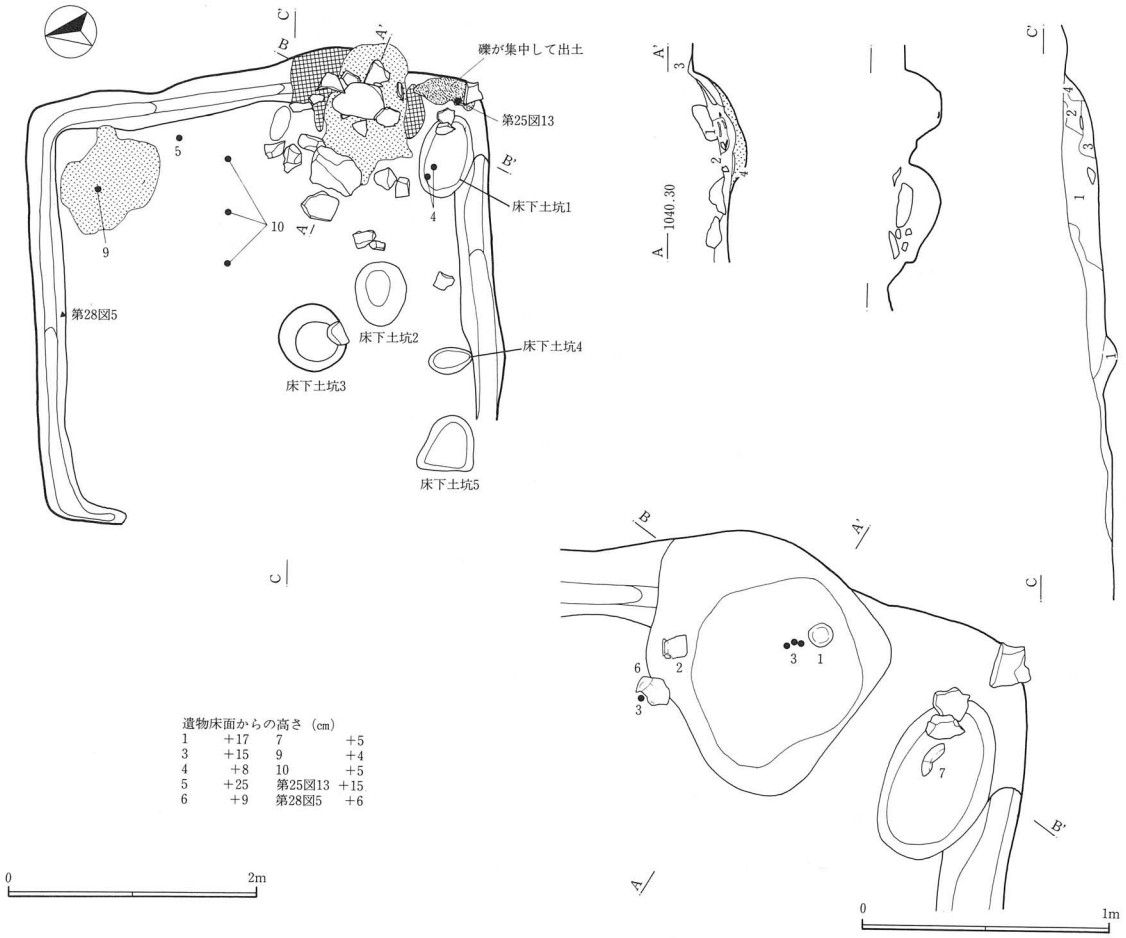
第４号住居址（第18図、図版８－１・２・８）

検出状況　Ｂ区で検出された住居址。長軸3.68m、短軸3.60m、長軸の軸線方向はN－６°－E、かまどの主軸方向は新カマドがN－110°－Eで、旧カマドがN－30°－Eである。隅丸方形のプランを持つ。

壁は西側が撹乱によって消滅しているほかは、浅いながらも残っていた。周溝も西側以外は残っていた。北壁11cm、東壁27cm、南壁６cmの深さをである。

土層は４層に分層できた。１層は黒色土でローム粒子を多く、炭化物を少量含む。２層は暗褐色土でローム粒子を含む。焼土粒子が稀に見られ、炭化物を少量含む。３層は暗褐色土でローム粒子を多量に含む。４層は暗褐色土でローム粒子を多く含む。また、粘土粒子およびブロックを多く含む。

カマドは東壁の中央よりやや南寄りで検出された。焼土の周辺より多量の粘土と礫が検出されたために、石組粘土製のカマドであることは明白である。石組は原形を止めず、付近に散乱していた。このカマドは住居址の壁をカマドの全長の約1/5を掘り込んで作られたものである。煙道は見られないため、１・３号住居址と同じようにカマドの奥壁から直接外部に煙が排出されていたと考えられる。焼土は他に東壁北隅でも検出された。直径60cm程であり、粘土や礫は検出できなかったが、南隅のカマドが構築される前のカマドであるとことが考えられる。焼土は９cmの厚さである。新・旧ともに所謂コーナーカマドである。カマドの土層は５層に分層できた。１層は暗褐色土でローム粒子とロームブロックを多く含む。２層は暗褐色土でローム粒子を多く含み、焼土粒子と炭化物を多く含む。３層は暗灰色土で、ほとんどが粘土質の土で炭化物を少量含む。４層は明褐色土で焼成を受けた土とロームである。５層は焼土で10cmの厚さである。



第20図　４号住居址（1/60、カマド1/30）

カマドの周辺からは南東隅より５㎝大の礫が多く検出された。これらの礫はいずれも焼成を受けていた。床下土坑は４基確認された。カマドの南側にある床下土坑１は、平面形が楕円形で、深さは35㎝である。内部より礫や土師器の破片が出土している。若干灰と思われる土がみられたが、混入したものと考えられ、灰掻き穴ではない。用途は不明であるが、カマドか調理に係わる遺構であると推定される。床下土坑２と３は20㎝程の深さを持ち、床下土坑２が平面形が円形で、床下土坑３はやや楕円形をしている。２はしっかりした掘り方を持ち、住居址の主柱穴ではないかと思われる。床下土坑５は平面形が不正形で深さ10㎝で掘り込みが浅い。上部より灰釉陶器の破片が出土している。この土坑の性格は不明である。

遺物の出土状況　遺物はほとんどカマドの内部かその周辺で出土している。カマドの内部からは、１号住居址のようにかなり小型の土師器の坏１が正位で出土した。この坏の内部には粘土が詰まっていた。北側の周溝内では金属製品が検出されている。この金属製品は金属の周囲に木質の物質が付着している。この金属製品の性格は不明である。

この住居址は出土遺物より10世紀後半から11世紀前半と考えられる。

（柳川）

第４節　発掘された遺物

１．縄文時代の遺物（第21図～第24図）

土器

縄文時代中期初頭の土器（第24図）

遺構外から１点出土した（第24図92）。地文に縄文を施す。

縄文時代中期末葉の土器

第７号住居址からまとまった資料が得られた。第21図１は埋甕に用いられた土器であり、底部を欠く。口縁部に幅広の無文帯を残し頸部に浅く広い沈線を施している。５単位の隆帯が施され、隆帯脇に軽いナデが加えられた後、地文に櫛状工具による縦位構成の条線文が施文されている。２は波状口縁の土器で、４単位の波頂部に隆帯による渦巻文を配し、垂下する隆帯により胴部を分割する。胴部は４単位の波頂部とは一部一致せず５単位に分割されている。隆帯脇に沈線を加えたのち、稜をもつ棒状工具により綾杉状のモチーフを意識した沈線が施されている。３は縄文が地文に施され、口縁部に縦位の沈線を密に施した後、波状の隆帯を５単位施し両脇に沈線を加えている。胴部は縦位の結節縄文により分割される。結節縄文はほぼ波状隆帯の波頂部と波底部に施されるが一部規則性に乱れが生じている。底部には木葉痕が観察された。第１号焼土址出土の79、遺構外出土の94は３に類似している。４は小形土器である。接合はしないが第21図８と同一個体であると思われる。口縁部は内側屈曲し、口縁部以下胴部まで縦位の縄文が施され、底部には木葉痕が観察された。この他、覆土から口縁部に斜状の半隆起線が施された土器（５）が出土した。５は無文の口唇部が内側に屈曲し、７は頸部に刺突を加えた隆帯が巡る。隆帯は比較的太い。10は胴部器形が筒型に近く口縁部が開くものと思われる。頸部下に沈線に連結するように楕円区画を描き、縦位の沈線文を充填する。口縁部と胴部に縄文が施される。土器群の文様構成から曽利III段階に属すものとみられる。

第５、６、９号住居址は中期最終末から後期前半にかけての住居址であるが中期後半の土器が出土している。おそらく第７号住居址に属す土器であろうと思われる。18は列点文を地文とし低い隆帯により渦巻文を描き隆帯の脇に浅い沈線を施した土器、20は地文に沈線を縦位に施した後頸部に交互刺突を加えた土器でいずれも曽利II段階の特徴をもつ土器である。

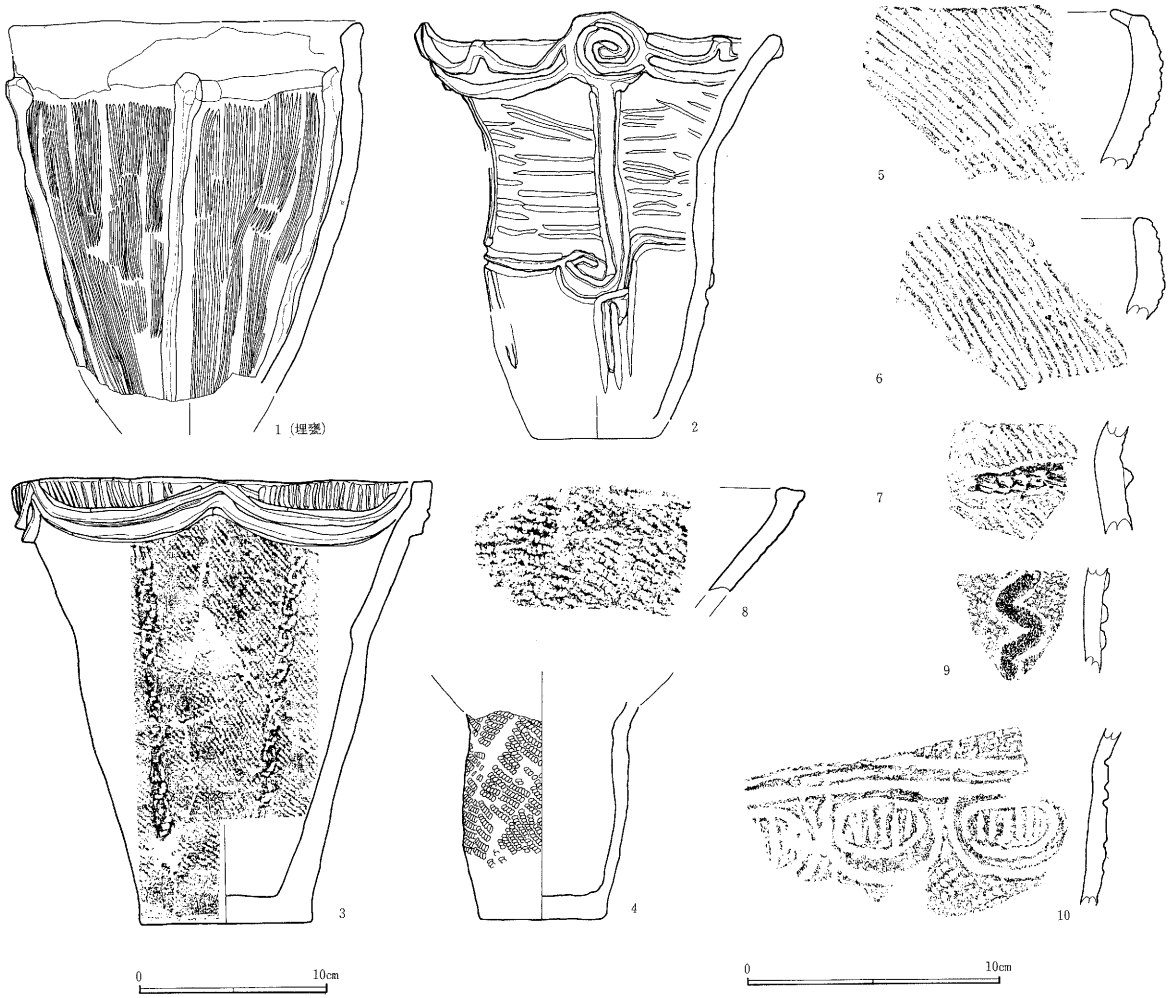
21から23は矢羽根状構成をとる沈線文を地文とし隆帯が加えられるが、23の隆帯は低隆帯であり、やや後出の要素をもつ。25、26は半截竹管による条線文を地文とし低隆帯が文様を描く。曽利III式の段階である。

27から29は櫛状工具による条線文を地文とし、浅い沈線により区画文を描く。曽利IV式の段階である。30は櫛状工具による列点文が矢羽根状構成をとり、やはり浅い沈線により口縁部文様と胴部区画文が描かれる。この他第１号焼土址出土の80、遺構外出土の97などの加曽利E系の土器が出土している。

縄文時代中期終末から後期前半の土器

第５、６、９号住居址覆土出土の土器は出土地点の記録に努めたが、第５号住居址と第６号住居址が重複するなど遺物の遺存状況が不明確であったため一括して報告する。また資料数が少ない他の遺構出土の土器もあわせて記述する。

中期終末から後期初頭の土器は比較的多く出土した。第５、６、９号住居址から出土した31、第23図33から36、遺構外出土の96は「ハ」の字状構成をとる沈線文が施される。96がヘラ状工具によりしっかりとした沈線で施文されるのに対し、31はより弱い沈線により文様が描かれている。33から35は地文に縄文が施され、



第21図　第７号住居址出土土器（1～4　1/4,5～10　1/3）

棒状工具による浅い沈線で冂状区画文と矢羽根構成をとる沈線が描かれ、36は波状口縁の土器で、先割れ状の工具による痕跡的な沈線により区画文と縦位の沈線文が施文されている。

加曽利Ｅ系の土器であると考えられる縄文系土器群では、沈線による渦巻文を施すもの（39,41）、微隆起線文により文様を描く土器（37,38）がみられる。微隆起線文が施される土器でも38は痕跡的なものである。第10号住居址出土の74も同様な特徴をもつ。

45、46は棒状工具による太い沈線と垂下する隆帯が特徴的で円形竹管による刺突が施される。先細りの棒状工具により刺突文が施される44とはやや異なる印象を受ける。48は浅鉢口縁部と考えられるものである。

第５号住居址炉体土器は無文の鉢形土器であると思われるが、器厚は無文粗製の土器に比べ薄く、調整は丁寧である。

以上の土器群は第５号住居址に属し、中期終末から後期初頭に位置するものと考えられる。文様構成の変化からみて段階差をもつものと思われるが今回は一括して扱うこととする。

47は口唇部直下の幅狭な無文帯を刺突を加えた隆帯文で区画している。穿孔された波頂部に棒状工具による渦巻文を施し２本の沈線による三角形文様内に縄文を充塡している。

第８号住居址炉体土器（69）は鉢形の器形を呈し、口縁部がやや緩く屈曲する。口縁部に横位の貼付文から派生する２本１組の隆線が３単位巡り、その間に３単位の８字状貼付文が施される。隆線が収束する貼付文から胴部に垂下沈線が施され、３単位の横位突出文が描かれる。横位突出文の先端の一部には渦巻きをな

さないものがある。８字状貼付文から垂下する沈線は胴部で渦巻文を描く。第８号住居址覆土出土土器には沈線による曲線文と縄文が施文される73が伴う。

第６号住居址炉体土器（12）の口縁部には８字状貼付文に収束する２本１組の刻みをもつ隆線が３単位施される。８字状貼付文は６単位施される。胴部文様は口縁部の隆線と対応する貼付文から、沈線により縁取りされた無文帯により横位突出文が描かれ、８字状貼付文に向う斜行無文帯が結ばれている。無文帯以外の部分には縄文が充塡される。

49から55、81は口縁部破片である。49は口縁部の傾きが弱く、口唇部直下の一条の沈線の下に２本１組の沈線が縦位に描かれ縄文が施文される。50から52は鉢形の器形の口縁部で、口縁部文様帯以下は無文帯となる。54、55は口縁部の屈曲が弱くなり渦巻文や円文が描かれている。以上の口縁部破片のうち文様構成からみて49は47と、81は後述する第６、８号住居址炉体土器と併行するものと思われる。

60から61は縄文の上から馬蹄形の沈線が施される。全体の器形は大きく開く口縁部から頸部が締り球形に近い胴部へ続く金魚鉢に似た器形であると思われる。頸部に施された棒状工具による沈線は57から59に比べ太く、沈線と想定される文様構成からみて47との共通性が感じられる。遺構外出土の98、99の文様にも同じ傾向性がみられる。

57は口縁部の無文帯に続き、頸部に２本１組の刻みを施した隆線が巡り、胴部には向い合う孤線文を描くものと思われ、縄文を充塡している。58は垂下する刻みをもつ隆線が２本施され、孤線文が隆帯に連結する。59は垂下する一条の沈線の下部を４本以上の沈線がまわる。以上の土器は出土位置と文様構成から第６号住居址に伴うものと考えられる。67は沈線により渦巻文を描き縄文を充塡する。63は比較的小形の鉢形土器で横位突出文に類似する文様が施されている。土器の文様構成などから上記の土器は堀之内Ⅰ式併行期の土器であり、第11号住居址柱穴出土土器（76）、第１号焼土址出土83から85、第43号土坑出土の90、遺構外出土101も同じ時期に属すると考えられる。

第９号住居址炉体土器（13）は、口縁部と頸胴部境界に施された１条の沈線文により区画された文様帯内に、棒状工具を用いた多条の沈線文による菱形文と三角文が横位に構成されている。口縁部には８字状貼付文が施される他は無文であり、区画沈線の上部で口縁がわずかに屈曲している。14も13に類似した文様構成であるが沈線間に縄文が充塡されている。64、65は文様が直線的になり沈線は深く施されるがやや細い。第９号住居址炉体土器と同じ文様構成をとると考えられる。第９号住居址からは頸部に調整痕の残る無文粗製の深鉢が出土した。堀之内Ⅱ式併行期の土器である。

第９号住居址出土土器より後出の要素をもつ土器に68がある。薄手小形の土器で口唇部直下に細い縄文帯が巡る。第１号焼土址出土の86、遺構外出土の103、104も同様な特徴をもつ。

出土土器と遺構の時期

雑駁ながら上述した土器群の特徴から遺構の時期をまとめておきたい。土器の遺存状況からみると第６号、第８号住居址、第43号土坑は堀之内Ⅰ式併行期に属す遺構である。第５号住居址は遺構の炉体土器の特徴と、第５、６、９号住居址周辺出土土器の構成から中期最終末から後期前半の住居址であると思われる。第10号、第11号住居址では柱穴から出土した１片の土器片の時期が判明するのみで出土土器による時期決定は難しいが、中期最終末以降に属すものと考えられる。第１号焼土址周辺からは、中期後葉曽利Ⅲ式の段階と堀之内Ⅰ式併行期、堀之内Ⅱ式併行期の土器が出土している。焼土自体からの出土遺物がなく明確な時期決定は困難であるが、出土土器の主体をなす堀之内Ⅰ式併行期の遺構であると考えておきたい。遺構外出土の土器は、中期初頭、曽利Ⅲ、Ⅳ式の段階と堀之内Ⅰ式、Ⅱ式併行期の土器が出土しており、それぞれの時期になんら

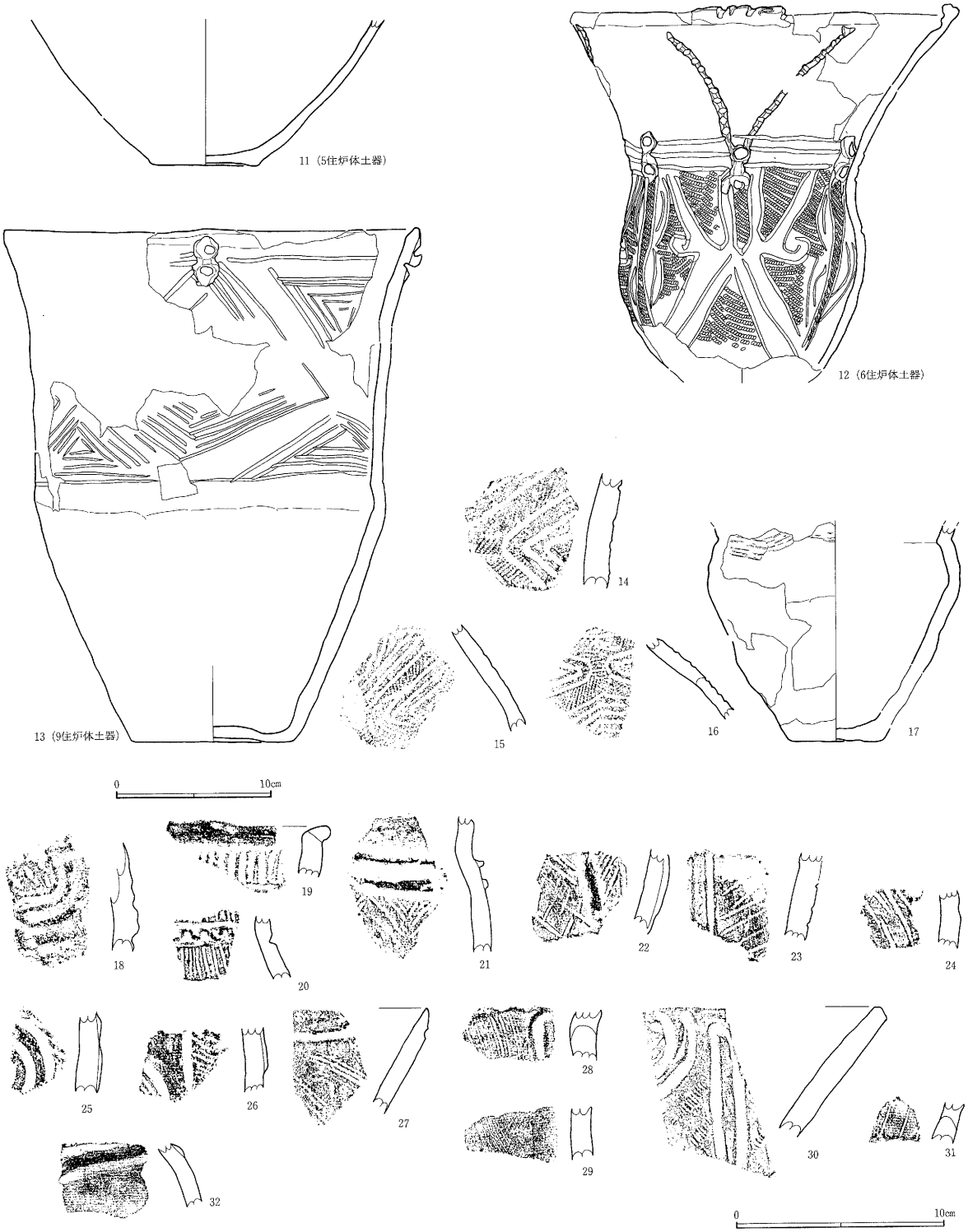
かの活動が行われていたものと思われる。

土製品（第24図）

土製円板が第５、６、９号住居址周辺より出土した。108は第９号住居址出土である。

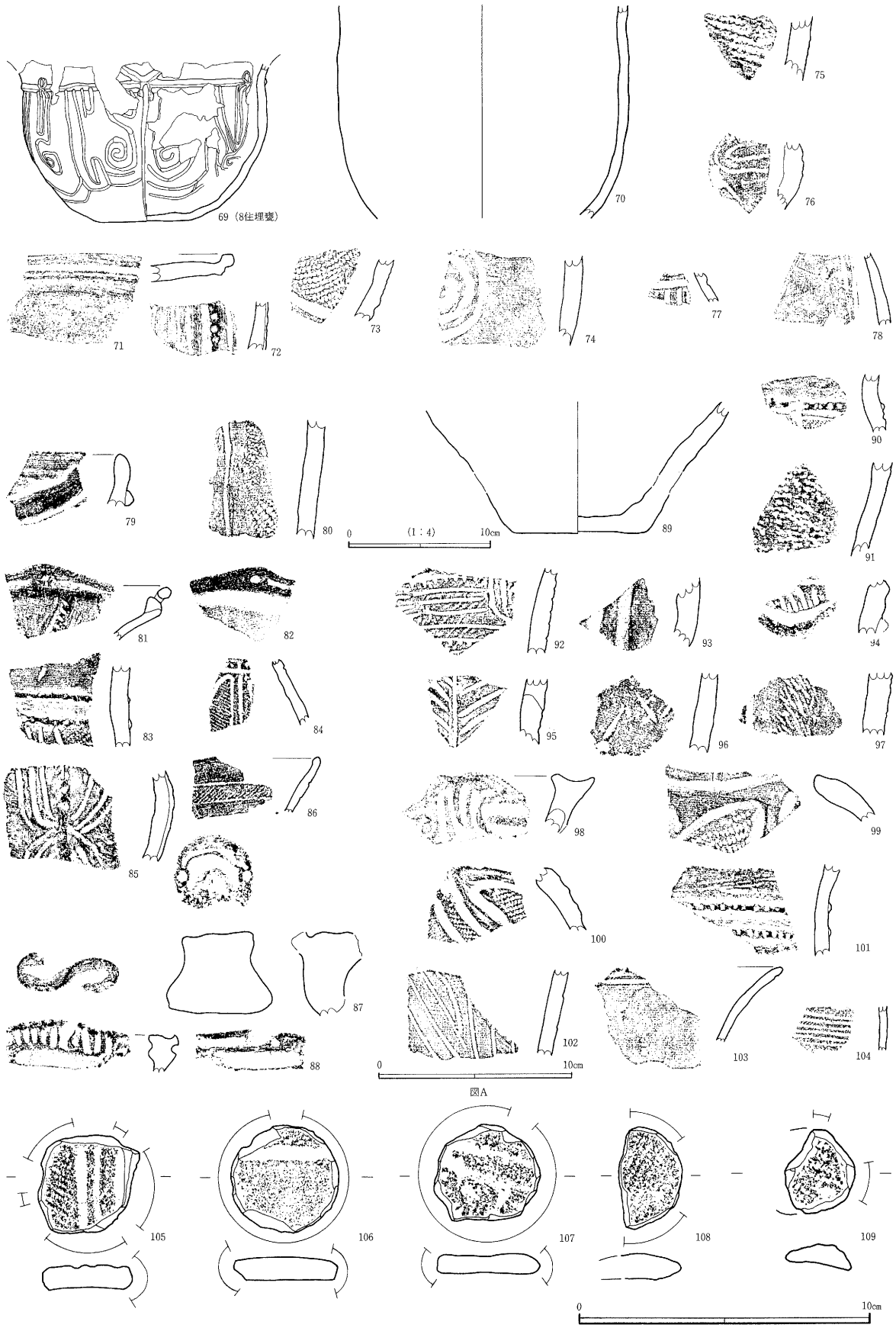
石器・石製品（付表１）

紙数の関係からおおまかな石器組成表を提示するに留め、分析については後日の課題としたい。



第22図　第５・６・９号住居址出土土器（11～13・17　1/4,14～16・18～32　1/3）

第23図　第５・６・７・９号住居址出土土器（1/3）



第24図　第８号住居址他出土土器および土製品（69･70･89　1/4,71～88･90～104　1/3,105～109　1/2）

2．平安時代の遺物

土　器

検出された4軒の住居址のうち、2号住居址を除き多くの資料を得ることができた。しかし、1個体完全な形で出土する土器は稀で大部分は破片で検出された。図示できた資料は出土資料の一部にしか過ぎない。以下に図示した資料を中心に各住居址の遺物の概観についてのべていきたい。

第1号住居址（第25図）

供膳具は灰釉陶器碗と土師器の坏、高台付坏、黒色土器の坏、高台付坏が出土している。

灰釉陶器は破片の出土量は非常に少なく図示した碗1点以外はほとんど保有していなかったのではないかと考えられる。1は体部全体が外傾し口縁が開き、口縁部は若干外反している。高台の形状は肉厚の三日月形であり、端部はかなり内彎している。外面底部は高台内縁部を篦削りで調整し、中心部の糸切り痕を篦で消している。釉薬は内面が淡く緑色である。

土師器坏は図示した7個体の他に底部が9個体分ある。口径と底径の差をみると2・3・6は約1/2、5は約1/3である。体部が立つ3と、体部が外傾する2・4・5・6とに分れる。調整をみるといずれも底部は回転糸切痕が残っている。胎土はほとんど軟らかく肌色のものが多いが、6のような赤褐色の破片も多くみられる。6はカマドのほぼ中央より正位で検出された。7は通常の坏に較べると糸切りの位置が下がっており、底部が厚くなっている。土師器高台付坏は図示した3個体の他に高台や底部が4個体分ある。10・11のように胎土に不純物をほとんど含まない粉末状の胎土のものと、9の様に多くの長石や雲母を含む粉末状の胎土のものがある。かなり粗雑な作りであり高台は外れている。

黒色土器坏は図示した1個体の他には見られなかった。黒色処理は内面のみで、口縁に近い場所に「寿」の墨書がある。かなり小型の土器である。底径は口径の1/2以下である。内定部には渦巻状のロクロ成形痕が明瞭に残っている。黒色土器の高台付坏は図示した2個体のほかには破片はほとんど見られなかった。全て内部に暗紋が施され、非常に似た図案である。12はスクリーントーンで示していない部分が1号住居址で出土した部分で、スクリーントーンで示した部分が4号住居址で出土したものである。1号住居址出土の部分はカマド内から検出され焼成を受けて内面の黒色の部分が赤く変色していたのに対し、4号住居址出土部分は焼成を受けていなかった。法量をみると大小で一対になっている。

煮沸具については羽釜の他に小型の甲斐型甕と考えられる口縁が出土している。羽釜は鍔の部分と胴部が一部出土しただけで図示できなかった。赤褐色の胎土で焼成は良好、内面は横方向に刷毛目があり、外面は縦方向に、鍔の部分は横方向に刷毛目がある。鍔が全周するタイプの羽釜と考えられる。

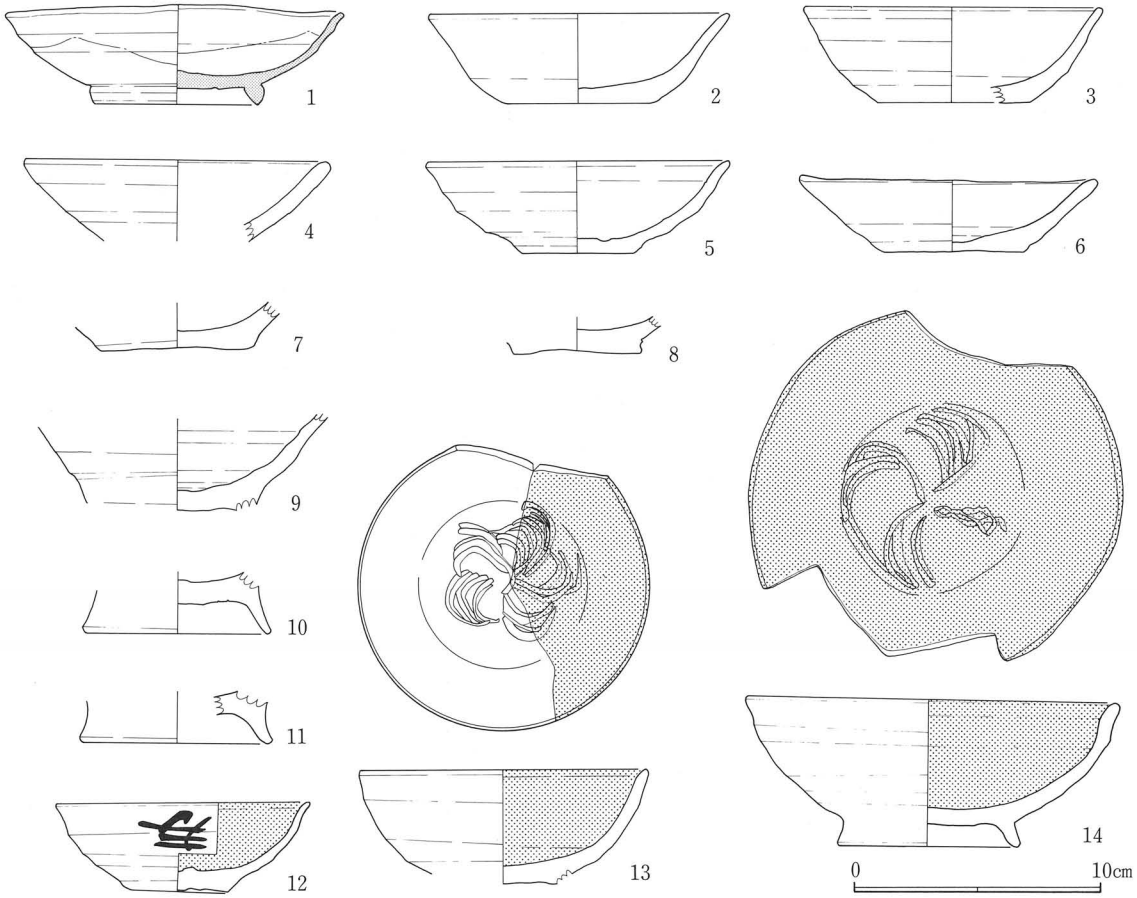
2号住居址

灰釉陶器、土師器坏、高台付坏、黒色土器といった供膳具の破片が検出され、煮沸具や貯蔵具は出土していない。検出された遺物は細かい破片のみであったため、図示はできなかった。

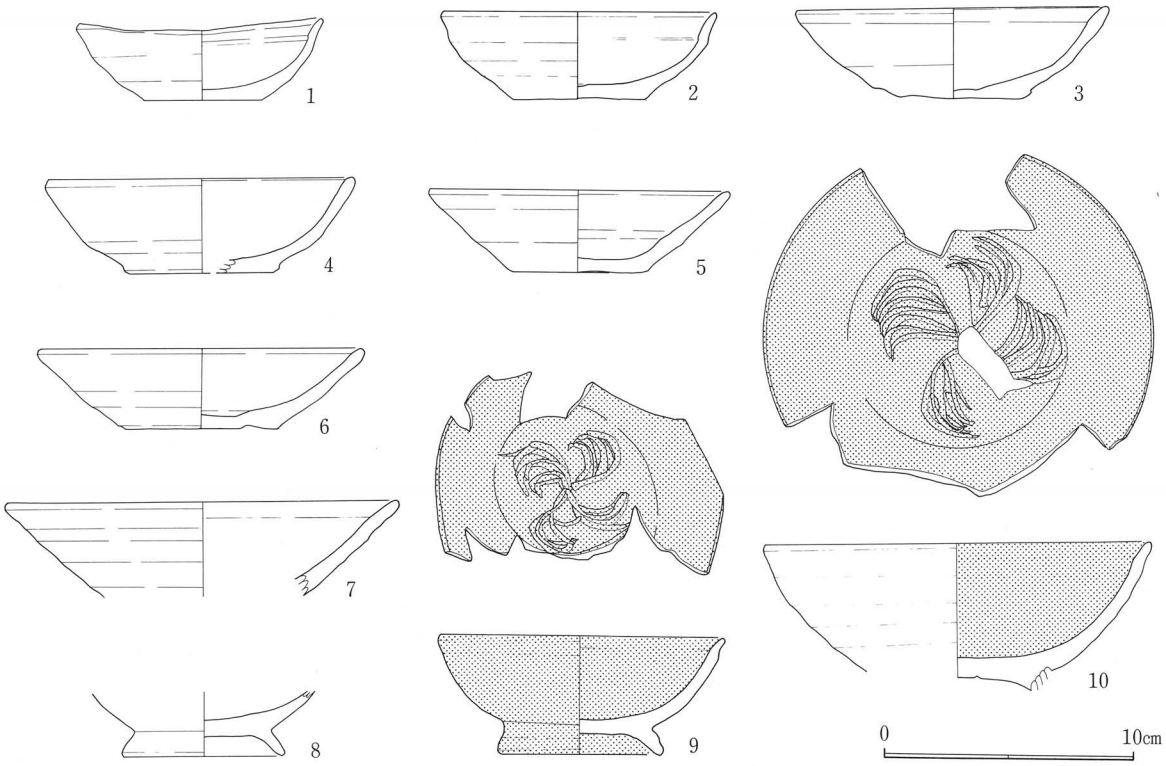
3号住居址（第27図）

供膳具は緑釉陶器、灰釉容器、土師器坏、高台付坏、黒色土器坏、高台付坏が検出している。

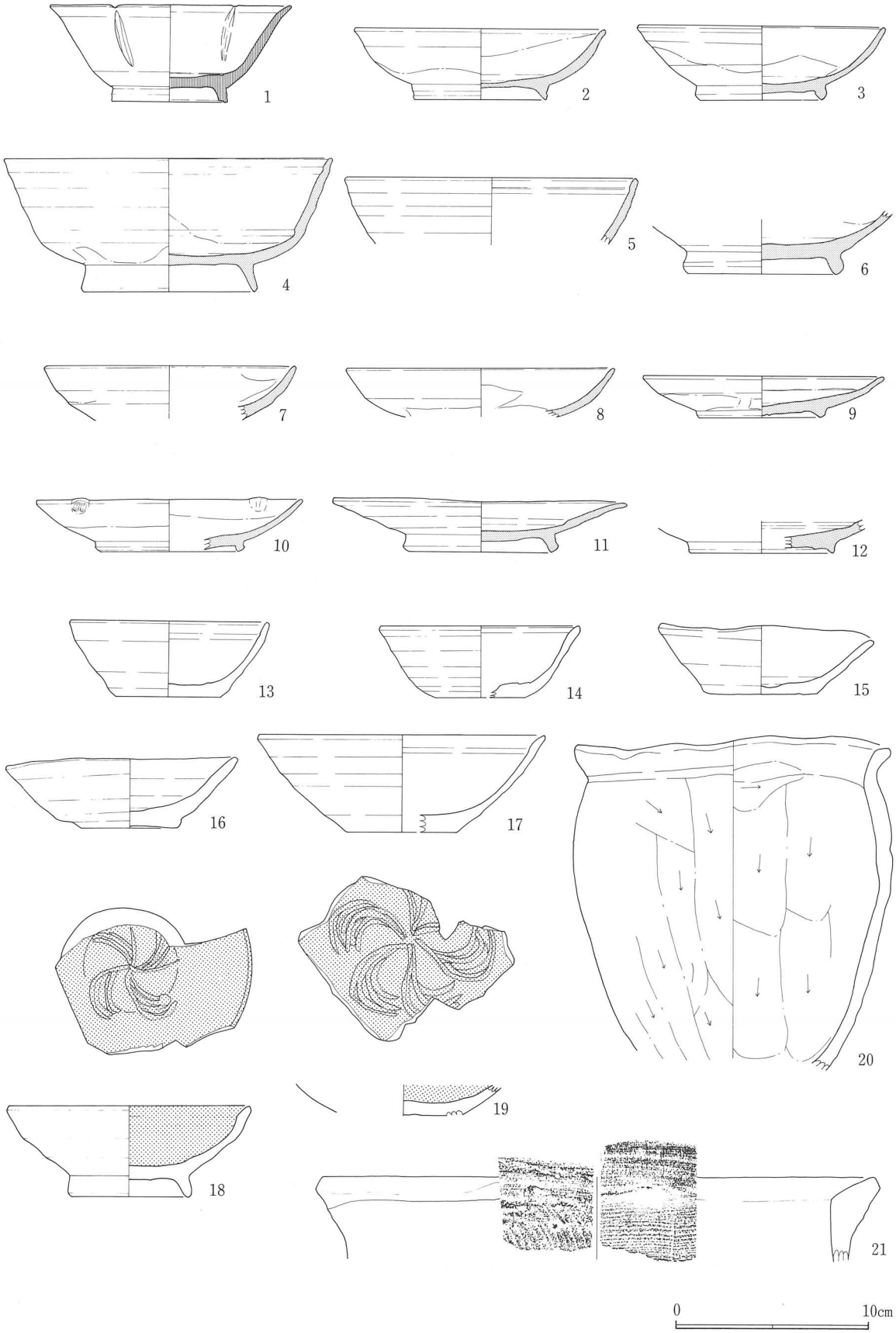
緑釉陶器碗についてみると、1は3つの破片が別々に出土し、後に同一個体であることが判明した。1つは土層観察のベルト内のかなりの高所から小破片が出土した。もう一つも出土した位置は高かったがカマドのほぼ中央で、最後の破片は南側の壁際より検出された。器種は輪花碗で、素地は青灰色で須恵器に酷似している。釉色は濃緑色で内外面に満遍なく釉薬が掛けられているが、高台の内面と外底部には全く施釉され



第25図　1号住居址出土遺物（1/3）



第26図　4号住居址出土遺物（1/3）



第27図　3号住居址出土遺物（1/3）

平安時代土器観察表

遺構番号	報No	No	種別	器種	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	製作技法	方向
1号住居址	25	1	灰釉陶器	碗	13.5	6.4	4	微細な長石	灰色	良好	ロクロ成形、ナデ、高台内縁部ナデ、施釉方法は漬け掛け、釉色は外面白色、内面淡緑色	左
		2	土師器	坏	12	6	3.6	粉末状、長石を多く含む	肌色	軟質	ロクロ成形、ナデ	右
		3	土師器	坏	12	6	3.85	粉末状		軟質	ロクロ成形、ナデ、外底部には回転糸切り痕残る	
		4	土師器	坏	12.2			粉末状、長石を多量に含む	肌色	軟質	ロクロ成形、ナデ	
		5	土師器	坏	11.8	3.8	3.7	微細な雲母、小石を含む	赤褐色	軟質	ロクロ成形、ナデ、外底部には回転糸切り痕残る	左
		6	土師器	坏	12	5.7	2.8	粉末状、微細な長石	赤褐色	軟質	ロクロ成形、外面ナデ、内面は篦削り、外底部には回転糸切り痕残る	左
		7	土師器	坏		6			褐色	良好	ロクロ成形、ナデ、外底部には回転糸切痕残る	左
		8	土師器	坏		5			赤褐色	良好	ロクロ成形、ナデ外底部に回転糸切り痕残る	左
		9	土師器	高台付坏				粉末状	肌色	軟質	ロクロ成形、ナデ、高台内縁部ナデ	
		10	土師器	高台付坏		7.2		粉末状	肌色	軟質	ロクロ成形、ナデ、高台内縁部ナデ	左
		11	土師器	高台付坏		7.1		粉末状	肌色	軟質	ロクロ成形、ナデ、高台内縁部ナデ	左
		12	黒色土器	坏	10	3.9	4.5	微細な長石と褐鉄鉱を多く含む	肌色	軟質	ロクロ成形、ナデ、外底部に回転糸切痕残る	右
		13	黒色土器	高台付坏	11.6				肌色	良好	ロクロ成形、ナデ、内面はかなり研磨されている、高台内縁部ナデ	左
		14	黒色土器	高台付坏	15	7.1	5.9	長石を多く含む	肌色	軟質	ロクロ成形、ナデ、高台内縁部ナデ	右
3号住居址	27	1	緑釉陶器	輪花碗	12.4	6	5		青灰色	軟質	ロクロ成形、ナデ、高台内縁部ナデ、釉薬は外底部以外に掛けられる（部分施釉）、釉色は濃緑色	右
		2	灰釉陶器	碗	13	6.8	3.7		灰色	良好	ロクロ成形、ナデ、高台内縁部ナデ、外高台中央には回転糸切痕残る、釉薬は漬け掛け、釉色は白色	左
		3	灰釉陶器	碗	12.8	6.2	3.8		灰色	良好	ロクロ成形、ナデ、高台内縁部ナデ、外底部中央部には回転糸切痕が残る、釉色は白、施釉方法は漬け掛け	左
		4	灰釉陶器	碗	17	8.8	6.9		白灰色	良好	ロクロ成形、ナデ、高台内縁部ナデ、外底部中央部篦削り、釉色は白、施釉方法は漬け掛け	右
		5	灰釉陶器	碗	15.1				灰色	良好	ロクロ成形、ナデ、釉色は灰色	左
		6	灰釉陶器	碗		7.5			灰色	良好	ロクロ成形、ナデ、高台内縁部ナデ、外底部中央部には回転糸切痕が残る、釉色は白色、施釉方法は漬け掛け	右
		7	灰釉陶器	碗	13				黒灰色	良好	ロクロ成形、ナデ、釉薬は漬け掛け、釉色は白色	左
		8	灰釉陶器	碗	13.9				灰色	良好	ロクロ成形、ナデ、釉薬は漬け掛け、釉色は透明でやや緑がかる	
		9	灰釉陶器	皿	12.4	6.1	2.15	微量に長石と小石を含む	灰色	良好	ロクロ成形、ナデ、高台内縁部ナデ、外高台中央には回転糸切痕残る、釉薬は漬け掛け、釉色は白色	右
		10	灰釉陶器	輪花皿	13.8	7.1	2.7		灰色	良好	ロクロ成形、ナデ、高台内縁部ナデ、釉薬は漬け掛け、釉色は白	右
		11	灰釉陶器	段皿	15.2	7.2	2.6	長石と小石を微量に含む	黒灰色	良好	ロクロ成形、ナデ、高台内縁部ナデ、外高台中央には回転糸切痕残る、釉薬は漬け掛け、釉色は白色	右
		12	灰釉陶器	段皿		7.1			黒灰色	良好	ロクロ成形、ナデ、高台内縁部ナデ、外底部中央部には回転糸切痕が残る、釉色は白黄色、施釉方法は漬け掛け	
		13	土師器	坏	10.4	5.4	3.9	長石、雲母を少量含む	肌色	軟質	ロクロ成形、ナデ、外底部には回転糸切痕が残る	右
		14	土師器	坏	10.4	4.6	3.7	長石、小石を少量含む	赤褐色	良好	ロクロ成形、ナデ、外底部には回転糸切痕が残り、内底部には渦巻状にロクロビキの痕が残る	右
		15	土師器	坏	11.1	5.8	3.6	長石を多く含む	褐色	軟質	ロクロ成形、ナデ、外底部には回転糸切痕が残る	右
		16	土師器	坏	12	5	3.6	長石、褐鉄鉱を少量含む	赤褐色	軟質	ロクロ成形、ナデ、外底部には回転糸切痕が残る	右
		17	土師器	坏	14.8	5.6	5	粉末状	肌色	軟質	ロクロ成形、ナデ、外底部には回転糸切痕が残る	右
		18	黒色土器	高台付坏	12.5	6	4.7		褐色	良好	ロクロ成形、ナデ、高台内縁部ナデ	右
		19	黒色土器	高台付坏				少量の長石を含む	褐色	良好	ロクロ成形、ナデ、高台内縁部ナデ	右
		20	土師器	甕	16.2				肌色	軟質	粘土紐輪積み後、内外面とも篦削り	
		21	土師器	甕	29				赤褐色			
4号住居址	26	1	土師器	坏	9.7	4.6	3.05	微量の褐鉄鉱を含む	褐色	良好	ロクロ成形、ナデ、外底部に回転糸切痕残る	左
		2	土師器	坏	11	5.2	3.4		茶褐色	良好	ロクロ成形、ナデ、外底部に回転糸切痕残る	左
		3	土師器	坏	12.6	6	3.7	長石と褐鉄鉱を多く含む	肌色	軟質	ロクロ成形、ナデ、外底部は雑に篦で削っている	右
		4	土師器	坏	12.4	6	3.8	少量の長石を含む	茶褐色	軟質	ロクロ成形、ナデ、外底部に回転糸切痕残る	右
		5	土師器	坏	12	5.6	3.3	長石と褐鉄鉱を多く含む	肌色	軟質	ロクロ成形、ナデ、外底部に回転糸切痕残る	左
		6	土師器	坏	13	6	3.2	長石と褐鉄鉱を多く含む	肌色	軟質	ロクロ成形、ナデ、外底部は雑に篦で削っている	左
		7	土師器	坏	15.9			粉末状、少量の褐鉄鉱と多くの雲母、長石を含む	肌色	軟質	ロクロ成形、ナデ	右
		8	土師器	高台付坏		6.2		粉末状	褐色	良好	ロクロ成形、ナデ、高台内縁部ナデ	右
		9	黒色土器	高台付坏	11.4	6.3	4.7	長石を少量含む	肌色	良好	ロクロ成形、ナデ、高台内縁部ナデ、底部を除く内面と暗紋はよく磨かれていて光沢がある	右
		10	黒色土器	高台付坏	15.5			長石を多く含む	肌色	良好	ロクロ成形、ナデ、高台内縁部ナデ、底部を除く内面と暗紋はよく磨かれていて光沢がある	右

ていない。口縁の一部は黄色く変色し、素地が若干露出している部分があり、焼成のときに変色したものと思われる。器形を見ると高台は外面に段がつき、端部は平たく内面に段がついている。胴部は丸みを帯び口縁部は外反する。内底部の外縁には溝がついている。輪花は箆で外側から押圧し、さらに口縁を箆で押さえたものと考えられる。この緑釉陶器は素地と高台の形状、釉色などからみて近江産であるといえる。

灰釉陶器碗の出土量はほかの住居址と較べて圧倒的に多い。図示した資料以外に違う個体と思われる破片が多く出土しており、実際は更に多くの灰釉陶器を保有していたことが考えられる。高台の形状は2の三角形を呈するものと2や6のような肉厚の三日月状のものと4の様に高く細いものとある。体部は2・3が開き、4は内彎し腰部が張っている。5は4によく似ている。2と3は南側壁際の緑釉陶器片と20の甕の下よりまとまって出土した。皿には8の普通の皿と11・12の段皿、10の輪花皿の3種類が出土している。10の輪花は押圧により成形し、外面には箆の痕だろうか縦方向の細かい傷がついている。

土師器坏は図示した5個体の他に底部が28個体分出土している。ほとんど底径が口径の1/2である。器形は13・14の様に体部が立つものと15・16の様に器厚が浅く開き気味のものがある。17は製作方法などから、体部が立つ部類に入ると思われる。16は褐鉄鉱や長石を多く含む土器で、1・4号住居址でも同様な土師器の検出がみられる。高台付坏は図示できる資料はなかったが、高台や底部は16個体分確認できた。

黒色土器坏は図示できる資料はなかったが、坏らしい破片が少量出土しており、数個体存在していたものと思われる。高台付坏は2個体出土している。ともによく似た暗紋が施され、同様の暗紋は1・4号住居址からも出土している。18は器形が1号住居址の14によく似ている。また、この2個体の他に破片が見られないため、3号住居址も大小で一対であったのではないかと思われる。

煮沸具は土師器の甕が2個体出土している。9は南側壁際で緑釉陶器片とともに出土した。出土した時は横倒しになり潰れ、底部は抜かれていていた。胎土は荒く、雑に内外面とも箆削りが施されている。口縁部は緩く外反しナデ成形されている。10は口縁部と胴部が出土したが、接合できず口縁部のみ図示した。口縁部がかなり厚く内面は外傾している。刷毛目成形されており、外面は縦方向に、内面は横方向に刷毛目が付いている。いわゆる「甲斐型」の甕ではないかと考えられる。

4号住居址（第26図）

供膳具のみが出土しており、煮沸具、貯蔵具の出土はなかった。出土したのは灰釉陶器片、土師器坏、高台付坏、黒色土器高台付坏である。

灰釉陶器は破片が4点出土しているのみで、図示には至らなかった。

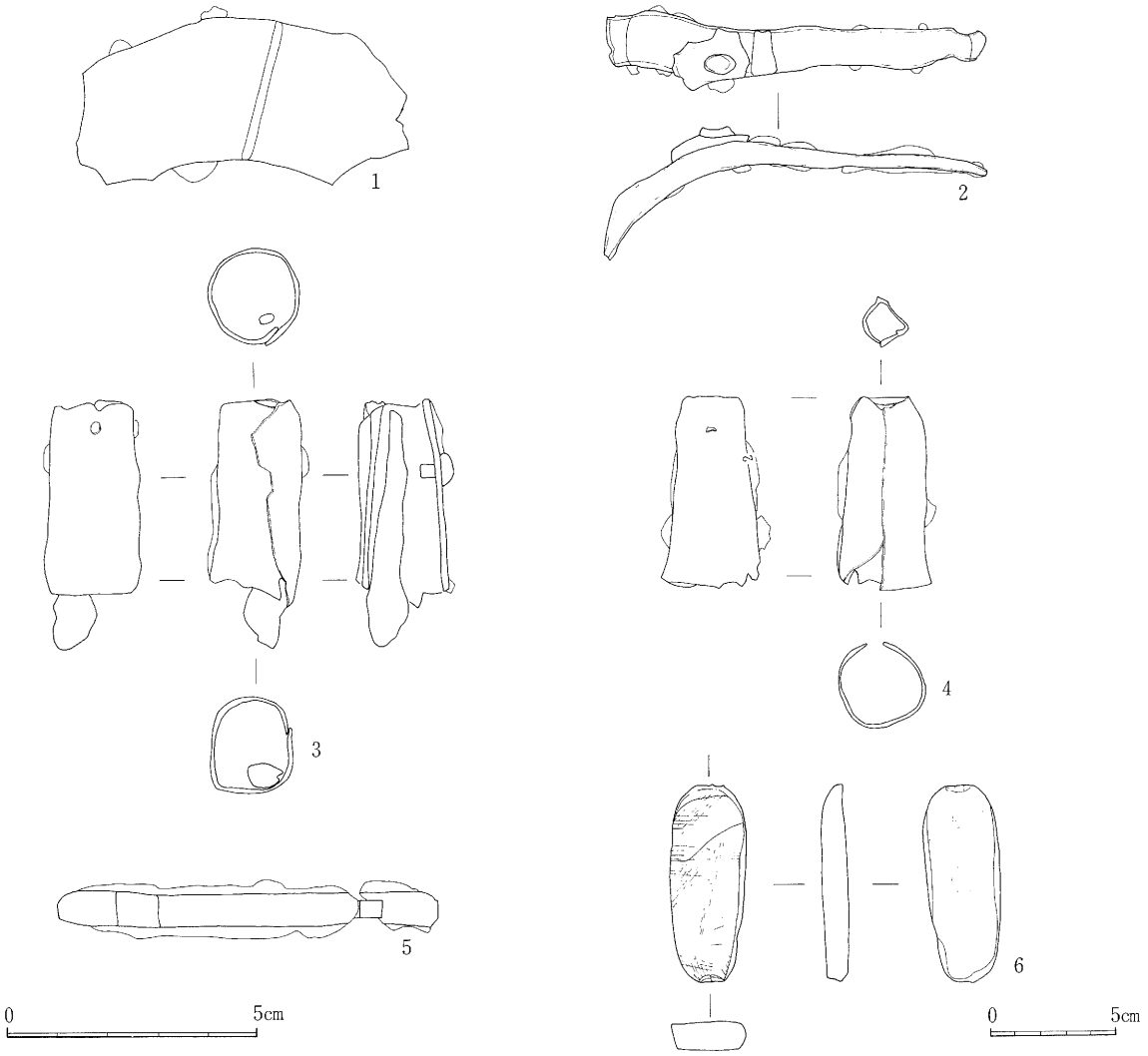
土師器坏は図示した資料の他に底部が3点確認されている。ほとんどは底径が広く図示した資料はすべて底径が口径の約1/2である。1と2は腰部がやや括れ、胴部が内彎し、口縁部で直立する器形が酷似しており、法量から大小1セットになっていたものと思われる。土師器高台付坏は図示したものの他に底部が1点出土している。8は小型で胎土に不純物をほとんど含まず、丁寧に製作されている。

黒色土器高台付坏は図示したものの他に殆ど破片が検出されていない事から、図示した2個体以外は保有していなかったのではないかと考えられる。9、10ともに内底部に暗紋が施文されており、1、3号住居址のものと同じ模様である。4号住居址でも大小一対を成している。ただ他の住居址と異なる点は9が両面黒色処理されている点である。

2．その他の出土遺物（第28図、図版８－３～８）

前項の土器のほかに、鉄製品と砥石が検出されている。鉄製品が出土したのは３号住居址と４号住居址である。鉄製品の他には１号住居址から砥石が出土した。３号住居址で出土した鉄製品は鎌１点、馬具２点、鉄鐸２点である。３号住居址出土の馬具、鉄鐸、４号住居址出土の鉄製品の詳細については付編に譲り、ここでは簡単に概略を述べておきたい。１の鎌は覆土のかなり上部で検出された。鉄を折り返して作成されたものと考えられる。馬具については今回図示できなかった資料は「U」字型をしている。２は「J」字型で湾曲している部分に鋲状のものが打たれている。３・４は鉄鐸であり、２つともかなり小型である。ともに製法は同じで、薄い金属板を円筒状に巻き、上部がやや窄まり下部が開く形態をしている。４は中に「舌」が入った状態で出土した。４には胴部に鋲らしきものが付いてるのが確認できた。また、３・４とも合せ目の反対側に小さい孔が開いている。５は周囲の錆を落としていたときに錆の中から木質の部分が見え、この鉄製品が四角い棒の回りに金属を巻き付たものであることが判明したが、その用途は不明である。

６は１号住居址から出土した砥石である。粘板岩で黒色で表面のきめはとても細かい。（柳川）



第28図　鉄製品（2/3），砥石（1/3）

第Ⅳ章　調査の成果と課題

第１節　縄文時代後期前半の集落構成についての予察

稗田頭A遺跡の遺構遺物のうち、平成４年に調査された部分については内容が未だはっきりしていないため、今回検出された縄文時代の集落についてはその構成の特徴等を若干まとめ、後日稗田頭A遺跡が総体として報告される際の手がかりとしておきたい。今回の調査範囲に限ってみれば分布から住居址は大きく２群に分れている。それぞれの住居址群を記述の便宜上北東群と東群と仮称しておきたい。

１．住居址の構造

今次調査において中期最終末から後期前半の住居址が６基検出された。住居址は柱穴構成により大きく２つに分れ、敷石の有無、規模によりさらに分類できる。本遺跡の住居址は基本的に７本主柱穴の構成をとる。第８号住居址が例外的な存在であり、多数の壁柱穴が巡る。

７本主柱穴による遺構は鴨田遺跡、稗田頭A遺跡において検出され、炉址を伴うとみられる事例が多いことから、住居址として認定できるものであると思われる。今回の調査で炉址と敷石を伴う７本柱穴配置の遺構が検出され、７本主柱穴配置の住居址の中に敷石が施される住居址が存在したことが明らかになった。

住居址平面形状は柄鏡形住居址と円形住居址に分れるが、柱穴配置による推定により第５号、第６号住居址などは柄鏡形住居址である可能性が認められ、７本主柱穴配置の住居址にも張り出し部が存在する可能性が認められる。張り出し部の有無については今後検討を重ねる余地がある。

炉の構造は第10号住居址と第11号住居址において不明であるが、土器埋設炉と石囲炉の２者がみられた。

張り出し部が確認されなかった住居址があることから、主体部の長さと幅から住居址規模を比較すると大小の２類型がみられ、第５号住居址、第６号住居址、第10号住居址が大型の住居址である。小形の住居址はばらつきをみせる。特に規模の小ささで際立つ存在は、第８号住居址である。

現在までに茅野市内で検出された縄文時代中期最終末から後期の住居址の規模と柱穴配置をみると立石遺跡例は柱穴配置は第８号住居址に類似するが、規模は第９号住居址などより大きく、柱穴数に連動してか柱穴数も多い。遺跡内でのあり方は少なくとも大小の２類型が認められる点では、稗田頭A遺跡と同様である。

新井下遺跡では所属時期は不明ながら、縄文時代中期終末から後期の住居址に類似する円形柱穴列とされた遺構が検出されている。そのうち第２号円形柱穴列とされた遺構は、９本柱穴配置をとり７本主柱穴配置の住居址とよく似ているが、柱穴数が多く、規模は本遺跡例に比べ遙かに大きく炉址が検出されていない。他の円形柱穴列とされた遺構は第１号、第３号円形柱穴列とされた遺構が立石遺跡住居址に類似するが、やはり規模が大きく、特に第３号円形柱穴列は炉址が検出されないことと相俟って住居址と同列に扱うことは躊躇される（百瀬　1994）。

勝山遺跡第44号住居址は縄文時代後期の柄鏡形敷石住居址であるが、張り出し部のみに敷石がなされている点、主体部平面形状がほぼ方形を取る点で本遺跡事例とは大きく異なる。規模は本遺跡よりも若干大型で立石遺跡住居址とよく似ている。明科町北村遺跡の事例や、横浜市山田大塚遺跡の事例を参考に考えると、堀之内Ⅱ式併行期から後期中葉にみられる住居構造であると考えられる（小林　1994）。

７本主柱穴配置の住居址は時期が明らかなものの場合堀之内Ⅰ式併行期の住居址であり、立石遺跡例は曽

利Ⅴ式期から堀之内Ⅰ式併行期でも古い段階とされており、時間差として捉えられる傾向性をみてとることができる。今後、勝山遺跡第44号住居址例も考え合わせると縄文時代後期の住居構造の変遷のなかで稗田頭A遺跡にみられる7本主柱穴の住居址の系統性が問題となるものと考えられる。

2．住居址群の構成

柱穴配置や規模のほか住居址の構造において注目されるのが、主柱穴を取巻く施設である。第6号住居址の周堤礫と第10号住居址周辺から検出された土坑がある。周堤礫の検出状況については前述したが、周堤礫が礫を配列したものなのか、土盛りあるいは削り出しなどの作業を伴ったものか否かについては明らかにできなかった。明科町北村遺跡の分析例においては壁体あるいは垂木を補強したものとされているが（平林1993)、第6号住居址の調査においてはこの見方を補強する事例は見出せなかった。第10号住居址を巡る土坑については住居址の一部であることとする根拠の曖昧さがあるが、2つの住居址群に1基づつこうした住居址が含まれることは注目してよい現象であると思われる。

住居址群の構成において注目すべき存在は第8号住居址である。稗田頭A遺跡においては、規模が最も小さく、住居址の構造も異なり、立地点もややはずれる傾向にある。規模の小ささは第8号住居址に限った現象ではなく、堀之内Ⅰ式併行期の阿弥陀堂遺跡第Ⅴ次調査第6号住居址、堀之内Ⅱ式併行期の上ノ段遺跡第6号住居址など同様な構造をもつ住居址は一様に規模が小さい。稗田頭A遺跡においては他の住居址との同時性においてやや不安があるもの、少なくとも堀之内Ⅰ式併行期においては同一集落において7本主柱穴の住居址と小型の柄鏡形住居址の2類型の住居址が存在する可能性があるものと思われる。

住居址の構造のみからみると東群の第8号住居址の存在が特異であると感じられるが、住居址群は3基の住居址からなり、時期差をもつ住居により構成されている。北東群における住居址の時期は、遺構、遺物の報告で明らかなように第5号住居址から堀之内Ⅰ式併行期の住居である北東群の第6号住居址、堀之内Ⅱ式併行期の第9号住居址へと変遷するものと思われる。東群の第10号、第11号住居址の時期が不明であるため時期変遷の比較はできないが、稗田頭A遺跡の後期前半の住居址群北東群をモデルとして考えれば、ほぼ均等な規模と変遷過程をもつ住居址群からなるものと推測できる。

3．縄文時代後期前半の集落構成について

今次調査では後期前半の集落の東側の一部を調査している。集落構成の全体像は第Ⅰ次調査の整理、報告作業を経なければ論及できない。本報告では遺構の分布から幾つかの問題点を指摘するに留めておきたい。

後期前半の集落は住居址群の内側に第Ⅳ群土坑が散在する地帯をはさみ、第1号方形柱穴列や土坑がやや集中する地帯がほぼ帯状の広がりをみせる。2つの住居址群に囲まれた集落内部には貯蔵穴とみられる第Ⅲ群土坑と柱穴状の形状をもつ第Ⅳ群土坑が散在する。貯蔵穴の分布のあり方は住居址群に属すものと集落内部に分布する2群に分れ、住居址群に属する貯蔵穴と推定される土坑のうち袋状土坑（第Ⅲ群a類)、断面形状がタライ状で深い土坑（第Ⅲ群b類1種）はほぼ同数がみられる。集落内部に分布する貯蔵穴（第Ⅲ群）は第1号焼土址南西の谷際に集中する。同じ分布傾向は方形柱穴列にもみられる。第1号、第2号方形柱穴列が集落内部に分布し、第3号、第4号、第5号方形柱穴列は住居址群の近くに構築されている。

第Ⅳ群土坑分布域では土坑の分布がみられない範囲が数箇所みられる。柱穴状の土坑（第Ⅳ群土坑）の分布の仕方を、ある範囲を避けて構築されたとみるか、立てられる範囲が限定されていたとみるかは難しいが、本報告では遺構未検出域の存在を重視しておきたい。遺構未検出域は複数みられ、住居群との対応関係も予

想されるためである。２つの住居址群の間の空白帯に位置する第74号土坑の存在と第74号土坑覆土の焼土の存在から遺構が検出されなかった空白域でもなんらかの活動は行われていたものと思われる。

遺構の分布からみると住居北東群と東群の間と第８号住居址の西に遺構の空白域がみられる。この空白域の西に、集落内部に比べより狭い範囲に集中してつくられた第Ⅳ群土坑が集中する。

稗田頭A遺跡の集落は出土土器と遺構の関係から、比較的短期間に営まれた遺構の集積からなると考えられる。集落内部の方形柱穴列、貯蔵穴、焼土址からなる場と柱穴状の小規模な土坑により分割された場、住居址と住居址群に付属する方形柱穴列、貯蔵穴により構成される空間に分割されていた可能性がある。住居址群が広がる場が住居で代表される集団により占有されていた考えた時に、北東と南東の遺構空白域が複数の住居址群で共有していた出入口である可能性が認められる。この空白域が集落の出入口と考えれば、出入口に接する位置に設けられた柱穴の土坑と、集落内部で住居址群に接するように分布する柱穴状の土坑は集落内における位置からみてその機能は異なっていたと考えられる。今回の調査では墓坑と考えられる土坑は、住居址群の中から検出されているが、少数であるため住居址群に属す遺構であるかは判断できない。

時期決定が困難である遺構が大部分を占める本遺跡例の場合、住居址群と集落内部の遺構群の関係については不明な部分が多いが、住居と貯蔵穴の結びつきは住居単位に表される集団の自律性を、第１号方形柱穴列と貯蔵穴の結びつきは共同作業の場を表すものとも考えられ、集落内における集団関係、労働時の集団編制のあり方に関わる遺構の組合せであると考えられる。今後は第Ⅰ次調査範囲も含め、称名寺式併行期の遺構の有無、住居址群の構成、方形柱穴列の構成と用途および墓坑の分布、柱穴状の土坑の分布とその用途について考えていく必要があると思われる。今回予測した集落構成も第Ⅰ次調査の成果とあわせ再度検討しなければならない問題を多々含んでいる。　（功刀）

第29図　稗田頭Ａ遺跡第Ⅱ次調査Ｃ地区概念図（1/500）

第２節　平安時代後期の散居型集落の性格について

今回の調査では平安時代の住居址が５軒出土した。近隣の遺跡として、平成３年度調査の鴨田遺跡や平成５年度調査の稗田頭Ｃ遺跡でも平安時代の住居址の検出があり、稗田頭Ａ遺跡との関連が考えられるため本稿ではこれらの遺跡群の性格について考察したい。

遺構の構成　稗田頭Ａ遺跡（以下、稗田頭Ａ）は他の遺跡と比較すると遺構が密集していることになるが、近接しているわけではなく、一つの尾根状台地上に散在している。この内、２号住居址は住居址の重複がみられ、3、4住はカマドの造替えが確認されている。鴨田遺跡は（以下、鴨田）稗田頭Ａから約300m離れた北側の別の尾根状台地に位置する。住居址は１軒のみが検出され、尾根のかなり南側に寄っている。この14号住居址は一度建て替えられ、旧住居址のカマドは北側のセンターカマドで、新住居址は北東のコーナーカマドである。住居址のプランは方形を呈する。稗田頭Ｃ遺跡（以下、稗田頭Ｃ）は稗田頭Ａから約200m離れた尾根状台地の南端で住居址を１軒検出した。カマドはやや南側に寄ったカマドで、１住や４住のカマドによく似ている。

遺物の構成　各住居址の遺物の構成は第30図に示した。土師器については器形と胎土の様子から４類に分類した。

Ｉ類　体部が内彎し立つもの。

II類　ａ　器高が浅く、体部が外傾するもの。

　　ｂ　ａの特徴を持ち、胎土が赤褐色のもの。１住５、３住16、鴨田がこれに当たる。

III類　胎土が粉末状で褐色鉱、長石を多く含むもの。

IV類　高台が厚く切られているもの。胎土がIIｂと同じため、IIｂの延長線上の土器と考えられる。

構成を見ると、供膳具は灰釉陶器碗、土師器坏、黒色土器高台付坏は共通して所有している。土師器坏IIｂと坏IIIはどの住居址でもある一定の割合を持って検出されている。坏IIｂの破片は全体の約１割から２割を占めている。坏IIIは図示できなかったが鴨田14住にも存在している。ばらつきが見られるのは１住の黒色土器坏と、３住の緑釉陶器碗、４住の両面黒色処理を施されている黒色土器高台付坏、鴨田14住の黒色土器坏である。稗田頭Ａにはあるが他の遺跡にはないのが坏Ｉである。鴨田遺跡では土師器高台付坏の存在が確認できなかった。各器種の出土量をみると、３住は圧倒的に灰釉陶器が多く、緑釉陶器と併せて施釉陶器の保有率が高いといえる。煮沸具は４住を除く住居址で確認されている。３住と鴨田14住は「甲斐型」甕と考えられ、１号住居址は「甲斐型」の小型の甕の破片が出土している。羽釜を保有していたのは１住であった。小型甕は煮沸具を有しない４住以外はすべて検出された。

時期について　住居址のカマドの位置から見てみると、１住、４住新カマド、稗田頭Ｃ１住は中央よりやや南に寄った位置にある。４住旧カマドは２ａ住と同じ北側にあり、３住新カマドと鴨田14住新住居址も同様である。３住と４住のカマドの新・旧関係から３住旧・鴨田14住旧―２ａ住・３住新・４住旧・鴨田14住新―１住・４住新・稗田頭Ｃ１住というように３時期に分けられる。しかし、後述するように遺物からみると土器の構成は各住居址ともそれ程変わるところがないため、住居址の出現時期が異なるだけで全て同時期に存在していたと言えよう。

遺物についてみると、これまでの研究により絶対年代が与えられている土器があるのでここで触れておきたい。３号住居址から出土した緑釉陶器については、高橋照彦氏の近江産の緑釉陶器の編年（高橋　1994）がある。これによればII期の古段階であり、高橋氏は10世紀後半としている。３住で出土した甲斐型甕につ

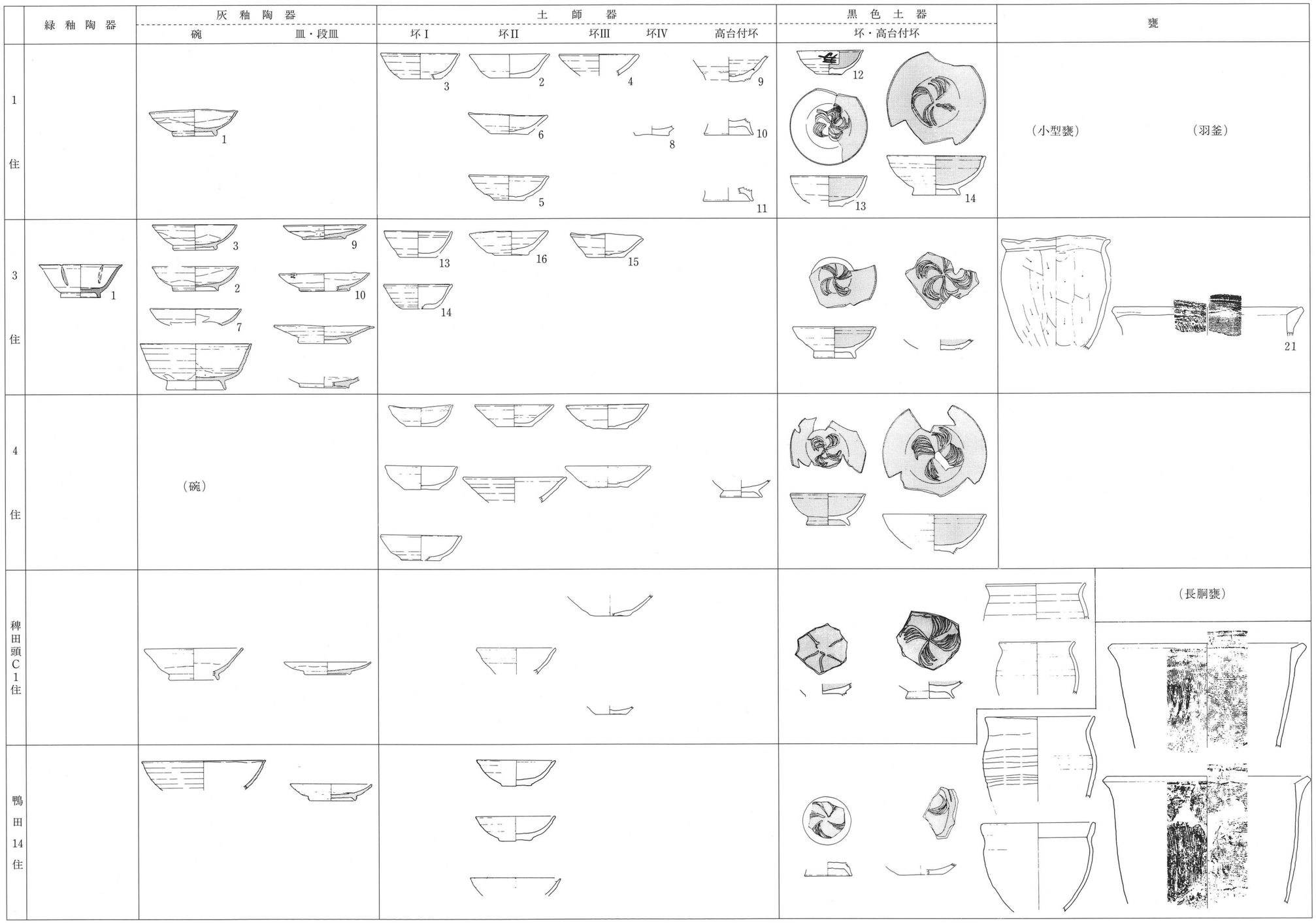
いては山梨県北巨摩郡武川村の『宮間田遺跡』に詳述されており（平野　1988)、甲斐型甕と灰釉陶器から宮間田Ⅳ期に当たると考えられる。平野氏はこれを10世紀第四半期としている。この発掘の後に、山梨県では甲斐型土器の編年が組まれており、この中で甕は13段階に細分され、本遺跡出土のものはXⅢ期にあたると考えられ、960年以降が与えられている（保坂　1992)。また、同様の甲斐型甕が１点ながら見られる塩尻市の吉田川西遺跡では（伊藤　1989）SB52段階とし、やはり10世紀後半にあたる。甲斐型甕には羽釜を伴うケースがみられ、本遺跡の１号住居址でも小型の甲斐型甕がみられるところから、時間差はほとんどなかったことが考えられよう。４号住居址の両面を黒色処理をした高台付坏については吉田川西遺跡でSB32段階からその存在は認められ、松本市では12期にみられる（小平　1990)。吉田川西のSB32段階は松本の13期にあたり、12期は11世紀前葉、13期は11世紀の中葉にあたる。吉田川西遺跡や松本平の諸遺跡では黒色土器坏と両面黒色処理の高台付坏が同一時期に出土するケースはなく、管見では諏訪郡にもこの様な土器構成を持つ遺跡を確認していない。しかし、各住居址の土器をみると、同じ種類の暗紋を持つ土器が出土しており、各住居址の存在した時期があまり異なるとは考えにくい。また、黒色土器高台付坏の構成が大小一対と考えると、全て同時期に作成、または、購入されたものであると言えよう。

鉄鐸について　３住で出土した形態のものは茅野市御狩野遺跡で出土した鉄鐸に酷似している。御狩野遺跡のものは「舌」の片方が折れ曲がっている。本遺跡の鉄鐸の「舌」にもかつては折れ曲がった部分があったのではないかと考えられる。現在、諏訪大社上社や茅野市守矢家に残る鉄鐸は、筒の窄まった所に近い部分に閂のように鉄棒を通し、両端を潰して固定し、この鉄棒に「環」を通して「舌」を吊している。４はこの形態によく似ていると言える。

まとめ　以上みてきたように遺物からみるとほとんど同時期といえるものばかりで、住居址から見ると継続的な集落であったことが判った。この集落の中心地は、ある程度住居址が密集する稗田頭Ａである事は明白である。その稗田頭Ａの中でも、鉄鐸や馬具が存在し、群を抜いて施釉陶器の保有率の高い３号住居址が核となる住居址である事がいえる。また、遺跡を越えて全ての住居址で同じ暗紋の黒色土器を保有しているところから同じ集団で構成されていたことが考えられる。

稗田頭Ａのような集団が八ヶ岳山麓部に進出した要因については『茅野市史　上巻』で臼田武正氏が農工具から山麓の人々の生活を「鉄製農具が普及したとはいえ、集落の立地する高燥な台地やこれによってはさまれた谷地においては、水田による稲作には、品種改良・治水・灌漑などの農業技術が伴わず、当然限界があったはずである。そこには、高度な技術を必要としない畑作による雑穀栽培を目的とした、在地領主の積極的な農地開発による私有地拡大政策があったものと考えられる。」とのべている。また、山麓部においては鉄鏃の出土が多く見られるところから狩猟を、山寺や権現林遺跡のような墨書を多く出土する遺跡に官営の山鹿の牧の経営を担った中核的なムラの可能性を述べ、「八ケ岳山麓における集落においては、その立地と環境に十分適応した農業生産と各種手工業生産の活動が展開された。」としている（臼田　1986)。稗田頭Ａは臼田氏の畑作による「雑穀栽培を目的とした」集落の一つと考えられる。このような雑穀栽培の根拠になる資料として３住から検出した鉄製の鎌とこれに対応するような１住の砥石が挙げられる。

この当時の社会的な様相を文献史料より見ると、10世紀後半から11世紀前半の信濃に関するものは圧倒的に馬に関する記述が多い。寛弘５（1008）年成立の『政治要略』所収の「外記日記」（信史②375～377）には馬を朝廷に貢納する「信乃諸牧」の中に「山鹿」が見える。この史料により、ほかの大室、新治、宮所、長倉、猪鹿とともに馬60疋を貢納していたことが判る。また、信濃においてはこれも『政治要略』の長保４（1002）年８月22日の文書に信濃の左衛門権佐令宗朝臣允亮の私牧の牝馬が官牧に「遊牝」して出産したが、



第30図　平安時代土器対照表（1/6）

この子馬は私牧に属するのか、官牧に属するのかということが見えるため、信濃国ではこのような私牧が存在し、当時の法制書にも採録されているところから、それ程珍しい例でなかったことが考えられる。

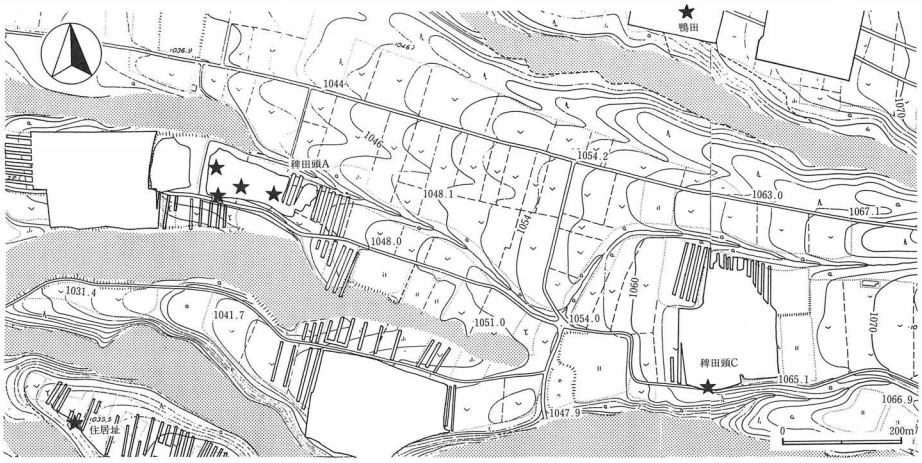
馬とは異なった生業を考えた場合、文献からは「信濃布」というものが散見される。天禄元（970）年9月8日の宣旨（信史②446）では、毎年正月に春季御読経料として信濃国は「調布六百七十四端（反）3丈」を朝廷へ進納することが義務付けられており、その他に「調布千端」の進納も行われていた（信史②447～448）。時代はやや下って長保3（1001）年正月29日の『権記』には、故中宮定子の法会に際して「信濃布百端」が諷誦料に充てられており（信史②473～474）、この事については藤原道長の日記である『御堂関白記』寛弘4（1007）年8月2日条にも「信布30端」と見える。「信濃布」は「調布」とあるため、麻の可能性が考えられるので、麻が朝廷に進上されていたと思われる。

麻に関しては稗田頭Aとあまり変わらない時期と考えられる棚畑遺跡（44）1号住居址より麻皮剝器と紡錘車が出土しており、麻生産を行っていたことが考えられる。馬に関していえば稗田頭Aからは馬具が検出しているがその量は僅かであり、馬の貢納は八ヶ岳山麓の遺跡が見られなくなった後でも行われているので、牧の関係だけで進出したとは考えにくい面がある。やはり、棚畑遺跡と合わせて考え、当時需要が増えた「信濃布」の増産のためにこれを主な産業とし、馬は交通・輸送の手段として使用されたと思う。鉄鐸は前述の通り諏訪神社や元諏訪神社の神長官であった守矢家に伝わっており、また、辰野町の小野神社や弥彦神社にも伝承されている。大場磐雄氏（大場　1943・1972）や桐原健氏（桐原　1972）のこれまでの研究により、「祭器」として使用されたものであることが考えられるので、鉄鐸は宗教的権力者から下賜された可能性が強く、山麓への進出の動機がある一集団だけにとどまらないことを示していると言えよう。

また、これらの遺跡が消滅した要因は判っていない。遺跡を構成していた人々が、『稗田頭C遺跡』では稗田グループの母村が中世の『祝詞段』（諏叢⑧210）に見られる「古田」である事を述べたが、このような中世へ続く集落に吸収されたのではないかと考えられる。

今後の課題　近年の発掘の成果によって、平安時代の八ヶ岳山麓における様相も明らかになりつつある。山麓部には他に同様の遺跡が多く存在し、尾根状台地に一軒だけ検出される住居址でも、周辺の尾根状台地に同様の時期の遺構が検出される事が多い。また、鉄鐸の存在により諏訪神社との関連が考えられ、守屋山麓にも大規模な集落址が展開しているため、今後これらの遺跡との時間的、空間的な関連性の中で稗田頭A遺跡も考えていかなければならない。

（柳川）



第31図　平安時代住居址分布図（1/5,000）

第Ⅴ章　結語

今回の調査では縄文時代中期の住居址が１軒、後期の住居址が６軒、早期と考えられる落し穴が３基、土坑が77基、平安時代の住居址が５軒検出され、一次調査と合わせて考えると大規模な集落址であることが判明した。縄文時代の後期の住居址はほとんどが敷石住居址で、そのうちの１軒はあまり撹乱を受けずに状況は良好であった。平安時代の住居址からは茅野市で４例目の緑釉陶器碗や２例目の鉄鐸が出土し、貴重な資料を得ることができた。

縄文時代の遺構を見ると、まず早期と考えられる落し穴があり、これは周辺の遺跡である上見、中原、稗田頭Ｂでも存在し、同じ槻木地区内の梵天原遺跡にも存在することが試掘調査により確認されている。稗田頭Ａでは第一次調査でも確認されており、早期の段階で大規模な狩猟の場の一つとして稗田頭Ａ遺跡が存在していたと言える。

１次調査を含めた稗田頭Ａ遺跡全体としては前期末から後期前半までの遺構が検出している。この間、中期中葉と後期後半の曽利Ⅰ式期、称名寺期の遺構が見られず、稗田頭Ａ遺跡は断続して営まれた集落址であることが言える。しかし、前期末から早期の落し穴と同様に、周辺の遺跡に遺構が確認されている。これまでの調査の成果で、中期初頭でも稗田頭Ａ、Ｂ、Ｃ、上見、中原遺跡では４段階に区分でき、これらの遺跡は相互に補完しながら存在していたことが指摘されている。稗田頭Ａ自身は断続的な集落であり、中期中葉からは周辺の金堀場、鴨田と相互に関連を持ちながら展開していたことが考えられる。しかし、現段階では一次調査と鴨田遺跡の整理がまだ行われていない部分が多いので、今後の遺物の再整理などを行い、再考を行っていく必要がある。

平安時代は鴨田遺跡と稗田頭Ｃ遺跡の１軒だけ検出した住居址と密接な関係があり、同一暗紋の黒色土器の存在により同一集団であることが判明し、稗田頭Ａ遺跡の３号住居址が緑釉陶器や鉄鐸の出土により、この同一集団の中心的な存在であることを述べた。鉄鐸は諏訪神社の信仰に関わりのある遺物と言われ、稗田頭Ａ遺跡などの住居址は、諏訪神社と関わり合いを持ちながら、八ヶ岳山麓に進出したことが推察される。その動機も棚畑遺跡出土の麻皮剝器と関連させて麻栽培の可能性をのべた。しかし、当時一般的になっていた私牧の存在も無視する事はできず、牧の可能性もあり得る。私牧を想定するならば、麻栽培に比べて、より在地権力との関係を、考古学資料と文献史料の両面において探っていかなければならない。今後、広域にわたった関連を考慮し、在地の土器である土師器によるよりこまやかな時間軸を設定した上で、再考して見る必要があろう。

（柳川・功刀）

引用参考文献

大場磐雄　1943　「信濃國の銅鐸と鐵鐸」『信濃』昭和19年６月号

　　1972　「続鉄鐸考」『信濃』第24巻第４号

臼田武正　1986　「第２章　第２節　考古学から見た古代の茅野」『茅野市史　上巻』

平野　修　1988　「第Ⅴ章　成果と課題」『宮間田遺跡発掘調査報告書』　武川村教育委員会

原　明芳　1989　「第７章　第２節　吉田川西遺跡における食器の変容」　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書３―塩尻市内その２―　吉田川西遺跡』　長野県教育委員会

石井　寛　1990　『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅹ　山田大塚遺跡』横浜市埋蔵文化財センター

小平和夫　1990　「第３章　第５節　古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４―松本市内その１―総論編』長野県教育委員会

宮坂光昭、鵜飼幸雄、守矢昌文、小林深志ほか　1990　『棚畑』茅野市教育委員会

桐原　健　1991　「掘り出された鉄の鐸」平出遺跡考古博物館ノート４『鉄鐸の謎を探る』塩尻市立博物館

保坂康夫　1992　「甲斐型土器各器種の状況　甕」『甲斐型土器研究グループ第１回研究集会資料　甲斐型土器―その編年と年代―』　山梨県考古学協会

平林　彰　1993　「第９章第３節北村縄文人の精神的側面」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11　―明科町内―　北村遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター

百瀬一郎ほか　1993　『鴨田遺跡』　茅野市教育委員会

高橋　照彦　1994　「近江産緑釉陶器をめぐる諸問題」『国立歴史民俗博物館研究報告』第57集　国立歴史民俗博物館

小池　岳史　1994　『立石遺跡』　茅野市教育委員会

小林　深志　『勝山遺跡』　茅野市教育委員会

百瀬　一郎　1994　『新井下遺跡』　茅野市教育委員会

守矢昌文、柳川英司　1994　『稗田頭Ｃ遺跡』　茅野市教育委員会

『諏訪史料叢書』巻８　諏訪教育会　　＊史料の引用については、文中で（　）を付し、「諏叢」とし、巻数と頁数を記した。

『信濃史料』第２巻　信濃史料刊行会　　＊史料の引用については、文中で（　）を付し、「信史」とし、巻数と頁数を記した。

付　　編

稗田頭Ａ遺跡住居址出土の植物遺体とその年代

パリノ・サーヴェイ株式会社

１．目的

稗田頭Ａ遺跡は、八ケ岳山麓の裾野にあたる緩斜面上に立地する。本遺跡は、縄文時代の遺構・遺物が中心であるが、周辺には尖石遺跡をはじめ、旧石器時代～縄文時代にかけての遺跡が多く分布する。

６号住居址は、出土遺物等から縄文時代後期前半のものと考えられている敷石住居址であるが、その中から住居構築材の一部と考えられる炭化材が検出された。また第９号住居址の炉内からは炭化した種実遺体も検出されている。これらの遺物は、当時の植物利用状況を考える上で有効な資料であることから、その種類を同定し検討を行なう。また、炭化材を試料として^{14}Ｃ年代測定を行った。

２．試料

試料は、６号住居址から検出された炭化材４点（試料番号１～試料番号４）と、第９号住居址から検出された炭化種子１点である。そのうち、試料番号１と３の２点については^{14}Ｃ年代測定も行った。

３．方法

(1)　炭化材および種実

炭化材については、同定試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の割断面を作成し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

種実については、実体顕微鏡下で観察し、その形態的特徴から種類を同定する。

(2)　^{14}Ｃ年代測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。なお、^{14}Ｃの半減期として、LIBBYの半減期5570年を使用した。

４．結果

(1)　炭化材および種実

炭化材は試料番号１～３の３点がクリに、試料番号４がトネリコ属にそれぞれ同定された。また、炭化種実遺体はコナラ属に同定された。各種類の主な解剖学的特徴などを以下に記す。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は１～４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。

・トネリコ属（*Fraxinus* sp.）モクセイ科

環孔材で孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または２個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し壁孔は小型で密に交互状に配列する。放射組織は同性（～異性Ⅲ型）、１～３細胞幅、１～20細胞高。

・コナラ属（*Quercus* sp.）ブナ科

炭化した子葉が検出された。楕円形で大きさは1cm程度。表面には、維管束の跡が筋状に残る。

(2) ^{14}C年代測定

結果を表1に示す。

表1　^{14}C年代測定結果

試料番号	試料の質	Code No.	年代（1950年よりの年数）
1	炭化材	Gak-18468	3910±100y.B.P.　1960 B.C.
3	炭化材	Gak-18469	4100±110y.B.P.　2150 B.C.

5．考察

今回、6号住居址より出土した住居構築材とみられる炭化材で得られた年代値は、縄文時代中期末～後期初頭に相当し（日本第四紀学会，1992)、出土遺物と調和的である。この時期は、本住居址のような敷石住居址が関東・甲信地方で盛行する時期でもある。今回、敷石住居址の構築材の実態が明らかになった意義は大きい。

6号住居址の住居構築材と考えられる炭化材には、クリとトネリコ属が認められた。このうちクリは、強度、耐朽性が高く、構築材として適した木材である。遺跡からの報告例も多く、特に関東地方では縄文時代の住居構築材に多く認められる（千野，1983,1990；高橋・植木，1994)。本地域では、当該期の木材利用に関する調査例はほとんど知られていないが、県内の明科町北村遺跡や小諸市郷土遺跡では、縄文時代の住居構築材にクリが多く認められている。(鈴木・能城，1993；パリノ・サーヴェイ株式会社，1993)。今回の調査結果は上記調査事例と調和的であり、本地域においても縄文時代にクリが多用されていた可能性がある。

種実遺体は、コナラ属に同定された。コナラ属は、収量も多く貯蔵も利くので古くから食用として利用される。コナラ属の利用方法については、渡辺（1986）に詳しく記載されているが、食用に際しては「灰汁抜き」が必要になる。「灰汁抜き」の技法については、各地の遺跡での出土状況から、縄文時代中期に一般化されたと考えられている（渡辺，1986)。本来子葉は土壌生物などによって容易に分解されるが、今回のものは燃料材とともに炭化したため、分解されず残存したとみられる。

植物質の遺物に関しては、低湿地のような嫌気的環境下にある遺跡でない限り、多く検出されない。さらに、低湿地遺跡以外で検出される植物質の遺物は、炭化したものが多いため、炭化に強く残りやすいものが過大に評価される傾向にある。これらのことから、植物利用について検討するためには、周辺遺跡での資料を蓄積して、地域的に評価することが重要になる。本地域においては、現在資料の蓄積段階であることから、今後さらに調査例を増やしていくことが必要である。

引用参考文献

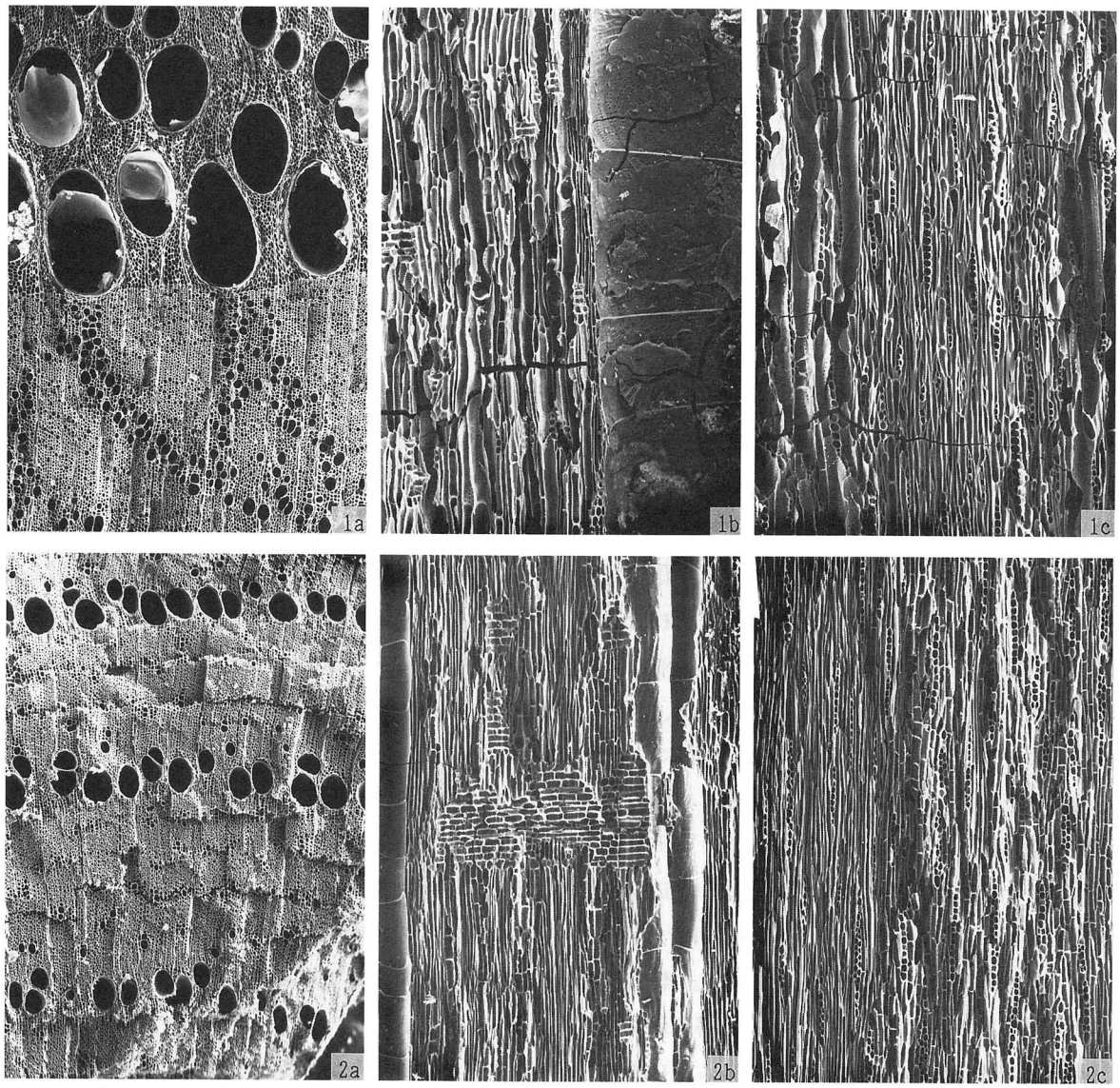
日本第四紀学会編（1992）図解・日本の人類遺跡．50p.,東京大学出版会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）郷土遺跡出土炭化材の同定．小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第16集「郷土　—長野県小諸市郷土遺跡発掘調査報告書—」，p52-57，小諸市教育委員会．

鈴木三夫・能城修一（1993）長野県北村遺跡出土炭化材の樹種．㈶長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14「中央道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11　—明科町内—　北村遺跡　本文編」，p.167-168，日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・㈶長野県埋蔵文化財センター．

渡辺　誠（1984）縄文時代の植物食．p.247.,雄山閣．

図版Ⅰ　炭化材・種実



1．クリ（No.2）a：木口，b：柾目，C：板目
2．トネリコ属（No.4）a：木口，b：柾目，C：板目

200μm：a
200μm：b,C

コナラ属　1 cm

稗田頭A遺跡出土鉄器の金属学的解析

佐々木　稔

1．いきさつ

茅野市稗田頭A遺跡の平安時代中・後期の4軒の住居跡からは、鉄鐸、馬具（咬み）、不明鉄器3点の鉄器が出土した。これらの鉄器の材質を金属学的に解析して、使用されている鋼の材質や鉄器の製法が判れば、遺跡の性格を検討する上で重要な基礎的資料となることは間違いない。

茅野市教育委員会からの依頼で、鉄器3点の分析を新日鉄釜石文化財保存処理センターが受注し、分析は日鉄テクノリサーチにおいて実施された。

さらに、筆者の佐々木が教育委員会関係者から分析データの提示を受けて金属学的解析を行い、報告書として作成したのが本稿である。

2．調査試料および方法

送付された試料はいずれも小さな錆片で、㈶山梨文化財研究所において保存処理の過程でそれぞれの鉄器から採取されたものである。図1には鉄器の計測図と錆片採取個所を示した。

各錆片の端部を削り落として約0.1グラムの粉末試料を調製し、ICP法によって分析した。残った錆片は樹脂に埋め込み、元の鉄器の断面が現れるように研磨して、ミクロ組織を観察した。

本来、鉄器試料のミクロ組織分析にはEPMA（エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー）が必要不可欠であるが、本調査では費用の関係で利用することができなかった。その弱点を補うため、同様の試料について分析した結果を、長野県埋蔵文化財センターの許可を得て既刊の報告書から引用・転載し、比較検討することにした。

3．鉄器の組成と組織

3．1　化学組成

3点の試料の化学分析値を表1のNo．1～3に示した。

全鉄（T. Fe）はいずれも60％台に低下しているが、これは鉄が錆びる過程で酸素と水素が付け加わったためである。少量成分の銅（Cu）、燐（P）、ニッケル（Ni）、コバルト（Co）は、筆者が始発の製鉄原料鉱石の種類を推定する上で指標にしている“標識成分”である。錆試料中で前二者は0.1％以上、後二者なら0.0数％以上あれば、始発の鉱石を磁鉄鉱と判断する目安にしている[1,2]（赤鉄鉱の標識成分は存在しない）。チタン（Ti）も重要な成分であるが、製鉄の工程で炉に装入された砂鉄の中のチタン分はスラグとして分離されるため、製鉄原料の標識成分にはなり得ない。ただし鋼製造の工程で鉄素材の炭素分を低減する目的から添加・使用（脱炭材という）されたときには、鋼の中にごく少量がチタン化合物として残るので、添加材すなわち脱炭材の種類を判定する目印になる。

以上のことを念頭において、表1の分析値を検討してみよう。No．1の鉄鐸では、Coの0.044％が始発の鉄鉱石を磁鉄鉱と判定するのに、十分な含有量レベルにある。No．2の咬みはPの0.088％がやや高く、磁

＊工学博士、元新日本製鉄㈱先端技術研究所

鉄鉱の可能性があるといえる。No．3の不明鉄器（鎌？）は、Niが0.05％、Coは0.082％と、明らかに磁鉄鉱が原料鉱石である。従来の一般的な常識にもとづけば、「平安時代の鉄であれば当然砂鉄を始発の製鉄原料にしているだろう」と考えてしまいそうであるが、分析データの解析結果とは合致しない。

それでは、長野県内の古代末・中世の遺跡から出土した鉄器の分析例はどうであろうか。No．4の鉄鏃は新井下遺跡[3]の出土で、柳川英司氏によれば時代も本遺跡に近いといわれる。しかしどの標識成分も磁鉄鉱と判断できるレベルにはない。No．5～7は塩尻市吉田川西遺跡の鉄器[4]で、時期は9世紀代から12世紀前半に及ぶものである。No．5の釘のPの含有量は0.288％、No．7の刀子はCu；0.58％、P；0.246％で、両者ともに原料鉱石は磁鉄鉱である。NiとCoについて調査当時は標識成分とする考えがなく、分析されていないのが残念である。下欄には参考として筆者によるなぎ鎌の分析の例[5]を挙げた。時代は中世以降とされている。3点ともにPが多く、上述の傾向は変わらない。これが県内に止まるのか、それとも全国的な状況なのか、次章で改めて検討してみたい。

3．2　マクロ・ミクロ組織

錆片のマクロ・ミクロ組織を、写真1に示した。以下試料の番号順に説明する。

(1)　鉄鐸（写真1－1）

写真1－1aは、鉄鐸の筒の裾部分から採取した錆片のマクロ組織である。黒錆層から推定される元の鋼板の厚みは1㎜程度である。板材端部の約5㎜が筒の内側に折り込まれているのが分かる。

写真1－1bは折り曲げ部分のミクロ組織で、写真の上部およそ3分の1は赤錆、下部は黒錆である。後者には錆びる前の健全な鋼の組織が残っている。微小な黒点（実際はセメンタイトFe_3Cの脱落穴）を結んで得られる形は、ほぼ元のフェライト（α－Fe）結晶に対応する。この組織ではフェライトが大部分を占めており、元の鋼の炭素含有量は0.1％前後と評価される。フェライト結晶の大きさは30～40umで、結晶粒子の形状に加工の影響による変形が見られない。成形後に焼きなまし処理（焼鈍）が施されたために、形状が回復したのではあるまいか。

なお黒錆層には非金属介在物が見出すことができないので、かなり清浄な鋼が使用されているものと思われる。

(2)　はみ（写真1－2）

写真1－2aが断面のマクロ組織である。錆びがかなり進んで、鉄器の内部には亀裂が発生している。写真1－2bのミクロ組織は上述の鉄鐸に似ており、黒錆層に残る元の鋼の結晶組織から炭素量は0.1～0.2％と推定される。フェライトの結晶粒子の形状や大きさも鉄鐸の場合とほとんど同じである。軟らかな鋼材を鍛打・成形した製品である。

(3)　不明鉄器（写真1－3）

断面のマクロ組織を写真1－3aに示したが、明灰色の黒錆層に着目すれば、かなり正確に方形に仕上げられた鉄器であることが判る。しかし錆びが進んでいるため鉄器の表面に赤錆が生成し、大きく膨れ上がっている。鉄器内部の鉄分が環境水に溶解し、外側に移動・析出して赤錆層を形成したものであるが、その結果として内部は空洞化している。

黒錆層のミクロ組織が写真1－3bで、白色の網目状組織が元のパーライト相（微小なフェライトとセメンタイトの互層構造をとる）である。それに対して元のフェライト結晶が占める面積比は小さい。この組織から、錆びる前の鋼の炭素量は0.5～0.6％と評価することができる。利器の刃部に用いられるような硬鋼である。

この鉄器は胴部の断面が方形で、鋭利な先端部をもつ、棒状の工具ではないかと思われる。

4．鉄器の組成から推定される磁鉄鉱系の鉄素材の存在

前述のように、本遺跡ならびに距離的・時代的に近い吉田川西遺跡から出土した鋼製の鉄器の組成からは、始発の製鉄原料は砂鉄ではなく、磁鉄鉱であることが確かめられた。それでは磁鉄鉱から製造された何らかの鉄素材が、平安時代の諏訪地方においても入手可能なほど流通していたのであろうか。

鉄素材は、鉄関連遺構から半ば変化したものを含めて、“鉄塊系遺物”として検出される。その分析例を平安時代の関東・中部地方に限定して引用したのが、表2である。No.1の千葉県成東町真行寺廃寺跡出土の鉄塊[6]は、錆びが進んでいないメタル資料である。炭素分析値4.23%から銑鉄（炭素量が4%前後で鋳物にするような鉄）であることが分かる。標識成分のP、Ni、Coは、始発の製鉄原料を磁鉄鉱と判定し得る含有量レベルにある。Cuの0.048%も、メタル試料の分析値であることを考慮すれば、かなり高い値といえる。ミクロ組織は銑鉄が急冷されたときに現れるレーデブライト組織を示している。No.2の新潟県豊浦町真木山遺跡の鉄塊[7]は鋼に変えるための処理の途中にあると考えられ、炭素分析値は1.55%である。しかしこの値は分析した試料の平均組成を示していることに注意しなければならない。鉄塊の中心部分の組織はレーデブライト組織である。Cuの0.106%とCoの0.042%から、始発原料を磁鉄鉱としてよい。No.3の東京都多摩市別所遺跡の鉄塊[8]は、表面層の脱炭が進んで鋼精錬の途中の段階にあることが確かめられている。Pの分析値が0.234%で、やはり磁鉄鉱である。このほかにも全国的に多くの分析例が知られている。これらの事実によって、磁鉄鉱から製造された銑鉄の素材は広範な規模で流通していたかが分かる。

現在までに調べられた県内出土の“鉄塊系遺物”は、吉田川西遺跡の1例だけである。それを表2のNo.4に示す。この鉄塊の表面錆層のミクロ組織とEPMA分析結果については、県の埋蔵文化財センターの許可を得て写真2に引用・転載した。写真2－1のミクロ組織から推定される炭素量は0.7～0.8%となり、ほぼ共折鋼（0.86%の鋼をいう）の組成に近い。明らかに銑鉄の炭素を低減する処理（精錬という）が行われた鋼である。しかも形状が塊状なので、製品に加工される前の素材である。遺跡内で製造されたものと見てよい。Pが0.201%で、始発原料はやはち磁鉄鉱である。今後類例試料の分析データを蓄積し、地域の実態を明らかにする必要があろう。

5．鉄器中の非金属介在物の組成からみた鋼製造法

調査した資料の中で不明鉄器に介在物が見出され、珪酸塩系と推測された。しかし費用の関係からEPMAでその組成を決定するには到らなかった。この弱点を補うため、吉田川西遺跡の例を引用して検討してみたい。

表1の右欄に記したように、同遺跡出土3点の鉄器中の介在物はいずれもウスタイト＋非晶質珪酸塩である。さらに上述の鋼塊（表2のNo.4）の中の介在物もやはりウスタイト＋非晶質珪酸塩である。介在物に含有される成分元素の濃度分布をEPMAで調べたものが、写真2－2である。粒状のウスタイトを取り巻く非晶質珪酸塩は、CaO–Al_2O_3–SiO_2系であることが分かる（Tiはバックグランドと同じ位の低濃度にすぎない）。したがって鋼精錬工程で使用した脱炭材は鉱石粉であり、また石灰質の造滓材が使用されたと考えなければならない。鋼塊表面のごく近傍にあった鉄滓が分離しきれずに鋼塊中に残ったものが、加工した鋼製鉄器に見出される介在物となるからである。

一方、なぎ鎌の2例における介在物の非晶質珪酸塩もおそらくCaO–Al_2O_3–SiO_2系で、同様の精錬が行われたと思われる。小型の一つにはチタン化合物が見出されるので、この場合は砂鉄が使用されている。調査

例が諏訪地方に偏っているため県内全体に拡張することはできないが、少なくともこの地域においては鉱石粉を添加する鋼精錬法が主流であったようである。

さて鉄滓は、生産遺構に近接して検出された場合には、生産に関連して発生したものとして扱うことができる。鉄滓の中では、鍛冶工房跡から出土したいわゆる“椀型滓”（実際はお供え餅を逆に置いた形で中心がやや凹んでいる）が重要である。金属学的な解析によって鋼精錬滓と判定されれば、その工房での鋼の精錬が行われていたことを、遺物の面から実証できるからである。しかし稗田頭A遺跡では鉄滓が出土しておらず、また茅野市の平安時代の遺跡で鋼精錬の遺構が確認された例は見当たらない[9]。これについても、吉田川西遺跡の調査例をもとに検討してみよう。

表３に“椀型滓”の２試料と、炉壁材試料の化学組成を示した。No.1、2に共通しているのは、CaO/SiO_2とCaO/Al_2O_3がNo.３の炉壁材に比べて非常に高いことで、石灰質の造滓材が添加されたことが推定できる。近世以前の鋼精錬炉の内壁は粘土に須砂を混ぜて構築されるが、その炉壁材と鉄の再酸化物が反応して鉄滓が生成する。石灰質造滓材が加えられたときには、鉄滓の流動性が改善される。こうしてCaO/SiO_2、CaO/Al_2O_3は炉壁よりも高い値になる。同程度の場合は、最初の鉄滓が炉からすでに排出されたあとに生成したものか、あるいは石灰質造滓材がまったく使われなかったかの、いずれかである。一方、ミクロ組織は両者に大きな違いがあって、No.１ではウスタイトと鉱石粒子（原報の砂鉄粒子の判定は誤りで訂正の必要がある）、No.２ではチタン化合物が見出される。すなわち脱炭材として添加されたのは、前者は鉱石粉であることを示している。後者は砂鉄で、それはTiO_2の分析値によっても裏付けられる。

最近の金属学的研究の成果によれば、石灰質造滓材の使用、脱炭材としての鉄鉱石粉あるいは砂鉄の添加などに見られる鋼精錬の技術は、平安時代における日本列島の各地で共通のものになっていたようである[10,11]。この問題については今後のデータの蓄積で一層明確になるであろう。

この時代の鋼精錬の操業規模はどの程度なのであろうか。鍛冶工房の床面に火窪炉を設けて行った場合は大きいとはいえない。工房内外の土壙や近くの傾斜面に捨てられた鉄滓が、比較的少量しか検出されないからである。それに対して規模の大きい鋼精錬遺跡では、丘陵の傾斜地を削平して平坦面を造り出し、炉（場合によっては複数基の）を構築している。特に覆屋を設けたような跡は見られない。発生した鉄滓は下方の傾斜面に廃棄されているが、ときには何10トンにも及ぶ大量の鉄滓が発掘されることがある。上述の吉田川西遺跡の調査では明確な炉跡が検出されなかったので、報告書では鋼精錬に否定的な見解が述べられている。しかし出土した鉄滓の金属学的解析結果は、鋼精練が行われたことを実証している。おそらく遺跡内の鍛冶工房での設備規模が小さく、また操業の期間も短かったため、削平を受けた際に炉跡と鉄滓が残らなかったのではあるまいか。

このように本遺跡から数10kmの距離にある吉田川西遺跡では、銑鉄を素材とし、それを脱炭するのに鉄鉱石粉あるいは砂鉄を使用して、石灰質造滓材を人為的に添加した鋼精錬法が行われていたことがほぼ確実である。

それではこれらの副原料の資源は、近傍に存在したのであろうか。地質調査所発行の日本地質図[12]によれば、県内を南北に縦断する糸魚川―静岡構造線の西側で「古生代二畳紀―中生代後期の“泥岩・砂岩・チャート・石灰岩および玄武岩、ところにより上部石炭系を含む”地層（記号P-M）」があり、さらに地域一帯に中生代白亜紀前期以降の花崗岩層の存在することが示されている。一般的な見方として、石灰岩層に花崗岩質のマグマが貫入すれば接触交代型の磁鉄鉱床が生成するといわれているので、周囲に小規模な磁鉄鉱床が生成している可能性がある。

共通した地質構造をもつ富士見町の西側の入笠高原に続く尾根を調査した葉賀七三男氏（資源・素材学会調査役）は、次のように記している。[13]。「山塊は主として古生・中生代の古い岩石から成立しているが、中には石灰岩も挟まっていて……」、「穴の尾には磁鉄鉱の露頭が出ている。」、「さらに山砂鉄もあった」。この砂鉄について葉賀氏に直接伺ったところ、「花崗岩が風化してできた砂鉄ではないだろうか。」というご返事が得られた。こうして石灰石と磁鉄鉱は、双方ともに採掘して利用できる範囲にあることが判った。ただし磁鉄鉱を採掘するときに砂鉄が混入することもあり得るので、この地域の遺跡から出土する鉄滓を調査・解析する際には、磁鉄鉱に比較的少量の砂鉄が混在した原料が使用された可能性を考慮しておかなければならない。

6．鉄鐸の製作に関連して[14]

平安時代の住居跡から出土する鉄鐸は、これまでのところ長野県内に限られている。したがって鉄鐸は外部から搬入された製品ではなく、この地方で製作されたとする見方が有力である。そうした意味でも、今回の稗田頭A遺跡の資料の金属学的調査結果は重要である。

前述のように本資料には、磁鉄鉱を始発の製鉄原料とする銑鉄素材を精錬した鋼が使用されている。そして吉田川西遺跡では鋼精錬が行われたことがほぼ確実であり、その生産物というべき鋼塊が出土している。流通品の形状をとらない鋼塊の生産は、それを加工して地域の特別な需要にあった製品を製作することが目的である。農具や漁労用具にそうした例を見出すことができる。鉄鐸も同じように扱うことができるであろう。

採取した錆片の解析結果によれば、本資料に使用されているのは推定炭素量が0.1%前後で厚さ約１㎜の軟らかい鋼である。この種の軟鋼であれば、上述のような鋼塊を打ち延ばして薄い板材を作り、方形あるいは扇形に切り出して筒形に丸めることは、在地の板金加工技術で容易な作業であったはずである。鉄鐸の円筒形の裾部を内側に折り曲げ、成形後に焼鈍処理を施すなど、決して低い水準にあったとは思われない。しかし文献にあるような、鍛造工程の中での「表面の浸炭処理」については、技術的な立場からはその必要性が理解できない。確かに鋼製品の表面の近くでは、浸炭層に似た高炭素の層が見出されることがある。ところが近世以前の鋼精錬は操業の規模が小さく、操作も人手に頼るところが多くて、製造した鋼塊の内部では炭素量分布が不均一になるのが避けられない。これを鍛打・成形して製品を作った場合、炭素量分布の不均一性はそのまま製品に持ち込まれることになる。「浸炭処理と折り返し鍛練」の結果と断定することはできない。やはり通常の板金加工技術によるものと考えてよいのではあるまいか。

7．まとめ

これまでに述べた結果と考察をまとめると、次のようになる。

①稗田頭A遺跡出土の３点の鉄器から採取した錆片の金属学的解析を行った結果、鉄鐸については炭素量0.1%前後の軟鋼を加工して成形したことが判った。この地方に独特の製品なので、遺跡近傍の工房で製作されたものと思われる。馬具のはみも同様に軟鋼の素材を鍛打・成形した製品である。不明鉄器は棒状で断面が正方形に近く、炭素量0.5～0.6%の硬い鋼で作られている。先端が鋭利で折れ曲がり難い、何らかの工具ではないかと考えられる。

②３点の鉄器のうち２点は、標識成分のP、Ni、Coの含有量レベルの高さから、始発の製鉄原料が磁鉄鉱と判定された。最近の研究によれば、平安時代には磁鉄鉱から製造された銑鉄の素材が国内で広く流通し

ていた事実が明らかにされつつあり、諏訪地方においても搬入された銑鉄を処理して鋼を生産していた可能性がある。実際に、本遺跡に近い吉田川西遺跡出土の鉄塊系遺物と鉄滓は、ここで鋼精錬が行われていたことを示している。3点の鉄器はこの地方で製造された鋼を使用し、製作されたものではないかと思われる。

③鋼精錬技術上の問題としては、脱炭を目的にした鉄鉱石粉（ときには砂鉄）の添加、流動性の良い鉱滓を生成させるための石灰質造滓材の使用が推定される。これらの原料資源の賦存の可能性につき地質構造図をもとにして検討するとともに、富士見町の西側の入笠高原に続く尾根で磁鉄鉱の露頭を確認したという報告を紹介した。

引用文献

1）佐々木稔、村田朋美「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」『季刊考古学』第8号、雄山閣出版、1984．8、p27。

2）赤沼英男・佐々木稔「番塚古墳出土鉄器の金属学的解析」九州大学考古学研究室『番塚古墳』1993．3、p193。

3）茅野市教育委員会『新井下遺跡』1994．3。

4）伊藤薫「鉄滓と鉄器の金属学的調査」『吉田川西遺跡』日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・㈶長野県埋蔵文化財センター、1989．3、p.367。

5）佐々木稔「なぎがまの分析結果」信濃毎日新聞『ハイテクで信州を解く』1987．2．16。

6）千葉県成東町教育委員会『成東町真行寺廃寺跡発掘調査報告』1985。

7）新潟県豊浦町教育委員会『真木山製鉄遺跡』1981。

8）赤沼英男・佐々木稔「金属学的解析からみた九州北部地域における中世出土鉄器の製法と流通」九州古文化研究会『古文化談叢』第30集、1993．8、p1155。

9）岡田正彦「考古学上よりみたる長野県下の製錬・鍛冶関係遺跡」『長野県考古学会誌』65／66、1992．3、p.52。

10）佐々木稔「ふたたび古代の炒鋼法について」『たたら研究』第27号、1985年、p40。

11）赤沼英男「古代から中世における北の鉄の変化」『北の鉄文化』岩手県立博物館、1990．10、p.74。

12）通商産業省工業技術院地質調査所『100万分の1日本地質図』、1987年。

13）葉賀七三男「富士見製鉄遺跡」日本鉱業協会誌、1987．9、p.570。

14）たとえば塩尻市立博物館『鉄鐸の謎を探る』1991。
神沢昌二郎「鉄鐸の新資料について」『長野県考古学会誌』50、1986．2、p.20。

表1　試料鉄器の化学組成と県下出土鉄器の調査例

No.	鉄器種類	遺跡名	遺構、年代	分析試料	化学成分(%) T.Fe	Cu	P	Ni	Co	Ti	推定炭素量(%)	非金属介在物[2]
1	鉄鐸	茅野市稗田頭A	3号住居址、平安	錆片	63.1	0.014	0.027	0.022	0.044	0.017	0.1	検出されず
2	はみ		〃	〃	66.8	0.009	0.088	0.015	0.029	0.032	0.1/0.2	〃
3	不明		14号住居跡、平安	〃	66.6	0.024	0.033	0.050	0.082	0.009	0.5/0.6	珪酸塩
4	鉄鏃	同市新井下	?号住居跡、平安	〃	63.57	0.013	0.06	0.004	0.009	0.014	0.1	検出されず
5	釘	塩尻市吉田川西	住居跡、90代	〃	—	0.006	0.288	—	—	0.036	—	ウスタイト＋非晶質珪酸塩[3]
6	刀子		住居跡、11C中頃	〃	—	0.019	0.078	—	—	0.017	—	〃
7	〃		土壙、12C前半	〃	—	0.58	0.246	—	—	0.018	—	〃
参考	なぎ鎌	八ケ岳権現岳檜峰神社台座下		メタル	—	<0.01	0.10	—	—	—	—	〃
		茅野市御社宮司遺跡	大型	〃	—	<0.01	0.154	—	—	0.144	—	〃
			小型	錆片	—	<0.01	0.37	—	—	0.133	0.1/0.1	チタン化合物

1）Cu、Pについては0.1%以上、NiとCoは0.0数%以上の分析値を太線枠で囲んで、始発原料鉱石が磁鉄鉱と推定されることを示した。
2）ここでいう非金属介在物は、鋼精錬の過程で分離しきれずに鋼中に残った微小な鉄滓である。チタン化合物が検出されれば脱炭材として砂鉄、ウスタイト＋非晶質珪酸塩ならば鉄鉱石粉を添加したことが推定される。
3）非晶質珪酸塩の組成はCaO-Al_2O_3-SiO_2系。

表2　平安期の鉄塊系遺物の化学組成例

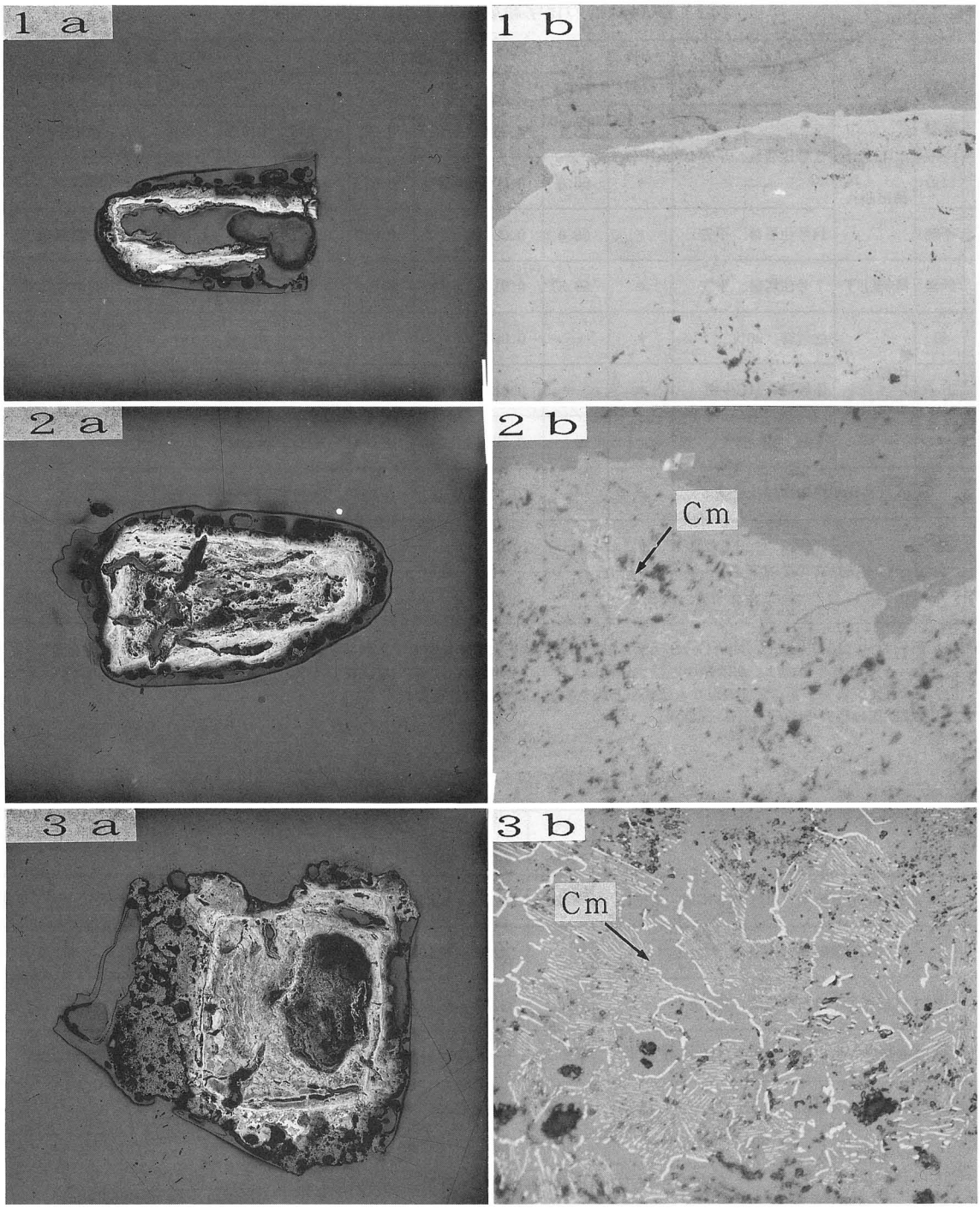
No.	鉄塊分類	遺跡名、年代	分析試料	化学成分(%) T.Fe	Cu	P	Ni	Co	Ti	ミクロ組織[2]
1	銑鉄	千葉県成東町真行寺廃寺跡8C末～9C初	メタル	C4.23	0.048	0.28	0.037	0.040	0.001	レーデブライト組織
2	〃	新潟県豊浦町真木山遺跡、〃	〃	C1.55	0.106	0.038	0.025	0.042	0.005	〃
3	〃	東京都多摩市別所遺跡、10C後半	〃	89.60	0.082	0.234	—	—	0.072	〃
4	鋼	長野県吉田川西遺跡跡住居跡、11C前半	メタル質	—	0.012	0.201	—	—	0.005	共折鋼に近い

注）No.4試料は推定炭素量0.7～0.8%で、CaO、Al_2O_2-SiO_2系の非金属介在物が検出されている。

表3　吉田川西遺跡出土の鋼精練滓の化学組成

No.	遺構、時期	化学成分(%) T.Fe	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	Al_2O_3	CaO	TiO_2	CaO*/SiO_2	CaO*/Al_2O_3	ミクロ組織(鉱物組成**)	脱炭材の推定
1	鍛冶工房跡、11C中頃	58.17	48.20	28.83	12.61	2.56	1.63	0.16	0.13	0.64	ウスタイト、ファヤライト、鉱石粒子	鉄鉱石
2	住居跡、11C中頃	54.75	61.08	10.01	15.96	3.97	1.21	3.71	0.08	0.30	ファヤライト、チタン化合物	砂鉄
3	住居跡、12C前半	52.88	47.60	22.40	19.96	4.21	0.55	0.24	0.03	0.13	炉壁材の反応生成物	—

＊No.1でのこれらの成分比は、炉壁材が主体のNo.3に比べて非常に高い。石灰造滓材が使用されたものと推定される。
＊＊鉱石粒子はスラグと反応して溶解の途中にある。チタン化合物はウルボスピネル。

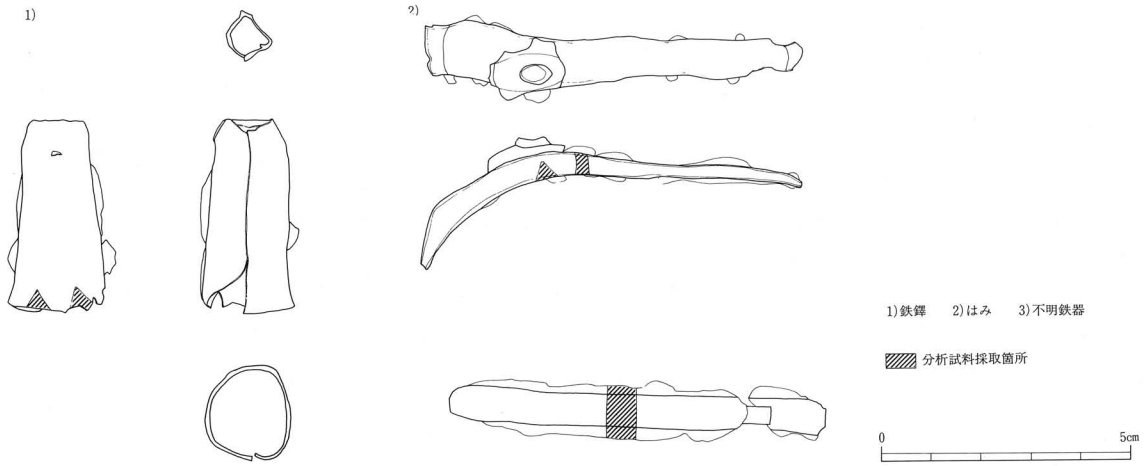


1）鉄鐸、2）はみ、3）不明鉄器

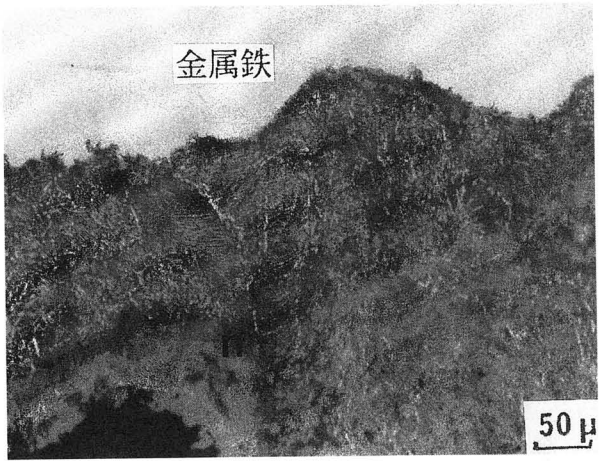
aは5倍、bは500倍

符号　Cm：セメンタイト

写真1　採取した錆片のマクロ・ミクロ組織

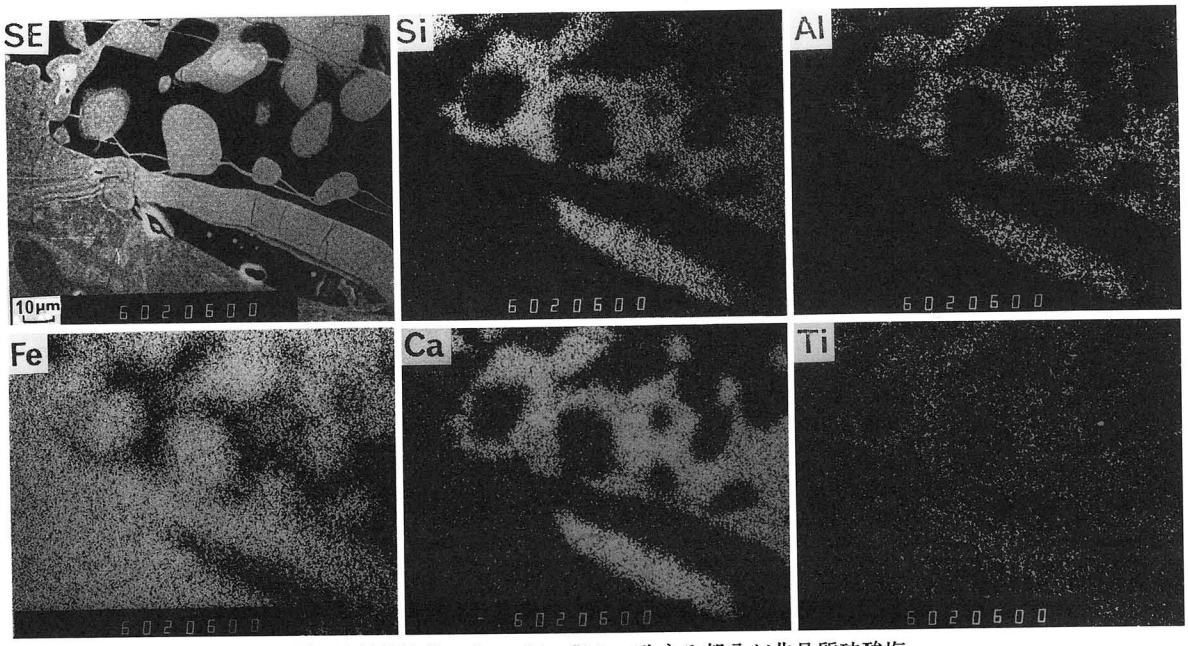


第1図　鉄器資料の計測図



◀写真2a

錆層中にセメンタイトが網目状に残っている。
元の鋼の推定炭素量は0.7～0.8%
nは非金属介在物



SE）試料電流像、Ca、Al、Siの一致する部分が非晶質珪酸塩

写真2b 鋼塊中非金属介在物のEPMA像

（吉田川西遺跡の例　伊藤 薫氏提供）

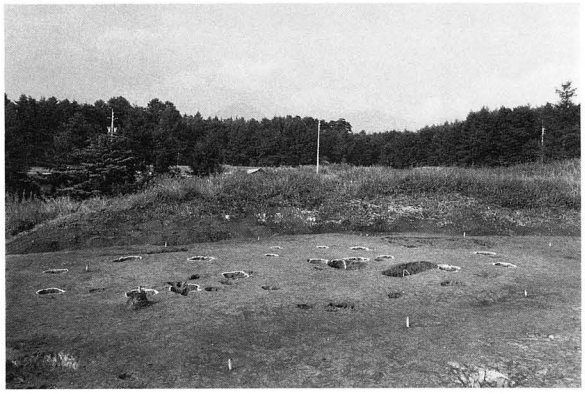
図　　版

◁1.遺跡航空写真（西より）

▽2.遺跡全景（東より）

3 ▽

4 ▽



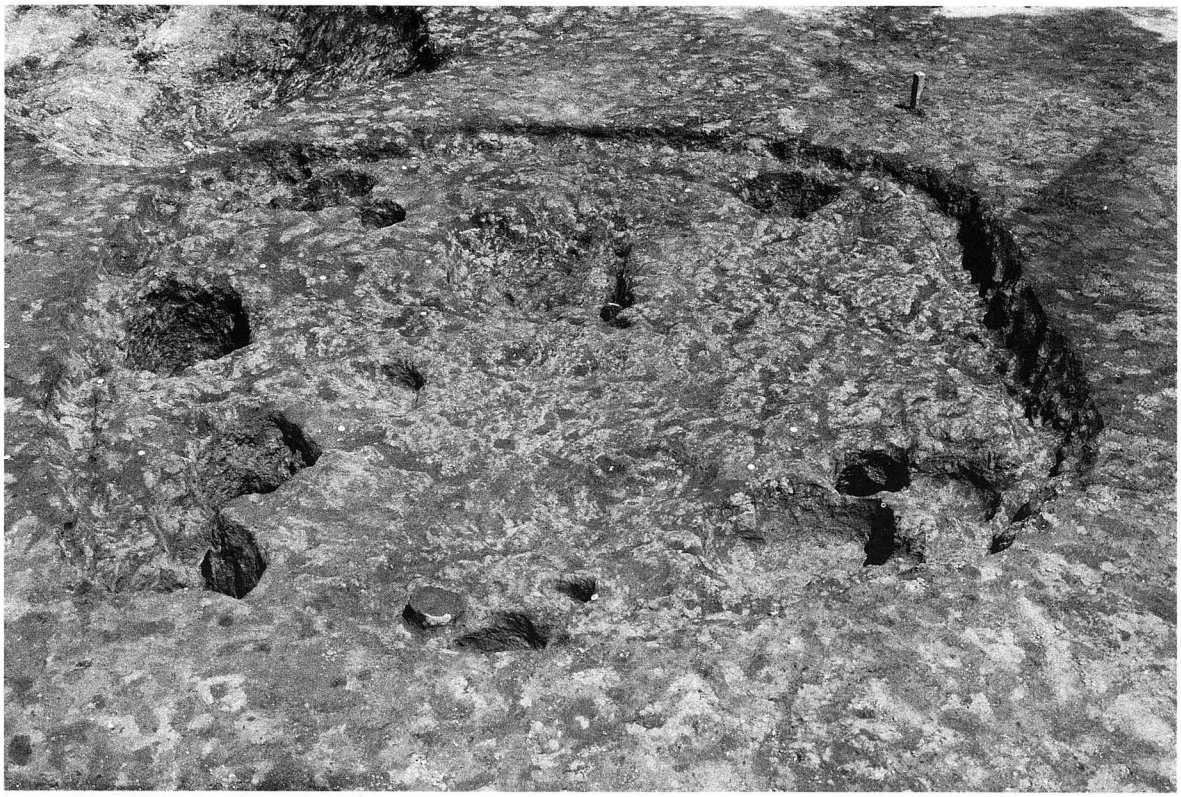
5 ▽

3.B区（西より）

4.C区（北より）

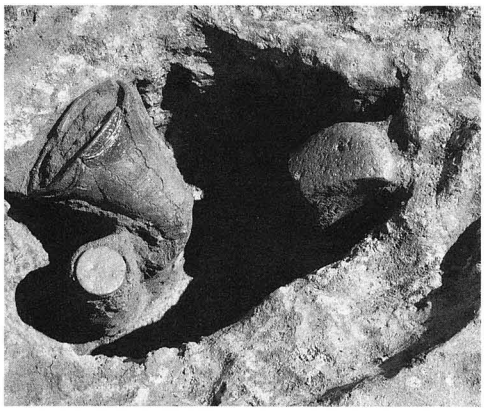
5.C区（南より）

図版 2



△1.第７号住居址（南より）

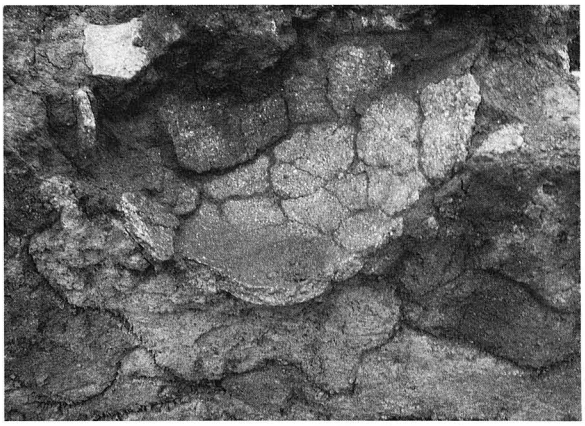
△2.第７号住居址遺物出土状況（南より）



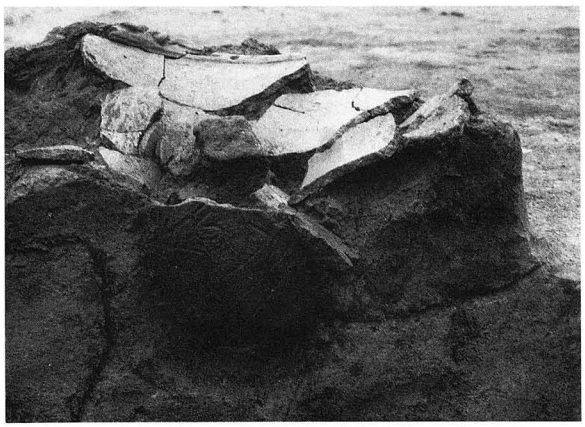
△3.第７号住居址P3遺物出土状況（北西より）

◁4.第５、６、７号住居址（南より）

△1.第 6 号住居址礫出土状況（西より。一部礫を取り上げた後の状況）



△2.第 5 号住居址土器埋設炉断面（南より）



△3.第 6 号住居址土器埋設炉断面（西より）

△4.第 9 号住居址礫出土状況（南より）

△5.第 9 号住居址土器埋設炉断面（北より）

図版 4

△1.第 9 号住居址
主柱穴配置（南より）

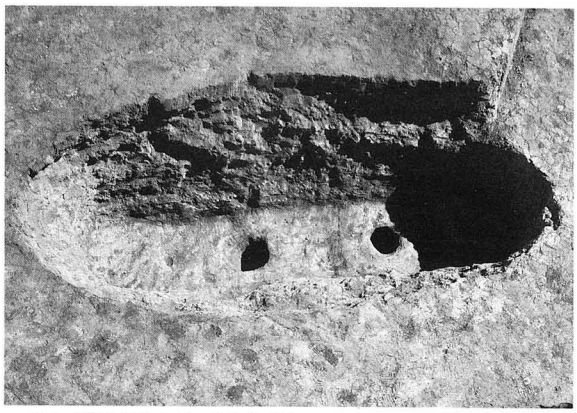
◁2.第10、11住居址
（東より、手前が第11
号住居址）

◁3.第 8 号住居址炉址、
礫検出状況（南西より）

△1.第 8 号住居址（南西より）

△2.第 1 号方形柱穴列（西より）

△3.第 2 号方形柱穴列（西より）



△4.第110号土坑（北より）

△5.第119号土坑（北より）

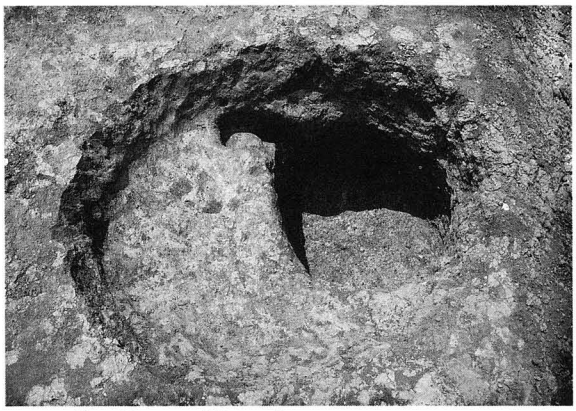
図版 6

△1.第１号土坑（東より）

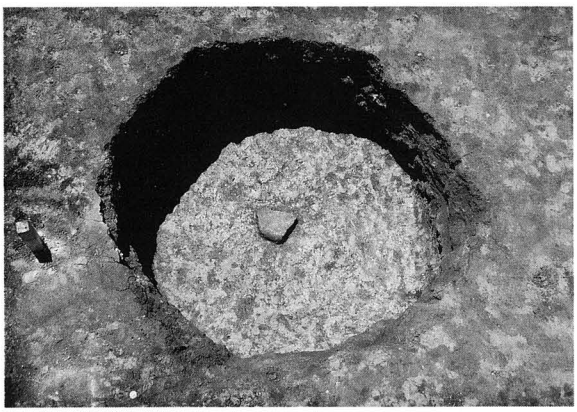
△2.第82号土坑黒耀石製石器出土状況（南より）

△3.第84号土坑（北より）

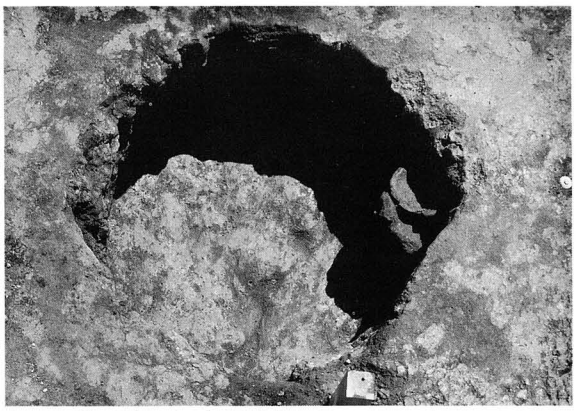
△4.第108号土坑（北より）



△5.第83号土坑（北より）



△6.第74号土坑（北より）



△7.第43号土坑（西より）

△8.第40号土坑（西より）

1．1号住居址（西より）▷

2．1号住居址カマド
▽　　（西より）

3．2号住居址（西より）▷

4．3号住居址（南より）▷

5．3号住居址カマド
▽　　（南より）

図版 8

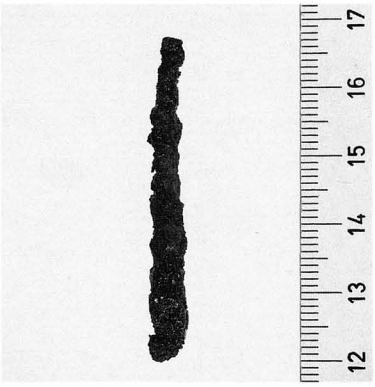
◁1. 4 号住居址（西より）

2. 4 号住居址カマド
（西より）▽

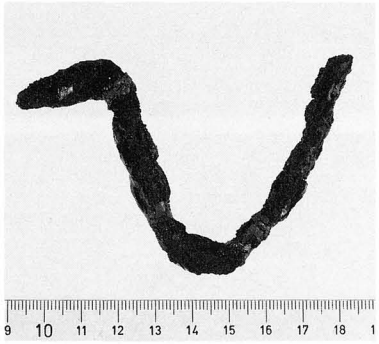
3 号住居址出土鉄製品

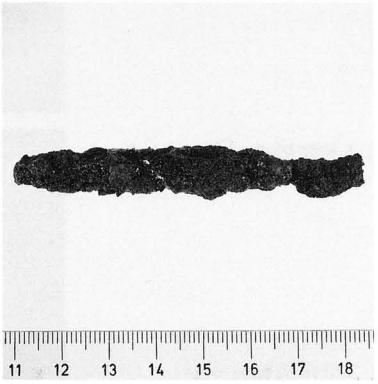
▽3.鎌、鉄鐸（右）

▽4. 3 の鉄鐸の舌

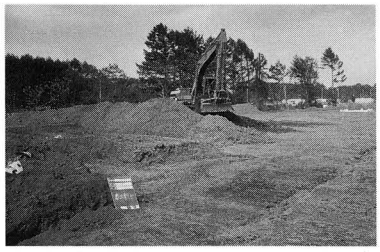


▽5.鉄鐸

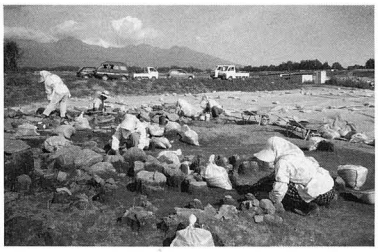




△6.馬具



△7.馬具



△8. 4 号住居址出土不明鉄器

△9.表土剝ぎ

△10.発掘風景

△11.発掘に携わった方々

報告書抄録

ふ り が な	ひえだがしら
書　　名	稗田頭A
副 書 名	平成6年度県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	柳川英司・功刀　司
編 集 機 関	茅野市教育委員会
所　在　地	〒391　長野県茅野市塚原二丁目6番1号　TEL0266-72-2101
発 行 年 月 日	西暦1995年　3月　15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
稗田頭A (ひえだがしら)	茅野市泉野 (ちのしいずみの) 槻木 (つきのき)	20214	91	36度 00分 06秒	138度 13分 43秒	19940520 ～19940902	4,000	県営圃場整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稗田頭A	集落跡	縄文中期 後期 平安	縄文 中期住居址 1軒 後期住居址 6軒 方型柱穴列 5基 土坑　77基 平安　5軒	縄文 中期　土器・石器 後期　土器・石器 土製円板 平安 土師器 黒色土器 灰釉陶器 緑釉陶器 鉄製品（鎌・鉄鐸・馬具他） 砥石	○平安時代の住居址より出土した緑釉陶器と鉄鐸・馬具 ○縄文時代後期の集落構成が把握できる。 ○平成4年度に続く2回目の調査

稗田頭A遺跡

——平成6年度県営圃場整備事業槻木地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書——

平成7年3月17日　印刷
平成7年3月20日　発行
編集　茅野市教育委員会
発行　茅野市教育委員会
長野県茅野市塚原2丁目6番地1号（0266）72-2101（代）
印刷　ほおずき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5（0262）44-0235